魔法科高校とチート転生者

カトポン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様の手違いにより死んでしまった俺はお詫びとして魔法科高校の劣等生の世界にチート能力を携え転生する事に！

十師族である九島家当主九島真言の三男・九島悠馬として転生した俺は念願の国立魔法大学付属第一高校へ入学するがそれが波乱に満ちた学校生活の始まりで!?

これはチート転生者の波乱万丈な学園ストーリーである。

目次

序章
プロローグ　審判の間 ―― 1
初年度の部　第1章　入学編～Ａｄｄｍｉｔｉｏｎ　ｉｎ　Ｍａｇｉｃ　ｈｉｇｈ　ｓｃｈｏｏｌ～
第１話　入学式それは兄妹の再会 ―― 4
第２話　七と九の十師族 ―― 9
第３話　一科生（ブルーム）と二科生（ウィード） ―― 15
第４話　特典の片鱗 ―― 21
第５話　テレビ電話は疲れます ―― 29
第６話　朝の鍛錬 ―― 33
第７話　Ｔｈｅ　２ｎｄ　Ｄａｙ ―― 39
第８話　一科生（ブルーム）と二科生（ウィード）の確執 ―― 46
第９話　Ｇｏ　Ｂａｃｋ　Ｈｏｍｅ ―― 55
第１０話　Ｔｈｅ　３ｒｄ　Ｄａｙ ―― 61
第１１話　司波達也ｖｓ服部刑部少丞範蔵 ―― 73
第１２話　タネ明かし ―― 82
第１３話　空間支配？いいや、ベクトル操作だ ―― 88
第１４話　司波家にお邪魔します ―― 94
第１５話　勧誘という名の馬鹿騒ぎ ―― 98
第１６話　放課後ティーパーティー ―― 111
第１７話　お詫びを兼ねた七草真由美との週末デート ―― 128
第１８話　憂鬱なる七草邸でのお食事会 ―― 137
第１９話　Ｔａｒｇｅｔｅｄ　Ｔａｔｓｕｙａ　Ｓｈｉｂａ＆Ｙｕｍａ　Ｋｕｄｏ ―― 146

序章

プロローグ　審判の間

俺の名前は林拓実。何処にでも居るようなアニオタの高校２年生だ。

この日は朝から何処かの「不幸だ～!!」の台詞で有名な主人公並に不幸だった。まず、目覚まし時計が寝ている最中に壊れたのかアラームが鳴らず、寝坊＋飯抜きで自転車を死ぬほど全力で漕いだが、健闘むなしく遅刻となり、初っ端から先生に叱られ、昼は購買のパンでも買おうとしたら俺の目の前で丁度売り切れ昼飯も抜きとなり、この辺りから空腹で死にそうになり、学校から帰ろうとしたら土砂降りの雨が降り、傘を持って来ていなかった俺はそのままずぶ濡れになって、自転車を漕いでいる最中にトラックに跳ねられ、意識を手放した。

どれくらい経ったのだろうか。目を覚ますとそこはさっきまで土砂降りだった街でも無ければ病院などでも無く辺り一面が真っ白な空間だった。

「何処なんだ？ここ・・・」

「目を覚ましたようですね。林拓実さん」

後ろから声をかけられてドキッとした俺は後ろへ振り向くとそこには

見た目は完全に人なのに本当に人なのかと疑ってしまう程整った顔立ちをした女性がいた。

「あんたは誰だ。それにどうして俺の名前を知っている」

「そう焦らないでください。順を追って説明しますから」

女性はそこで一息つくと俺の質問に答え始めた。

「まず私ですが所謂神様と呼ばれている者です。そして此処はこの世とあの世の狭間の世界・・・通称『審判の間』と呼ばれている所です」

「てことは、俺はトラックに跳ねられたあの時に死んで今は神様と対面してるって訳か」

「えぇ、理解が早くて助かりますがその・・・貴方が死んだのはこちら

のミスでして・・・」
「は？」
「実は人はどれくらい生きるのか事前に決められているのですが、今日たまたま貴方とは同姓同名の別人を迎えに行く予定だったのですが、手違いで貴方を呼んでしまったのです」
　つまり俺は本来ならもっと生きるはずが神様のミスで死んじゃったって事なのか？俺、そんな些細な事で人生終了したの？まだまだやりたい事とか沢山あったのに・・・
「それで、神様の手違いで死んだ俺はこの後どうなんの？天国にでも行くの？」
「いえ、こちらの手違いのお詫びとして貴方を転生させ第２の人生を送って貰おうかと」
「転生出来るのか!?」
「はい。本来なら一部の人にしか認められていないのですが今回は特例という事で転生する事が出来ます」
「何処の世界に行くんだ？」
「『魔法科高校の劣等生』の世界です」
　マジか。めっちゃ好きなラノベだが実際に行くとなるとかなり危なそうだな。主にテロとか横浜騒乱とかが
「それと特典ですがどうしますか？」
「特典も付くの？」
「はい。制限なども特に無いので自由に決めていただいて良いですよ」
「う～ん・・・それなら、『とある魔術の禁書目録』の第１位と第２位の能力、一方通行（アクセラレーター）と同等の演算能力と起動式を読み取る能力、後はサイオン保有量を限界ギリギリまで多くして、魔法師としての才能が人外レベルの十師族で」
「凄いチートっぷりですね。今から行く世界の主人公に匹敵しますよ」
「こういうのに憧れてたんで」
「分かりました。それでは転生を始めますね」

「あ、前世の記憶ってどうなるんですか？原作知識とか一応残しておきたいので」
「大丈夫ですよ。前世の記憶は物心がつく頃には自然と思い出します」
「そうですか。ありがとうございます」
　程なくして俺の体も光に包まれる。あと少しで俺は『魔法科高校の劣等生』の世界に転生するであろう。
「それでは行ってきます」
「ええ、行ってらしゃい。良き人生を」
　俺の体を包んでいた光が視界を染め上げると俺の意識は遠のいて行くのであった。

初年度の部　第１章　入学編～Ａｄｄｍｉｔｉｏｎ　ｉｎ　Ｍａｇｉｃ　ｈｉｇｈ　ｓｃｈｏｏｌ～

第１話　入学式それは兄妹の再会

魔法。それが空想の産物ではなく現実の技術となってから一世紀が経とうとしていた。

時は二十一世紀末―西暦２０９５年。未だ統一される気配すら見せぬ世界の各国は優れた魔法の才能を有する者「魔法技能師」の育成に競って取り組んでいる。当然日本もその例に漏れる事なく現在第一から第九までの魔法科高校が存在している。

舞台となるのは国立魔法大学付属第一高校。毎年、国立魔法大学へ最も多くの卒業生を送り込んでいる高等魔法教育機関として知られている。それは同時に、優秀な魔法技能師（略称「魔法師」）を最も多く輩出しているエリート校ということでもある。

そして、そんなエリート校に１人の少年が門をくぐろうとしていた。

◇◇◇

あれから１６年が経った。俺は十師族の一つである九島家当主、九島真言の三男、九島悠馬へと転生した。３歳ぐらいの時に前世の記憶を思い出したり、特典として指名した『一方通行』と『未元物質』が強過ぎたり、俺の祖父にあたる九島烈（他の人からは老師、九島閣下って呼ばれている）が孫である俺の事を溺愛し過ぎて俺の前だとキャラ崩壊したり、俺の従姉である響子さんからハッキング技術を学んだり、爺ちゃん（九島烈）のコネで国防陸軍第１０１旅団・独立魔装大隊へ特尉として入隊したり、七草家の長女である七草真由美と仲良くなったりとイベントがひっきりなしだったが今日まで何不自由なく（家柄の関係で妬みとかはあったが）過ごして来た。そして、俺の頼みで東京にある第一高校に入学したいと言った時も反対する事なく応援してくれたのだから本当に恵まれている。そんな俺だが今どうし

ているかというと・・・
「はぁ～・・・まさかこんなに早く着くなんて・・・」
　東京に行くにあたり九島家が用意してくれたマンションで1人暮らしをする事になった俺は第一高校の場所を詳しく知らず携帯端末のナビ機能を使いながら早めにマンションを出たのだが想像以上に近くて入学式が始まる2時間前に第一高校に着いてしまった。
（どうしよう?帰ろっかな・・・）
「納得出来ません!!」
　一回帰ろうとした俺に聞き覚えのある声が聞こえてきた。俺は声のした方向に向かうと俺の予想通り二人の人物がそこにはいた。
「何故お兄様が補欠なのですか?入学の成績はトップだったじゃありませんか!本来ならば私ではなく、お兄様が新入生総代を務めるべきですのに!」
　激しい口調で食って掛かる女子生徒の名は司波深雪。人の目を惹かずにはおけない、十人が十人、百人が百人認めるであろう可憐な美少女である。
「何処から入試結果を手に入れたのかは横に置いておくとして・・・魔法科学校なんだから、ペーパーテストより実技が優先されるのは当然じゃないか。それに俺の実技能力は深雪も良く知っているだろう?自分じゃあ、二科生とはいえよくここに受かったものだと、驚いているんだけどね」
　その司波深雪を何とか宥めようとしている男子生徒の名は司波達也。
　一見ピンと伸びた背筋と鋭い目付き以外、特徴が無さそうな平凡な容姿に見えるが、よくよく見れば深雪程では無いが精悍に整った顔立ちをした少年だ。そして、会話から分かる通りこの二人は兄妹であり俺とこの兄妹はとある事情で知り合いなのである。
「はぁ・・・こんな朝っぱらから兄妹二人で何を言い合ってんだ?」
「ッ!?誰だ!!・・・って悠馬?」
「え!?悠馬さん!?どうして此処に?」
「どうしてって、見りゃ分かる通り入学式に参加する為だけど」

「九島家は奈良に本邸があった筈だが・・・」
「そうだけど、俺が父さんと母さんに頼み込んで此処に受験したんだ。それで合格したってわけ」
「そうだったのか・・・」
「それでさっきも言ったが何を言い合って・・・って、深雪？」
　深雪の顔を見た俺は途中で言葉を止めてしまった。深雪の顔は納得いかないという顔からもう怒っているようにしか見えない顔にシフトチェンジしていた。
「どうしてなのですか!!?お兄様が新入生総代ではなく補欠なのも実技試験の評価方法上一万歩譲って認めます」
「一万歩も譲らないと認めないのね・・・」
「ですが、悠馬さんは実技試験の評価方法を踏まえても私と同等以上の評価を受けている筈です。それなのにどうして悠馬さんではなく私なんですか!?」
「いや、俺はその・・・ペーパーテストの方をちょっとやらかしてしまいまして・・・」
　深雪の迫力にたじろいてしまった俺はまるで初対面の人のように丁寧な口調になってしまった。
「お二人ともそんな覇気の無い事でどうしますか！勉学も体術もお兄様や悠馬さんに勝てる者などいないというのに！魔法だって本当なら」
「深雪！」
　達也に強い口調で名前を呼ばれ、俺と達也の弱気発言を厳しく叱咤しようとしていた深雪はハッとした顔で口を閉ざした。
「分かっているだろ？それは口にしても仕方のないことなんだ」
「・・・申し訳ございません」
　達也は深雪の項垂れた頭にポンと手を置き、艶やかな癖のない長い黒髪をゆっくりと撫で始めた。
「深雪。お前が俺の事を思っていてくれる気持ちは嬉しいし俺もお前の事を思っている」
「お兄様・・・そんな、『想っている』だなんて・・・」

達也の言葉に何故か頬を赤らめる深雪。俺は達也に近づき深雪にバレないよう気をつけて話す。
「達也、良いのか？何か二人の間に無視出来ないような齟齬が生じてる気がするんだが？」コソコソ
「今はそれどころじゃ無いだろ。とりあえず、深雪を納得させないと何をしでかすか分からん」コソコソ
確かに達也の言う通りだ。このままだと深雪が第一高校の教員に直訴するかもしれないし最悪直訴された教員が氷漬けで発見されるなんていう可能性も無いとは言い切れない。俺も達也も此処で生じた齟齬は棚に上げ差し迫った問題の解決を優先するという結論に至った。
先ずは妹である深雪の扱いに長けた達也が先陣を切る。
「深雪。お前が答辞を辞退しても、悠馬は分からないが俺が代わりに選ばれることは絶対に無い。この土壇場で辞退したりすれば、お前の評価が損なわれることは避けられない。深雪も本当は分かっているんだろ？お前は賢い娘だから」
「それは・・・」
「それにな、深雪。俺は楽しみにしているんだよ。お前は俺の自慢の妹だ。可愛い妹の晴れ姿を、このダメ兄貴に見せてくれよ」
「頼りない友達にもな？」
「お兄様や悠馬さんはダメ兄貴でもましてや頼りなくなんかありません！・・・ですが分かりました。我儘言って、申し訳ありませんでした」
「謝ることでもないし、我儘だなんて思ってないさ」
「俺も気にしてないから大丈夫だよ」
「それでは、行って参ります。本番は見ていてくださいよお兄様、悠馬さん」
「あぁ、行っておいで。本番は楽しみにしているから」
「頑張れよ、深雪」
はい、では、と会釈をした深雪は講堂の中へと入っていた。これでもう大丈夫だろう。俺は溜め込んでいた息をそっと吐き出した。

この時、俺の目に時計が写ってしまったのはきっと偶然だったのだろう。入学式が始まるまでまだ2時間もある事をすっかり忘れていた。
「なぁ、達也」
「なんだ、悠馬」
「まだ始まるまで2時間もあるんだけど、俺達これからどうすればいいんだ？」
「俺に聞かれても困る」
場所を詳しく知らず早めに登校した少年と、総代を渋る妹の付き添いでリハーサル前に登校した少年は、入学式が始まるまでの2時間をどう過ごすか、悩み、途方に暮れるのだった。

第2話　七と九の十師族

深雪を送り出した俺と達也は入学式が始まるまで近況報告をしながら校内をぶらぶら歩き回っていた。

第一高校は本棟、実技棟、実験棟の3校舎。内部レイアウトが機械可変式の講堂兼体育館。地上3階・地下2階の図書館。二つの小体育館。更衣室、シャワー室、備品庫、クラブの部室として使われている準備棟。食堂兼カフェテリア兼購買も別棟になっており、それ以外にも大小様々な建物が敷地内に立ち並んでいる。高校というよりは大学のキャンパスのような趣きがあった。

とはいえ、学校施設を利用する為のＩＤカードは入学式終了後に配られる事になっているし、来訪者の為のオープンカフェも、混乱を避ける為か営業していないので一通り施設（外見だけ）を見回った俺達は歩いている最中に発見したベンチに腰を降ろす事にした。

「なぁ、悠馬」

「ん？どうした？」

「お前、ペーパーテストをやらかしたとか言ってたが何をしでかしたんだ？」

「あぁ、あれ？別に大した事じゃ無いんだが・・・」

「勿体ぶらずにさっさと答えろ」

「じゃ手短に言うわ。解答がズレてた」

「・・・は？」

「だ～か～ら～、テストの解答がズレてた教科があったの！」

筆記試験前日にバタバタ（主に移動関係で）していた俺は、まともに休息が取れずに筆記試験に取り組んでいた。俺は寝不足で寝ぼけていたのか一部の教科で解答がズレて（酷いものだと９０点以上）しまっていたのだ。因みにこれに気づいたのは自己採点をしている時だった為気づいた時にはもう答案用紙は手元に無かったりする。

「しかしお前でもそんな事やらかすんだな」

「達也、お前は俺の事を何だと思ってたんだよ」

「少なくとも人だとは思った事は無いな」

「おい！」
「スーパーコンピュータ並みの高度な計算を暗算でやってのけるのは人間と呼べるか？」
「じゃあ逆に聞くけどさ、人間じゃ無かったら俺はなんなの？」
「化け物か人外のどっちかだな」
「悪魔とか神とか呼ばれてる奴には一番言われたく無いわ！」
などと言い合っていたが流石に会話のネタが尽きるとお互い何も言わずに携帯端末を弄り出した。
式の運営に駆り出されているのだろうか。在校生が俺達の前を通り過ぎて行く。その人達の制服には皆、俺にあって達也には無い８枚花弁のエンブレムが付いていた。
『あの子、ウィードじゃない？』
『入学式だからってウィードの分際で張り切ってんのか？』
『所詮補欠なのにな』
『あのブルーム、なんでウィードなんかと一緒に居るんだ？』
『変な奴』
聞きたくない会話が聞こえてくる。
ブルームとウィードというのは、一科生と二科生の格差を表す隠語だ。この機会に一科生と二科生について説明しよう。
第一高校は一学年の定員が２００名で、その中から魔法力の高い１００名を一科生、残りの１００名を二科生としている。この一科生の制服には８枚花弁の刺繍がされている為、花冠とし「ブルーム（ｂｌｏｏｍ）」と呼ばれている。いっぽう二科生の制服にはこれが無い為、花の咲かない雑草と揶揄して「ウィード（ｗｅｅｄ）」と呼ばれている。
それと一科生にはある特権がある。それは教員から魔法実技の個別指導を受ける権利だ。国立魔法大学の付属教育機関である第一高校は、魔法技能師育成の為の国策機関だ。国から予算が与えられる代わりに、一定の成果が義務付けられている。この学校のノルマは、魔法大学、魔法技能専門高等訓練機関に、毎年１００名以上の卒業生を供給すること。ただこの国にはそんな余裕はなく万年人材不足状態だ。そんな状態からノルマを達成させようと思ったら当然才能ある

者を優先せざるを得なくなる。その為二科生には最も重要な魔法実技の個別指導を受ける権利が無い為、独力で学び、自分で結果を出さなければならない。それが出来なければ、普通科高校卒業資格しか得られない。魔法科高校卒業資格が与えられず、魔法大学には進学出来ないという訳だ。

とはいえ、一科生と二科生の違いは、先述した制服のエンブレムの有無と、個別指導を受ける権利が無いのと、授業での教員の有無だけでカリキュラムは同じであり、授業に参加（オンラインも含む）や、施設の使用、資料の閲覧は可能である。

ただ、このように優劣が明確に付けられると当然差別なんかも発生する。二科生を「ウィード」と呼ぶことは建前上禁止されているが、半ば公然たる蔑称として、二科生自身の中にも定着している。二科生自身が、自分達をスペア部品でしかないと認識してしまっている。二科生にも実技試験では分からない才能があるかもしれないのに。それこそ俺の隣に座っている達也のように。

携帯端末にある時計を確認するといつの間にか入学式まであと３０分となっていた。そろそろ行こうと達也に声を掛けようとすると

「・・・悠馬くん？」

頭上から久しぶりに聞いた声が降ってきた。まず目に付いたのは制服のスカート。それから、左腕に巻かれた幅広のブレスレット型ＣＡＤ。

ＣＡＤ―正式名称は術式補助演算機（Ｃａｓｔｉｎｇ　Ａｓｓｉｓｔａｎｔ　Ｄｅｖｉｃｅ）。デバイス、アシスタンスとも呼ばれ、この国ではホウキ（法機）という呼称も使われている。詳しい事はいずれ解説するが簡単に言うと魔法を発動する際の必須ツールだ。

そしてこの学校では、生徒でＣＡＤを常時携行が認められているのは、生徒会役員と特定の委員会のメンバーのみ。

視線を上げると相手の胸には当然、８枚花弁のエンブレム。更に視線を上げ顔を見る。俺が立ち上がれば頭一つ分は低いであろう黒髪のふわふわした巻き毛ロングに赤い目の小柄な女子生徒が目の前に立っていた。

「お久しぶりです、真由美さん」
「もう、真・由・美でしょ。それに敬語もダメって言ってるじゃない」
「分かった分かった真由美。だからそう拗ねるなって」
　頬を膨らませてそっぽを向いた女子生徒は七草真由美。俺と同じ十師族の一員である七草家の長女であり第一高校の生徒会長である。俺と真由美が出会ったのは真由美の誕生日パーティーに招待された時で、その時俺は5歳、真由美が7歳だった。それからというのも七草家にお邪魔したり、誕生日パーティーに招待したりされたりと親交を深め幼馴染と呼べる関係になったのだ。
「どうして私に第一高校に入学するって悠馬くんの口から教えてくれなかったのかな～？私がそれを知ったの今年の新入生一覧表を見た時なんだけど」
　真由美の顔は笑顔だったが目が全く笑っていなかった。心なしか黒いオーラも発生している。
（これは何とかしないとまずそうだな）
「真由美を驚かせようと思ったんだよ。真由美の驚く顔が見たかったから」
　これは決して嘘では無い。こういうサプライズを一度で良いからやってみたかったのもあるが真由美の驚く顔が見たかったのは事実だ。
「そうだったのね。お姉さん、悠馬くんに忘れられたんじゃないかって不安だったのよ」
「ごめん。でも俺が真由美を忘れる事なんて無いから」
「うん」
　あれ？俺なんか忘れてるような・・・？なんだっけ？
「悠馬、この先輩を知っているのか？」
　あ、達也の事すっかり忘れてたわ。
「あぁ、この先輩は・・・」
「初めまして。私は第一高校の生徒会長を務めています、七草真由美です」
「俺、いえ、自分は、司波達也です」

「司波達也くん・・・そう、貴方が、あの司波くんね・・・」
　達也が自己紹介すると、真由美は小悪魔的な笑みを浮かべた。真由美は性格も小悪魔的な為かその笑みがとても似合っている。
「先生方の間では、貴方の噂で持ちきりよ。実技試験は振るわないものの筆記試験では７教科平均９６点。特に圧巻だったのは魔法理論と魔法工学。合格者の平均点が７０点に満たないのに、両教科とも小論文を含めて文句なしの満点。前代未聞の高得点だって」
「ペーパーテストの成績です。情報システムのなかだけの話ですよ」
　達也は苦い愛想笑いを浮かべながら、なんて事の無いように言う。
　対して真由美は、達也の言葉に対して、笑顔で首を左右に振った。
「そんな凄い点数、少なくとも、私には真似出来ないわよ？私ってこう見えて、理論系も結構上の方なんだけどね。筆記試験と同じ問題を出されても、司波くんのような点数はきっと、取れる気がしないわ」
「はぁ・・・ありがとうございます」
　達也の話が終わり、次は貴方の番ねとでもいうかのように真由美は俺の方を見る。
「一方の悠馬くんはね～」
「うっ」
「実技は文句なしの最高評価で正直今年の新入生総代である司波さんよりも評価高かったんだけどね。なんで筆記試験で解答がズレるなんておっちょこちょいなミスをするかな。しかもそれが無かったら全教科満点の可能性があったのに」
「ううっ」
「ズレて無かったら筆記試験全教科満点で実技試験が最高評価のオールパーフェクトだったのにね。創設初の偉業を成し遂げれたかもしれないのに」
「うううっ」
　心の傷をほじくり返され俺のライフが０になりそうだ。
「私は悠馬くんの答辞を見たかったのにな」
「会長、その辺にした方が良いですよ。それ以上やると悠馬がその辺で野垂れ死にます」

「そうね。私も少し言い過ぎたわ。二人とも、入学おめでとう」
「「ありがとうございます」」
「もう開場してるからそろそろ行った方が良いわよ」
「分りました。では」
「またな、真由美」
俺達は真由美に別れを告げ入学式が行われる講堂に向かうのだった。

第3話　一科生（ブルーム）と二科生（ウィード）

俺達が講堂に到着した時には、既に席の半分以上が埋まっていた。席の指定は特に無い為、最前列に座ろうが真ん中に座ろうが端に座ろうが自由の筈なのだが

「差別意識持つの早過ぎだろ」

前半分が一科生、後ろ半分が二科生にきっちり分けられていた。もう呆れてため息しか出ない。

「悠馬、俺達も此処で別れよう」

「そうだな。ここまで差別意識を持ってると一緒にいたら目立ちそうだからな」

入学初日から目立つのだけは俺も達也も避けたかった。それに達也は新入生総代である深雪の兄、俺は十師族の家系であり、かつては「最高にして最巧」として謳われた「トリック・スター」の異名を持っていた九島烈の孫なのだ。十師族というだけでも注目されるのにあの老師の孫という肩書きもプラスされているので何もしていなくても目立つのだ。

「悠馬、1つ頼みたい事があるんだが良いか？」

「俺に出来る事なら」

「深雪の事を頼みたいんだ」

「深雪？あぁ、一緒に居てやれって事か？」

「そういう事だ。お前が深雪と一緒にいれば深雪が不快になるような奴は寄ってこないだろ」

「別に構わないが俺が深雪と一緒のクラスになる保証は無いぞ」

「大丈夫だ。お前と深雪は成績優秀だから余程な事が無い限りA組になれる」

「そこまで言うなら引き受けるよ。俺とお前の仲だしな」

「助かる。それじゃまた後で」

「あぁ」

達也と別れると俺は一科生が固まっている前の方に行く。とはいっても来るのが遅かったのかもう席が殆ど空いていない。しかも

空いてる席が全部隣が女子だった。
俺はため息をついて、仕方なく空いている席の中で一番近い所に座る事にするのだった。
◇◇◇
「あぁ～入学式まだ始まらないの～？」
「ほのか、少しは落ちつけないの？」
「だって、もう席に座ってからどれほど経ったと思ってるの!?私、待ちくたびれたよ！」
「もう少しで始まるから我慢して」
私の名前は光井ほのか。今年からこの第一高校に入学する一科生です。得意な魔法は苗字の『光井』の通り光波振動系（光に干渉する魔法）が得意なの。
そして、私の隣にいるのが親友兼ライバルの北山雫。大出力の振動・加速系魔法が得意分野でしかも雫のお父さんは大実業家だから所謂ご令嬢・・・分かりやすく言うとお嬢様なんだよ。
今は入学式が始まるまで雫と2人でお喋りしてるんだけど中々始まらなくて退屈してるんだ。
（早く始まらないかなぁ・・・）
「あの～隣座っても良いですか？」
「ふえぁ!!!!」
ぼーっとしていた私はいきなり声を掛けられて思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。声を掛けられた方を見ると1人の男子生徒が立っていた。
その男子生徒を見た私は思わず見とれてしまった。顔立ちは非常に良く整っていて男子にしては長め（耳にかかるくらい）の黒髪は誰が見ても分かるくらいサラサラだった。肌は女子なら誰もが羨むような色白だが不健康には見えないギリギリのバランスを保っており瞳はまるで海のように綺麗な青目だった。
（こんなカッコイイ人がこの学校に居たの!?）
同年代どころか今まで見た人達の中でもダントツでカッコイイ。しかもそんな人に声を掛けられたのだと思うと途端に顔が赤くなる

のが分かる。しかも、チラッと横を見るが雫はいつも通りの無表情だった。
（なんで雫はこんなカッコイイ人が居ても無表情でいられるの!?）
「凄く顔赤いんですけど大丈夫ですか？」
「だだだ、大丈夫ですよ。そそ、それと隣に座っても大丈夫なので」
「ありがとうございます」
　そう言って声を掛けてきた男子生徒は私の隣の席に腰を下ろした。もっとこの人と話したいと思った私は勇気を振り絞って声を掛ける事にした。
「あ、あの私、光井ほのかって言います。それで隣にいるのが親友の雫です！」
「よろしく。呼ぶ時は雫で良いから」
「私もほのかって呼んで良いですよ。あとタメ口良いですから」
「分かった。これからよろしくな。ほのか、雫」
　そうやってニコッとしながら言われると私の心臓のさらに速くなってしまった。
「あ、まだ名前言ってなかったね。俺は九島悠馬。悠馬で良いから」
　九島・・・悠馬・・・!?それって『数字付き（ナンバーズ）』どころか十師族って事!?確かに九島家の三男が第一高校に入学するかもみたいな噂があったけど本当だったの!?
「悠馬さんの『くどう』はあの『九島』？」
「そうだよ。数字が付いてる十師族のやつ」
「てことは、悠馬さんの祖父はあの・・・」
「そ、九島烈は俺の爺ちゃんだよ」
　今でも『老師』と敬意を持って呼ばれてる人が悠馬さんの祖父。私、凄い人と知り合っちゃったんだ・・・。
「お、そろそろ入学式が始まるみたいだぞ」
　悠馬さんが言い終えると、司会が進行し入学式が始まった。
◇◇◇
　入学式が進行し、いよいよ新入生総代である深雪の答辞が始まっていた。

肝心の答辞の内容は、予想通り見事なものだった。「皆等しく」とか「一丸となって」とか「魔法以外にも」とか「総合的に」とか、結構際どいフレーズが多々盛り込まれていたが、深雪の容姿が大半の人をそれらのフレーズを気づかせず、また気づいたとしてもそれを上手く建前でくるんだ話術で、刺を一切感じさせなかった。

そして、俺は入学式が終わるとほのか達と別れすぐに深雪の元へ向かう。今ならまだ人垣が出来ていないから行ける筈だ。ＩＤカード？そんなの後回しで良いだろ。深雪になんかあったらあのシスコン兄貴に文字通り消されかねんからな。

「深雪！」

「悠馬さん！」

深雪は満面の笑みで俺に駆け寄ってきた。チラッと後ろを見ると後ろの人垣（ついさっき出来たばっか）から妬ましい視線が俺に向けられる。きっと俺が深雪と仲が良いのが気に食わないのだろう。

「悠馬さん。どうでした？私の答辞は」

「あぁ、とても良かったよ。きっと達也も俺と同じ事思ってるよ」

労いの言葉共にポンと深雪の頭に手を置くと深雪は顔を赤くしたが嬉しそうだ。深雪は重度のブラコンだが長い付き合いからか達也には一歩及ばないものの（達也には勝てる訳が無い）それでもかなり好かれている方だ。

「あら、司波さん。それに悠馬くんも」

「七草真由美生徒会長！」

「真由美、どうしたんだ。こんな所で」

「丁度良かったわ。２人に用事があったの」

深雪だけじゃなく俺も？てっきり深雪を労いに来ただけかと思っていたが俺もとなると一体なんの用事なのだろうか？

「まずは、司波さん。素敵な答辞だったわ」

「ありがとうございます」

「『等しく』、『一丸となって』、『魔法以外にも』」

「！」

流石、生徒会長しているだけあって深雪の際どいワードにも気付く

もんなんだな。
「なかなか際どい言葉を上手く織り交ぜていたわね。気づいた人なんてほんのごく一部の人なんじゃ無いかしら」
　そう言って俺にこっそりウインクしてるって事は「悠馬くんも気付いてたでしょ？」って事なんだろうな。俺は小さく頷く。
　一方、深雪はというと、際どい言葉を入れた事に気づかれ驚いているようだった。
「そ、それは・・・」
「あぁ、ごめんなさい。責めている訳じゃないのよ、むしろ逆。私はそういう人材を探しているの。そして、それに気付けるような人もね」
　労いかと思ったら生徒会への勧誘だった。しかも、深雪だけでなく俺も生徒会へ勧誘したいらしい。
　そのまま、俺と深雪と真由美の３人で、話し込んでいたのだが・・・
「会長、お話中失礼します」
　後ろの人垣からどっと沢山の生徒（主に男子）が近づいてきた。話の中に割り込んでまでこいつらは深雪と話したいのかよ。マナーを守れていない時点で深雪の好感度が上がる事は絶対に無いのにな。
「司波さんさっきの凄かったですよ～」
「綺麗で頭も良いなんて！」
「貴方のような素晴らしい方と同学科に入れる栄誉を・・・」
「ブルームの名の通り我が一高に咲き誇る花・・・」
　とはいえ、深雪に話しかけている連中はそんな事もお構いなしにお世辞を述べまくっている。顔にこそ出てないが内心うんざりしている事だろう。
「真由美」
「なに？悠馬くん」
「なんか適当な理由を見つけて此処から移動出来ないか？このままだと話は先に進まないし、深雪には良い事が一つも無いから」
「う～ん、そうは言ってもな～。移動してきたら追ってくる人も多いだろうから、気休めにしかならないし～・・・そうだ！悠馬くんって

ＩＤカード貰った？」
「いや、まだだけど・・・そうか、そこなら寄ってくる奴も少なくなるかも」
「じゃあ私が助け舟を出しに行くから」
　真由美は深雪の方へと向かい内容は聞き取れ無かったが何か話すと深雪と共に帰って来た。どうやら、作戦は無事成功したようだ。
「ありがとうございます、悠馬さん。助け舟を出していただいて」
「気にしなくて良いよ。こっちだって俺の用事に付き合わせちゃった訳だし」
「そんな。マナーも知らない人の話を聞くより悠馬さんの用事に付き合う方が絶対良いです」
「そう言ってくれると嬉しいよ。それとＩＤカード貰ったら一緒に達也の所に行こっか。真由美もきっと良いって言ってくれるし」
「はい」
　こうして、深雪を救出した俺達は、人が寄ってこないようにする為に俺のＩＤカードの受け取りに付き合わせる事になったのであった。

第４話　特典の片鱗

俺のＩＤカード発行という用事に付き合わせしまう事になってしまったが無事に野次馬から離れる事に成功した。

ＩＤカードは、予め各人別のカードが作成されているわけではなく、個人認証を行ってその場で学内用カードにデータを書き込む仕組みなので、どの窓口でも近くに行って手続き可能なのだが、此処でも一科生と二科生の壁は存在しており、一科生と二科生の窓口は別とでも言いたいかのように分けられていたが、俺達は敢えて二科生が多い窓口へ向かった。後ろの人垣は一科生が大半であり、彼らはプライドが高い者が多い。そんな奴らはいくら深雪とお近づきになりたいとはいえ二科生の固まっている所へは近づきたくないだろう。実際、窓口の中には俺達以外に一科生は入ってきていない。

中で騒ぎになるような事も無く俺がＩＤカードを受け取ると、深雪が問い掛けてきた。

「悠馬さん。クラスは何処でしたか？」

「Ａ組だよ。深雪は何処のクラスだったんだ？」

「悠馬さんと同じＡ組です。これからよろしくお願いします」

「あぁ、よろしく」

深雪との会話の最中に真由美の顔が偶然見えたのだが何故か不機嫌そうだった。

（俺なんかやらかした？真由美が不機嫌になるような事なんて俺には心当たりが全く無いんだけど・・・）

「さっきからずっと司波さんと仲良さそうに話しているわね」

「ど、どうしたんだ？急に」

「せっかくこんな美少女が隣にいるのに・・・そうよね、司波さんは私なんかよりずっと可愛いものね」

「あの、真由美さん？もしかして怒ってます？」

「ぜ～んぜん。これっぽっちも怒ってないわ」

怒ってないなんて言ってるが、それが嘘なのは真由美の様子を見てすぐに分かった。何が原因で気を悪くしているのか今も全く分から

ないが。
「何が原因で怒っているのか分からないけど、真由美の気に障るような事を俺がしたから怒ってるんだよな。ごめん」
「別に怒ってないのに・・・でも良いわ、許してあげる。その代わり今週の週末に何処かに連れてってね」
「分かった。それで機嫌が直るなら」
なんやかんやで許してくれた。結局何が原因だったのか分からなかった。これからは自分の言動や行動に気をつけなくては。
「それでこれからどうするの？此処にずっと居れないでしょ」
「それなんだけど、この後、俺と深雪は達也と合流する事になっているから、ひとまず合流しても良いか？」
「あら司波くんと？」
「あぁ、駄目か？」
「全然大丈夫よ。司波さんも早くお兄さんに会いたいでしょ？」
「はい、ありがとうございます。七草生徒会長」
「長いから『会長』で良いわよ」
「分かりました。会長」
「それじゃあ、行きましょうか」
今後の行動方針も決まり窓口のある建物から出ようとしていたのだが・・・
「ちょっと待て!!」
「え？」
「どうしたのですか、悠馬さん？」
２人が怪訝そうな様子で尋ねてくるが俺は何も言わず、転生の特典として得たある能力を使う為に目を閉じて集中する。
俺が今、何をしているのかというと、情報体次元であるイデアにアクセスし周囲を調べていた。
この能力は、俺が特典を決める時に言った「起動式を読み取る能力」に該当するものであり能力名は『管理者（アドミニス・サイト）の眼』。
そして、その能力はイデアにアクセスし、「存在」を認識出来るといったものだ。とはいえ、現代魔法（「超能力」と呼ばれていた異能を

体系化した現在主流の魔法構築式）はイデアを経由してエイドス（イデアに存在する情報体であり、現実世界における全ての事象は、このエイドスに記録されている）に魔法式（エイドスを一時的に変える為の情報体）を投射する為、現代魔法を扱う魔法師は皆、イデアにアクセスする能力を持っており、『管理者の眼（アドミニス・サイト）』もイデアへのアクセス能力を拡張したものといえる。

ただし、その「拡張」がもたらす効果は絶大だ。何せ、この世界に実体を持って存在する限り、イデアにエイドスを刻まぬものは無いのだから。

また、五感や物理次元の感覚の拡張に過ぎない「透視」や、補助システムのもたらす情報によって魔法の座標を定めるのではなく、エイドスを認識して直接照準することも出来る為『管理者の眼（アドミニス・サイト）』に狙われて逃げられるものは殆ど存在しない。もっとも、逃げられる者は存在しないものだけなのだが。

達也もイデアへのアクセスを拡張させる能力『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』を使い、エイドスに刻まれた情報を２４時間前なら読み取る事が出来る。だが、俺の管理者の眼（アドミニス・サイト）にはそのリミッターが存在せず、その気になれば地球が誕生した時までの情報を読み取る事が出来るが、時間を遡り過ぎると激しい頭痛が襲い掛かってくる為、今の所１年前までの情報を読み取ったのが最も遡った時間だ。他にも捜索できる範囲などの基本スペックは『管理者の眼（アドミニス・サイト）』の方が優れているが、『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』は知覚情報などを、身体の接触などにより共有する事が出来る。

そして、俺と達也が起動式を読み取る事が出来るのも起動式の「意味」をこの能力で理解出来るからだ。俺はてっきり起動式を読み取るだけかと思っていたのだが、まさか『精霊の眼（エレメンタル・サイト）』と似たような能力が得られるとは思ってもいなかった。

そんな訳で、棚からぼた餅にも等しい『管理者の眼（アドミニス・サイト）』で周囲の存在を探る。

（入り口の横に２人、周りの木の裏に５人か・・・）

「はぁ～・・・」

「どうしたの？悠馬くん」

「真由美、マルチスコープで外を見てみ」
「分かったわ」
『マルチスコープ』とは、実体物を様々な方向で知覚する遠隔系知覚魔法だ。視覚的な多元レーダーのようなものだが、あくまで実体物をマルチアングルで見るものであって非物質体や情報体を見るものではない。だが、実体を持っていれば何処に隠れていようとすぐに見つけることができる。
「7人も隠れているじゃない。しかも、はんぞーくんも居るし」
「は、はんぞーくん？」
「生徒会副会長よ。ほら、私の後ろに男子生徒が居たでしょ？」
「あぁ、なんか居たな」
「会長。その人とは一緒じゃなくても良いんですか？」
「大丈夫よ。一緒に居なくちゃいけないって訳じゃ無いから」
「それなら良いんですけど・・・悠馬さんどうしますか？」
「そうだな。このまま普通に外に出たらそのまま囲まれるだろうし・・・」
「それなら裏口を通りましょう。さっき『マルチスコープ』で確認したけどそこには人がいなかったし」
「分かった。行こう、深雪」
「はい、悠馬さん」
俺達は人のいない裏口から外へ出た。とはいえ、入り口付近に固まっているとは限らない。『管理者の眼（アドミニス・サイト）』を使い周囲の様子と達也の存在を探りながら向かう。
（達也は・・・講堂の出口の隅っこか・・・）
俺達が講堂から出た出口とは違ったが戻る事になるとは。しかも近くには多くの生徒で溢れているし周囲を盗聴したら深雪を探している奴もいたので素直に近づけない。
（あれを使うか・・・）
俺は特典の一つである『一方通行（アクセラレータ）』を発動させる。『一方通行（アクセラレータ）』は特典を決める際にいった『『とある魔術の禁書目録』の第一位の能力』に該当するものだ。そして、その能力は運動量・熱量・光・電気量など、

あらゆる力の向き（ベクトル）を観測し、ベクトルを自由に変換させるというとんでもないチート能力だ。
ここまでなら同じなのだが、『一方通行（アクセラレータ）』は加速系領域魔法なので範囲を任意に調整出来るのだ。つまり、原作では身体の周囲にしか展開出来なかった効果範囲を広げる事が出来るようになったのだ。
だが、領域魔法というのは対物魔法に比べて難しいとされている。それは、対物魔法と比べて魔法の対象を特定するのが難しいからだ。
対物魔法は物体の属性を改変させ、領域魔法は空間の性質を改変させるものだが、この時点で事象を改変する難度はそれほど変わらない。問題は、性質を改変させる領域と書き換えない領域の区別をどうやってつけるかにある。
壁や天井や柵などの目に見える仕切りで区切られている場合は簡単だ。しかし、野外などの何の仕切りもない開放空間で、特定の空間を切り出して定義するのはかなり難しいのだ。
因みにこの『一方通行（アクセラレータ）』だが、原作のように常時発動しており、紫外線なんかを反射してしまっているのだが、『一方通行（アクセラレータ）』を基に独自に作り上げた『ベクトル分散』（『一方通行（アクセラレータ）』のように身体の周囲に展開されているが範囲は調整可能）で紫外線なんかを分散させてから一部を反射させているので、普通の人より外部刺激は少ないものの一方通行のように髪が白かったりなんかはしていない。
「真由美、今から魔法使うけど内緒にしてくれ」
「え？」
「それと、目の前が暗くなるだろうけど落ち着いてて」
「それは、どういう・・・」
「それじゃあ、２人とも近づいて」
俺は真由美と深雪を俺に近づけさせる。別に近づけさせなくても良いがこの後、何にも見えなくなるので近くに居て貰った方が良いだろう。
「それじゃあ、行くぞ」
俺は『一方通行（アクセラレータ）』の範囲を深雪と真由美が居る所までに設定し光を全て反射させる。その瞬間辺りが真っ暗になり何も見えなくなった。

「ちょっと、悠馬くん。暗いんだけど」
「さっき暗くなるって言っただろ」
「まさか、こんなに暗くなるなんて思ってなかったんだもん」
そう言って真由美は俺の右腕にしがみついてくる。いきなりしがみついてきて心臓はドキッとして鼓動も早くなるしなんか柔らかい物（ご想像にお任せします）が当たっているので嫌でも意識してしまう。
『管理者の眼（アドミニス・サイト）』を使いながら出来るだけ日の当たらない暗い所を移動する。暫くして『管理者の眼（アドミニス・サイト）』で達也を見つけた。周りの様子を確認しても大丈夫そうだったので『一方通行（アクセラレータ）』を解除すると今まで反射させていた光が一斉に降り注いで来て思わず顔を背ける。暫くして、光に慣れると俺達は達也の元まで駆け寄る。
「お待たせしました。お兄さ・・・ま・・・？」
だがこの時、俺は気づかなかった。達也の隣に赤毛の美少女と眼鏡をかけた女子生徒が居る事に。そして、それを見た深雪から冷気が放出されてポカポカな春の陽気から冬の寒さへと普通に考えたらあり得ない変化が発生していた。
「深雪？」
「あら、お兄様。早速クラスメイトとデートですか？」
可愛らしく小首を傾げ、含むところなんてまるでありませんよ、と淑女の微笑みで問いかけているが、目が笑っていなかった。
しかも、後ろを見れば目立っていたからか野次馬が集まっていた。野次馬の対処はどうすれば良いのか分からないのでひとまず無視する事にして深雪達の方に意識を傾ける。
「そんな訳ないだろ、深雪。お前を待っている間、話していただけだ。こちらは同じクラスの・・・」
「千葉エリカです。よろしくねっ」
「柴田美月です。よろしくお願いします」
「はじめまして、千葉さん、柴田さん。司波深雪です。私も新入生ですので、お兄様同様、よろしくお願いしますね」
「はじめまして、深雪。あっ、深雪って呼んでも大丈夫？」

「ええ、どうぞ。苗字では、お兄様と区別がつきにくいですものね」
「ありがとう。あたしのこともエリカでＯＫよ」
「私も美月って呼んでください」
　誤解も解け、深雪から放出された冷気も収まると、冬の寒さからポカポカな春の陽気に戻っていた。
　そして、何食わぬ顔で今此処に突っ立っているが、まだ会った事の無い原作キャラに会えて結構興奮している。今思えば転生して結構な数の原作キャラに会って、一部の原作キャラとは血縁関係になるなんて前世の俺には想像すら出来なかっただろう。
「ねぇねぇ、君は？」
　そんな物思いにふけっていたからか俺はエリカに声を掛けられている事に気付かなかった。
「ごめん、考え事していて気づかなかった。俺は九島悠馬。気軽に悠馬って呼んで」
「ＯＫ、悠馬。私もエリカで良いよ」
「よろしくお願いします、悠馬さん。私も美月で良いですよ」
「分かった。よろしく、エリカ、美月」
　それからは、深雪とエリカと美月が話し込み、俺は時々相槌を打つ感じだったが、俺の意識はずっと後ろにむけていた。真由美の隣にはさっきまでいなかった男子生徒（たぶん真由美にはんぞーくんと呼ばれていた人だろう）がいて何が話していた。
　真由美は男子生徒を制止するかのように右手を男子生徒の前に出し口を開いた。
「それでは深雪さんと悠馬くん、今日はこれで。司波くんもいずれまた、ゆっくりと」
　会釈して真由美は立ち去った。真由美の隣にいた男子生徒が振り返り、舌打ちの聞こえてきそうな表情で達也を睨むと真由美の後ろに付いて行った。
　どうやら達也は入学早々、上級生、しかも生徒会役員（おそらく副会長）の不興を買ってしまったようだが、あれはもう回避するのは不可能だろう。まぁ、達也は家の関係上こういうのに慣れてしまってい

るのであまり気にしてないだろうが、深雪はそういう訳にはいかないようだ。
「すみません、お兄様。私の所為でお兄様の心証を」
「お前が謝ることじゃないさ」
　表情を曇らせた深雪のセリフを最後まで言わせずに達也は首を横に振って、ポン、と深雪の頭に手を置いた。そのまま、髪を梳くように撫でると、沈んでいた表情は陶然の色を帯びる。傍から見たら危ない兄妹に見えるだろうが、俺は見飽きてるし、美月もエリカもその事については何も言わなかった。
「せっかくですから、お茶でも飲んでいきませんか？」
「賛成！学校の近くに美味しいケーキ屋さんがあるらしいんだ」
　その代わりに投げ掛けられたのは、ティータイムのお誘い。
「俺も予定がある訳じゃ無いし大丈夫だ」
「お兄様、どういたしましょうか？」
　深雪は達也に判断を仰ぐようだ。自分よりも達也を優先する辺り相変わらずのブラコンっぷりである。
「いいんじゃないか、せっかく知り合いになったことだし。同性、同年代の友人はいくらいても多過ぎるという事はないだろうから」
　そして、深雪への質問が即答で返ってくる辺り、これは達也の本音だろう。それに、達也の事だから深雪の誕生日祝いに何処か適当な所で昼を済ませて帰ろうとか考えてたかもしれないしな。
「司波くんって、深雪の事になると自分は計算外なのね・・・」
「達也は筋金入りのシスコンだからな」
「でも、それって妹思いってことですよね」
「度は過ぎるけどな」
　この言葉に達也は苦い顔で黙り込んだまま、俺達はエリカの案内でケーキ屋に向かうのであった。

第5話　テレビ電話は疲れます

　エリカに連れて行かれた「ケーキ屋」はその実「デザートの多いフレンチのカフェテリア」だったので、そこで昼食を済ませ短くない時間お喋りに興じて（メンバーは女子3人に男子2人だが、ガールズトークがメインだったので俺も達也も殆ど聞いているだけだった）、家に着いたのは夕暮れ時であった。
　着替えを済ませるとリビングのテレビ電話から着信音が鳴る。確認してみたら番号が九島家本宅の電話番号だった。
（たぶん、爺ちゃんだな。大丈夫かな・・・いろんな意味で・・・）
　かなり不安だったが、覚悟を決め（近所迷惑になる事を）電話に出る。
「もしも・・・」
『悠馬！久しぶりじゃな!!会いたかったぞ!!!』
（やっぱ、出るんじゃなかった・・・）
　電話に出て1分も経たない内に後悔するがもう遅い、俺に出来る事は爺ちゃんが大声出して近所迷惑にならない事をを祈るだけだ。
「久しぶり、爺ちゃん」
『元気にしておったかの？』
「見ての通り元気だよ、爺ちゃんも元気そうで何よりだよ」
「ひ孫を見るまで死んでも死にきれんからの」
　この爺ちゃんはなんて事口走ってんだ。
「そういえば、悠馬には入学祝いを渡していなかったな」
「入学祝いなんて、そんなのいいよ」
「儂が送りたいから良いじゃろ。それに悠馬もきっと喜ぶぞ」
　そんな事言われたら無性に気になるじゃん。何をくれるんだ。
「それで、何を送るつもりなの？」
「響子から聞いたが、電動スクーターの免許取ったのであろう？」
「い、一応・・・」
　とはいえ、免許はあるが肝心の電動スクーターはまだ持って無いが。なんせ、取った目的が独立魔装大隊で電動スクーターとか使う時

があるかもしれないからとか言われて取ったのものだからだ。聞いた時に地球〇衛軍かと思ってしまったのはきっと俺だけだろう。
「で、電動スクーターは買ったのか？」
「い、いや・・・まだだけど？」
「なら、決まりじゃ。お主に、電動スクーターをプレゼントしよう」
「い、いや良いって。自分で決めたいし」
「儂の事を信用出来んのか？」
「爺ちゃんだと、派手なのとか選びそうで怖いんだよ!!」
「な、何を言っておるんじゃ!?」
「だって、爺ちゃんから貰った服はダサいか派手なのかのどっちかだけじゃん」
　服とか別に何でも良いと思っているが、爺ちゃんの服だけは着たいとは終ぞ思わなかった。
「分かった。誰かにスクーター代を持たせるから悠馬の好きなのを決めて良いぞ」
「分かった。それじゃもう切るよ」
「うむ、今度会えるのは九校戦になるじゃろうからそれまで待っとるぞ」
　電話を切った俺は力が抜けてソファの上にへなへなと座った。爺ちゃんの孫バカぶりには本当に疲れる。
　その後も俺の従姉の響子さんから電話があったが、その後は特に何も無くさぁ寝るぞという所で着信音が鳴る。掛けて来た相手を見ると顔を顰めたが無視したらしたで面倒なので渋々電話に出る。
「もしもし」
「もしもし、悠馬さん。お久しぶりですね」
　掛けて来た相手は四葉家当主であり達也と深雪の叔母にあたる四葉真夜だった。
　なんでこの人から電話が来るのか未だに謎だ。
「お久しぶりです、真夜さん。それで今回はどういったご用件で」
「悠馬さんの入学祝いですよ」
「赤の他人に等しい人にですか？」

「赤の他人とは心外ですね。悠馬さんは私の師匠の孫じゃないですか」
　確かに俺の爺ちゃんの九島烈は真夜さんと真夜さんの姉である深夜さんを弟子してたらしいけど、俺にはまったく関係無いじゃん。
「俺なんかよりも貴方の甥と姪に入学祝いの電話を送った方が良いですよ」
「深雪さんには電話しましたよ」
「その言い方だと達也には電話して無いようですね。ガーディアンとはいえ差別のし過ぎでは？」
「あら？悠馬さんは四葉の御家事情に口出しするのですか？」
「そんな馬鹿な事はしませんよ。貴方に潰されてしまいますから」
「私が潰そうとしても貴方が全て跳ね返して私が潰されそうですが」
「ご謙遜はその辺にしていただいてそろそろ切りますよ。学校あるので」
「分かりました。では、またの機会に」
　またの機会なんて一生来ないで欲しいと思いながら電話を切った。
　その後達也から鍛錬を一緒に行かないかと誘われた俺は勿論ＯＫと返し明日の用意を済ませてベッドに潜り込んだ。
〈翌日〉
　俺はトレーナーを着て待ち合わせ場所の公園のベンチに座って達也が来るのを待っていた。
「悪い、待たせたな」
「今来たばっかだし気にすんな」
「深雪が一緒だが大丈夫だよな」
「構わないが、制服で大丈夫なのか？」
「はい。先生にまだ、進学のご報告をしておりませんので・・・それに私ではもう、お兄様と悠馬さんの鍛錬について行けませんから」
　やはり、制服だった理由は高校の制服姿を見せに行くためであるようだった。
「俺達と同じ事をする必要は無いと思うけどな。ただ、大丈夫か？深雪の制服姿なんて見たら師匠のたがが外れるぞ」

「その時はお兄様と悠馬さんが守ってくださいね？」
可愛いらしく、片目を瞑る深雪。それを見た達也の顔には自然と笑みが浮かんでいた。
「守るのは良いが間違っても師匠をバラバラにしたり消滅させたりするなよ」
このシスコン兄貴ならマジでやりかねないからな。
「そんな事はしないから安心しろ」
「どうだが」
「それに度が過ぎたらお前が魔法で吹き飛ばすだろ」
「違いない」
お互い悪い笑みを浮かべながら公園を後にするのだった。

第６話　朝の鍛錬

まだ少し肌寒い、清々しい早朝の空気に長い髪とスカートの裾をなびかせた深雪は、ローラーブレードで坂道を滑り上がっていた。
深雪は一度もキックを入れずに、重力に逆らって緩やかだが長い坂道を疾走する。その速度は、時速６０キロにも届かんとしている。
その隣で俺と達也は深雪と併走していた。
俺と達也はジョギングスタイルだが、一歩一歩のストライドが１０ｍにも達している。
「少し、ペースを落としましょうか・・・？」
「いや、それではトレーニングにならない」
達也の表情に余裕がないと感じた深雪は、クルリと身体の向きを変え、後ろ向きに片足滑走しながら問うと、疲労をにじませながらも息を切らせる事なく達也は答える。
普通ならあり得ない事が起きているが、これはもちろん魔法によるものだ。
深雪が使っているのは重力加速度を低減する魔法と自分の身体を道の傾斜に沿って目的方向へ移動させる魔法。
達也が使っているのは路面をキックすることにより生じる加速力と減速力を増幅する魔法と、路面から大きく飛び上がら無いように上向きへの移動を抑える魔法。
どちらも移動と加速の単純な複合術式だ。単純であるが故に、深雪はともかく、二科生である達也にも継続的に発動し続ける事ができる。
そして、俺が使っているのは『一方通行』によるベクトル操作で一度全ての力の向きを前方に変換させてから、『一方通行』を基に独自で作り上げた『ベクトル分散』で道路にヒビや穴が空いたりしないように調整して、さらに達也達にスピードを合わせていた。
この場合、元が複雑な２つの魔法を同時発動している俺が一番難易度が高いと思うが、ローラーブレードを履いている深雪と自分の足で走っている達也の、どちらが難易度が高いかは一概には言えない。

両者は共に単純な移動と加速の複合術式なので、一見、ローラーブレードによって運動負荷が軽減されている深雪の方が楽に見えるが、自分の足を使わないということは移動ベクトルを全面的に魔法で制御しなければならないということだ。
それに対して達也は、走るという動作で移動の方向性を決定づけている。
一歩ごとに術式を起動し続けなければならない達也と、一瞬も術式のコントロールを手放す事が出来ない深雪。
それぞれ別の訓練を自分達に課して目的地へと向かうのだった。
◇◇◇
3人の目的地は小高い丘の上にある寺だった。
だが、そこに集う者達の面構えは「僧侶」や「和尚」、あるいは「(小)坊主」にさえ、到底見えない。
あえて相応しい存在を当て嵌めるとすれば、「修行者」、いや、「僧兵」の方が適当だろうか。
そんな寺で今、俺達は何をしているかと言うと
ドガッ!ビュン!
達也と共に山門をくぐるなり、手荒い出迎(稽古)を受けていた。
この寺で鍛錬をするようになった当初は一人ずつの掛かり稽古だったのだが、今ではお互い門人約20人による総掛かりに変わっていた。
次々と襲いかかってくる門人達の攻撃を躱したり捌いたりして防ぐと体術(魔法は使っていない)で門人達を倒していく。
俺が門人達20人を倒し終えると師匠が深雪にちょっかいを掛けていた。
「お久しぶりです、師匠」
「悠馬くん。久しぶりだね」
この嘘臭い僧侶の名は九重八雲。飄々としてはいるが名状しがたい俗っぽさを滲ませているせいで僧侶もどきにしか見えないが、身分上は本物の僧侶であり、自称『忍び』(忍者では無い)、より一般的な呼称は「忍術使い」だ。

本人が拘っているとおり、身体的な技能が優れているだけの前近代の諜報員とは一線を画する、古い魔法を伝える者の1人だった。
魔法が科学の対象となり、世間からフィクションだと考えられていた魔法の実在が確認された時、忍術も単なる体術・中世的な諜報技術の体系だけでなく、奥義とされる部分は魔法の一種である事が明らかになった。
虚構と思い込んでいた、思い込まされていた妖しげな「術」こそが、真実の姿に近かったという訳だ。
無論、他の魔法体系と同じく、言い伝えがそのまま真実という事ではない。
講談の中での忍術の代表格とも言える「変化」は、幻影と高速移動の組み合わせである事が解明されている。忍術だけでなく、伝統的な魔法における変身系統の術は全てこの種のトリックによるもので、変身、変化、元素変換は現代魔法では不可能とされている分野だ。
俺と達也が師匠と、深雪が先生と呼んでいる九重八雲は、そんな忍術を昔ながらのノウハウで伝える古式魔法の伝承者だった。
しかし、僧形は別として（それすら嘘臭いのだが）、その立ち振る舞いも、到底そのような由緒正しい存在には見えないが。
「すみません。連絡もせずいきなり来て」
「本当だよ。こっちだって慌てて門人を呼んだんだから」
成る程。だから、いつもより歯応えが無くて、達也よりも早く終わったのか。
「それよりも深雪くん、それが第一高校の制服かい？」
どうやら師匠の興味は俺から深雪にシフトしたようだ。
「はい。昨日が入学式でした」
「そうかそうか。う～ん、いいねぇ」
師匠が顔をニヤニヤ（いつもかもしれない・・・）させて深雪の制服を見る。これは師匠が暴走するパターンかもしれない。
「・・・今日は、入学のご報告を、と存じまして・・・」
「真新しい制服が初々しくて、清楚の中にも隠し切れない色香があって」

訂正しよう。これは師匠が暴走するパターンかもしれないではなく暴走するパターンだった、その証拠に師匠は手をクネクネさせてるし深雪は若干たじろいでいる。
「まるでまさに綻ばんとする花の蕾、萌え出る新緑の芽。そう・・・萌えだ、萌えだよ！ムッ？」
際限なくテンションをあげ、怯えている深雪にジリジリと詰め寄っていた師匠が突然、身体を反転させつつ腰を落とし左手を頭上に翳した。
パシッ、という鈍い音を立てて、とんでもないスピードで放たれた達也の手刀が師匠に防がれた。
「師匠、深雪が怯えてますんで、少し落ち着いて貰えませんか」
「・・・やるね、達也くん。僕の背中をとると、はっ」
左手で達也の右手を巻き込みながら右の突きを放つ師匠。
達也はそれを左手で受けると、師匠の極め技から逃れた右手も使って師匠を抱え込む。
逆らわず前転した師匠の足が達也の後頭部に襲い掛かるが、達也は身を捻って躱すと、２人の間合いが離れる。
「いや～、もう体術だけなら達也くんには敵わないかもしれないねぇ」
自分で頭をペシペシと叩きながら軽く言うが、達也はそんな事も無視して師匠に突撃し猛攻をかける。
しかし師匠は達也の猛攻を難なく受け止めると、平手の突きを連続で達也に放つ。達也は何とか受け止めるが、いきなり放たれた師匠の蹴りが直撃し吹っ飛ばされ、倒れる事なく勢いを殺す。
見物人から漏れるため息。いつの間にか、対峙するる２人を門人達が座って見ていた。
「さぁ、来なさい」
師匠が左手で挑発し、達也と師匠は再び交差した。
◇◇◇
達也と師匠の一騒動が終わり、境内は静けさを取り戻した。門人達は自らの勤行へ戻り、本堂の前庭に残っているのは、俺、達也、深雪、師匠だけとなっていた。

「悠馬さん、先生、どうぞ。お兄様もいかがですか？」
「ありがとう、深雪」
「おぉ、深雪くん、ありがとう」
「・・・少し、待ってくれ」
俺は深雪が渡してくれたタオルで汗を拭く。
師匠は、汗を垂らしながらも笑顔で深雪からタオルを受け取る。体術だけなら達也には敵わないとか言ってたのにその表情にはまだまだ余裕がありそうだ。
一方、達也はというと、土の上に大の字になった状態で荒い息を整えていた。片手を上げて返事をした後、苦労して地面から上体を引き剥がした。
「お兄様、大丈夫ですか・・・？」
身体を起こしたものの、座り込んだままの達也の傍らに、心配そうな表情を浮かべた深雪はスカートが汚れるのも厭わずに膝をつき、手にしたタオルで流れ落ちる汗を拭う。
「いや、大丈夫だ」
達也は深雪の手からタオルを引き取り、一息、気合いを入れて立ち上がった。
「すまない、スカートに土がついてしまったな」
そう言う達也のトレーナーこそ、土が付いているどころではない有様だが、深雪がそれを指摘する言葉は無かった。
「いえ、お気遣いなく」
深雪は笑顔でそう応えると、スカートの裾を払う代わりに、制服の内ポケットから縦長の薄型携帯端末を取り出した。端末は表側ほぼ全面を占めるフォース・フィードバック・パネルから、淀みなく短い番号を入力する。
深雪が手にしているのは、携帯端末形態の汎用型ＣＡＤ。最も普及しているブレスレット形態の汎用型に対して、落下のリスクというデメリットはあるものの、慣れれば片手で操作可能というメリットがあり、両手が塞がる事を嫌う現場肌の上級魔法師に好まれているタイプの物だ。

非物理の光で描かれた複雑なパターンが、ＣＡＤからそれを持つ左手は吸い込まれ、魔法が発動した。
現代の魔法師は、杖や魔導書、呪文や印契の代わりに、魔法工学の成果物たる電子機器、ＣＡＤを用いる。
ＣＡＤには感応石という名の、想子（サイオン）信号と電気信号を相互に変換する合成物質が組み込まれており、魔法師から供給されたサイオンを使って電子的に記録された魔法陣である起動式を出力する。
起動式とは、魔法の設計図だ。その中には、長ったらしい呪文と、複雑なシンボルと、忙しく組み替えられた印を合わせたものと同等以上の情報量が存在する。
魔法師はサイオンの両導体である肉体を通じてＣＡＤが出力した起動式を吸収し、無意識下に存在し魔法師を魔法師たらしめている精神機構（システム）、魔法演算領域に送り込む。魔法演算領域は起動式に基づき、魔法を実行する情報体、魔法式を組み上げる事でＣＡＤは、魔法の構築に必要な情報を一瞬で提供することができるのである。
何処からともなく出現した実体の無い雲が、深雪のスカートから黒のレギンスに包まれた脚。ブーツの爪先までまとわりつく。
更に空中から湧き出たほのかな粒子が、達也の背中から全身を流れ落ちて行く。
薄く微かに輝く霧が晴れた後には、土埃一つ無い清潔な制服とトレーナーが達也と深雪の身体を包んでいた。
「俺の服まで、すまない」
「このくらいの事何でもありません。それよりお兄様、悠馬さん、朝ご飯にしませんか？先生も宜しければご一緒に」
深雪は、ごく普通の口調で、バスケットを軽く掲げて見せるのだった。

第7話　Ｔｈｅ　２ｎｄ　Ｄａｙ

朝の鍛錬も終わった俺達は、達也と深雪と一緒に登校していた。
「それじゃあ、二科はあっちだから」
「はい。それではまた」
「じゃあな、達也」
一科と二科では昇降階段も違うという区別っぷりの為、此処で必然的に別れてしまう。隣に居る深雪を見ても何処か名残り惜しそうだった。
「深雪、此処に居たら通る人の邪魔になるしそろそろ行こうか」
「はい」
俺と深雪は自分達のクラスである1ーAの教室に向かう。昇降階段を昇り1ーAの教室に入るとザワザワと騒ぎ出した。
「おはようございます」
深雪はこんな状況でもクラス全員に向けて挨拶する。俺は親しい人にしか挨拶とかしないから。
「総代の司波さんだ」
「やっぱりこのクラスだったんだ」
「見ろよ、あいつ。司波さんと一緒にいるぞ」
「う、羨ましい」
「ねぇ、司波さんの隣に居る人カッコ良くない？私、めっちゃタイプなんだけど」
「分かる。彼女とか居たりするのかな？」
「それこそ司波さんと付き合ってたりして」
何かボソボソと話し声が聞こえるが、唯一聞こえた「それこそ司波さんと付き合ってたりして」は絶対にあり得ないからな。深雪と付き合ってるなんて知られたらあのシスコン兄さんに消されます。というか、深雪が超が付く程のブラコンなので攻略不可能です。
「私はこの列の1番後ろですね。悠馬さんは？」
「俺は後ろから2番目の所だから、深雪の前だな」
「悠馬さんの近くで良かったです」

「俺も深雪が近くで良かったよ」
深雪と親しげに話していたからか男子からの嫉妬の視線が俺に突き刺さってくる。この様子だと同性の人と仲良くなれそうに無いなと思いながら自分の席に向かうのだった。
◇◇◇
司波さんと悠馬さんが入って来た教室内はザワザワと騒ぎ出していた。
悠馬さんとは、もう仲良くなれたけど、司波さんとも仲良くなれたら良いな～なんて思ってたら
「あ、司波さんか悠馬さん、私の後ろかもしれない」
「えっ!?」
雫の言葉に私はドキッとしたけど
「そそそう言うことは早く言ってよ雫～！」
「ごめん、今気づいた」
すぐに私は冷静でいられなくなった。
ど、どうしよう。なっ、なんか気の利いた挨拶をすれば良いのかな？
『その髪飾り素敵ですね』
・・・だ、駄目だめだよこんなの。なれなれしずぎてナンパだって思われかねないよ。
そ、それなら・・・
『ファンです』
・・・さっきよりも意味不明だよ。なら、他には・・・って考えてる間にもう目の前だよ～！
私の心情なんて知らないだろう司波さんと悠馬さんは私に気づくと
「おはよう、ほのか」
と悠馬さんは笑顔で私に挨拶した。その笑顔は1ーAにいる全ての女子（雫と司波さんを除く）のハートを打ち抜いていた。
司波さんも私にニコッと微笑むと今度は1ーAに居る全ての男子（悠馬さんを除く）と私のハートを打ち抜いていた。

私は魂でも抜けたかのように力が抜けて後ろに倒れるけど雫に支えられると私の耳に小さな声で雫がアドバイスをくれた。
「ほのか。自己紹介のチャンスだよ」
そ、そうだよ。昨日あんなに自己紹介のシュミレーションしたじゃない！やれるよほのか！ファイトだよ！
「あ、あの司波さ・・・」
私は意を決して自分の席に座ってる司波さんの所へ行くが・・・
「はわわわっ」
司波さんに声をかけようと司波さんの所へ向かうが自分の足に引っかかってバランスを崩してしまう。
「ぶっ！」
そのまま頭から盛大に転んでしまった。余りの出来事に教室がしーんと静まる。
周りからヒソヒソと聞こえるのがつらいよ・・・。
「大丈夫ですか？」
声を掛けられた私が顔を上げると司波さんが私に手を差し伸べてくれた。
私は司波さんの手に自分の手を乗せて起き上がる。
「あ、ありがとう司波さん」
「どう致しまして。あの・・・」
「光井です！光井ほのかです！」
「司波深雪です。光井さん仲良くしてくださいね」
「！こちらこそ！」
結果オーライじゃない！転んだ事は嬉しくないけどやったよ～！
それからは雫と悠馬さんも加わって４人で仲良くお話しした。
◇◇◇
ほのかが転んで深雪がほのかに手を差し伸べて仲良くなったりして俺と深雪とほのかと雫と４人で仲良く話してるんだけどね、めちゃくちゃ視線が痛いです。主に男子の嫉妬の視線が・・・。
しかも、言う程、俺は喋って無いぞ。
『ただいまよりオリエンテーションを開始します。生徒の皆さんは席

についてください』
　その放送が入るが教室に居る生徒は全員自分の席に座る。放送マジありがとう、お陰で嫉妬の視線から解放されたよ。
　それから教室の扉が開き1人の教員が入って来た。
「皆さん入学おめでとう。1ーA指導教官の百舌谷です。難関である一高の中でもA組は特に優秀な成績で試験を通過した方達により構成されています。主席の司波さんだけでなく皆さん全員が優等生であり期待を背負っている事を忘れないでください」
　百舌谷先生は一息付いて話を続ける。
「此処では、図書館や情報端末で学外秘の豊富な知識にアクセスでき、実際にに魔法師として活躍している先生の貴重な授業を受ける事が出来ます。これらの権利はまだまだ不足しているため一科生だけにしかありません。皆さんはこの機会に利用して大いに学んでください」
　いやいやいや。確かに一科生の授業のみ教員がいるけどさ、二科生も図書館や情報端末でアクセス出来るぞ。此処の学校の教員なんだから理解してろよ。
「この後は専門授業の見学です。午前中は基礎魔法学と応用魔法学、午後は魔法実技演習の見学を予定してますので希望者は10分後に1階ロビーに集合してください。他に見学したい授業があれば自主的に行動しても構いません。では私は次の授業がありますので」
　そう言って百舌谷先生は教室から出て行くと、ザワザワと騒ぎ出した。
「あの、悠馬さん」
「どうした？」
「授業見学一緒に行きませんか？」
「良いよ。ほのかと雫も誘うか？」
「良いですよ、そうしま「ちょっと良いですか？司波さん！」・・・なんでしょう？」
　深雪は、俺と話してる最中に声を掛けられて一瞬不機嫌な顔になる。まぁ、気持ちは分かるけどね。

「あの・・・」
「どうしました？」
「もし良かったら私達と一緒に行きませんか？」
　と俺に近づいて来た女子生徒の1人がたずねて来た。後ろからゾロゾロとやって来た女子生徒の数も含めてその数なんと7人！多すぎるわ!!
「すみません。別の人達と行く約束をしているんです」
「分かりました」
　女子生徒達はズーンと落ち込みながら離れて行った。ごめんな、深雪達と一緒に行く約束が無くても流石に女子7人はキツイから。
「悠馬さん」
「雫か。どうした？」
「私達と一緒に行くんでしょ？ほのかが司波さんを連れ出したから呼びに来たよ」
「ありがとう。案内頼めるか？」
「うん。付いて来て、悠馬さん」
　雫に案内されて向かった先には深雪とほのかが待っていた。
「ごめん、待たせて」
「大丈夫ですよ。それよりも悠馬さんも絡まれてましたけど大丈夫でしたか？」
「深雪のよりかは大丈夫かな。しっかり理由言ったら諦めてくれたし。それこそ、深雪は大丈夫だったのか？」
「光井さんに助けて貰いました」
　なんでも、深雪を誘って来た男子生徒は強引に誘おうとしていた所をほのかが割り込んで回避したらしい。はぁ、深雪となんとしても一緒に周りたいからなのかもしれないがそんな事をすれば深雪が嫌がるとは思わなかったのかね。
　それから俺達は集合場所の1階ロビーに向かい、授業見学が始まった。
　授業の内容は放射系統魔法の基礎を学ぶものであった。
「放射系統魔法の性質を説明出来る人は居ますか？」

見学だけだと思っていた者達が大半だったようで「質問なんてあるのかよ」とか「そんなの聞いてない」みたいなのがちらほら聞こえる。
「はい、先生」
「森崎くんですか。どうぞ」
森崎と呼ばれた男子生徒は一瞬、深雪をチラッと見た。深雪に良い所を見せて興味を引こうとしてるのか。まぁ、そんなんで深雪の興味を引けないだろうけど。
「放射線を操作する魔法ですか？」
「間違いではありませんが不正解です。それから質問に対する回答に疑問形を用いるのは辞めるように。では・・・九島さんどうですか？」
え？まさかの俺？てっきり深雪が当てられると思ってたんだがな。
「素粒子及び複合粒子の運動と相互作用に干渉する魔法です」
「簡潔にまとめられた中々良い回答です」
「ありがとうございます」
ザワザワ煩いな。主に女子が。
「昼の休憩は１２時２０分より午後の見学は１３時４０分から行います。希望者は校庭側の実技棟入口に集合してください」
「「ありがとうございました！」」
午前の見学が終わりほっと息をつくのも束の間俺と深雪は絡まれていた。
「あの・・・司波さん、九島さん。お昼はどうされます」
「学食に行くつもりですが・・・」
「ご一緒しても良いですか？」
「席が空いていれば・・・」
「では埋まらないうちに急ぎましょう！」
さっきの森、森・・・・なんだっけ？とりあえず森なんたらがいきなり仕切り出して俺達は男子女子両方のクラスメイトに囲まれながら食堂に向かうと、食堂は既に多くの生徒で混雑していた。
「深雪～っ、悠馬～っ、こっちだよ～！」
「エリカ！美月！お兄様！」
エリカが俺達の為に席を空けてくれていたらしく、空いてる椅子が

２つ用意されていた。
俺と深雪は別にクラスメイトとの交流を阻むような偏屈な性格ではないが、クラスメイトか達也達かどっちを取るかと言われたら俺達２人は考える事なく達也達を選んだが、此処から全てがおかしくなってしまったのかもしれない。
「おい、キミ達。此処の席を譲ってくれないか」
第一高校入学２日目。早くも波乱の予感が巻き起こるのだった・・・。

第８話　一科生（ブルーム）と二科生（ウィード）の確執

森なんたらの言葉で食堂には早くも不穏な空気が流れていた。
「二科は一科の「ただの補欠」だ。授業でも食堂でも一科生が使いたいといえば席を譲るのも当然だろう？」
暴論以外の何物でもない言動だが、森なんたらと一緒にいる一科生はさも当然といった顔である。魔法力は優れてていても人間性は只の屑のようだ。
「と言う訳で席を譲ってくれないか？補欠くん」
いくらなんでも暴論過ぎると思い抗議しようとするが・・・
「分かった。俺はもう終わったから行くよ」
達也はそう言って椅子から立ち上がる。
「良い心がけだ」
森なんたらは礼も言わず席を譲ってくれたのは当たり前といった反応である。
「他の３人も見習って欲しいものだ・・・さ、司波さん空きましたよ」
「え・・・でも、私はお兄様と一緒に・・・」
「それはいけない。ウィードは所詮スペア。一科生と二科生のけじめをつけないと・・・」
「スペ・・・ッ」
いくらなんでも言い過ぎにも程がある。というか、この学校には風紀委員がある筈なのになんで誰も取り締まらないんだよ。
別に此処は原作通りじゃなくて良いのに。
「皆もそう思うだろ？」
「そうだ！自重しろよウィード！」
「僕達は親睦を深めないといけないんだ！」
「そうよそうよ」
少なくとも俺はこんな奴らと親睦なんて深めたくないんだけど。
「アホらし。私達も行こ」

「あぁ」
エリカと達也達と一緒に居た男子生徒が席から立ち上がる。
達也は口パクで「騒ぎは起こさない方が良い」と俺達に伝える。
深雪にも通じたようで、俺達は小さく頷く。達也は俺に「深雪を頼む」と口パクで伝えると、美月やエリカ達と一緒にその場を後にした。
午後からは、遠隔魔法用実習室（通称「射撃場」）で、３ーＡの実技が行われていた。
３ーＡといえば、生徒会長である真由美の所属するクラスだ。
生徒会は必ずしも成績で選ばれるものではないが、真由美は遠隔精密魔法の分野で１０年に１人の秀才と呼ばれ、それを裏付けるよいに数多くのトロフィーを第一高校にもたらしていた。
当然、そんな事は昔から知っているし、新入生でも耳にした事がある人はいるだろう。
真由美の実技を見ようと、大勢の新入生が詰め掛けたが、見学出来る人数は限られている。一科生に遠慮してしまう二科生が多い中で、達也グループ（食堂で一緒に居た人達）が堂々と最前列に陣取っていた。
勿論、凄く目立っていた。悪い意味で・・・

そして、放課後・・・
「いい加減諦めたらどうなんですか？深雪さんと悠馬さんは、達也さんと一緒に帰ると言っているんです。他人が口を挟む事じゃないでしょう」
美月が啖呵を切っていた。相手は俺のクラスの生徒。昼休みの時の森・・・なんだっけ？森・・・森・・・そうそう森川だ。
その森川と昼休みに居た奴らが、放課後、深雪と俺を待っていた達也に、深雪と俺にくっついて来たあいつらが難癖を付けたのが発端だ。
「別に深雪さんと悠馬さんは貴方達を邪魔者扱いなんてしてないじゃないですか。一緒に帰りたかったら、ついてくればいいんです。なんの権利があって３人の仲を引き裂こうとしているんですか」

一科生の理不尽な行動に、美月が切れた。
これには意外と思ったが、美月は丁寧な物腰ながら最初は容赦なく正論を叩きつけた。そう、最初だけは・・・
「引き裂くって言われてもな・・・」
「俺は美月にどう思われてるんだ・・・」
俺と達也は、少し離れた場所で呟く。
俺達2人は思う。何かが決定的にずれてきていると・・・
「み、美月は何をかかか勘違いしているのでしょうね」
そして、深雪は何故か慌てていた。
「深雪・・・何故お前が焦る」
「えっ？い、いえ焦ってなどおりませんよ？」
「なんで疑問形？」
俺達3人も混乱している中、達也の友人達はますますヒートアップしていた。
「僕達は彼女に相談する事があるんだ！」
と、1ーAの男子生徒その1。
深雪に何を相談したいのか見当もつかない。
「私達は九島くんに聞きたい事があるのよ！」
と、1ーAの女子生徒その1。
一体、俺の何を聞きたいのか見当もつかない。
「ハン！そういうのは自活（自活動）中にやれよ。ちゃんと時間が取ってあるだろうが」
達也と一緒にいた男子生徒が威勢よく笑い飛ばす。
「相談とか聞きたい事があるんだったら予め本人の同意を取ってからにしたら？深雪や悠馬の意思を無視して勝手な事言ってるけど、高校生にもなってまだそんな事も知らないの？」
相手を怒らせる事が目的のようにしか思えないエリカのセリフと態度に、案の定男子生徒その1が切れた。
「煩い！他のクラス、ましてやヴィードごときが僕達ブルームに口出しするな！」
差別的ニュアンスがあるとされ、「ウィード」という単語は校則で禁

止されている。あってないようなルールだが、それでもこれだけ多くの耳目を集めている状況で使用される言葉ではない。
　この暴言に真っ正面から反応したのは、やはりというか意外というか（たぶん「やはり」だろうが）、美月だった。
「同じ新入生じゃない。あなた達ブルームが、今の時点で一体どれだけ優れているというんですかっ」
　決して大声を張り上げたわけではなかったが、美月の声は、不思議と校内に響いた。
「・・・あらら」
「やっちまったな・・・」
　まずい事になった、という思考が、俺と達也の口から短い呟きとなって漏れた。
　俺達の呟きは、一科生の押し殺した声にかき消され、隣にいた深雪にしか聞こえなかった。
「・・ブルームがどれだけ優れているか、知りたいなら教えてやるぞ」
　美月の主張は校内のルールに沿った正当なものだが、同時に、ある意味でこの学校のシステムを否定するものだ。
「ハッ、おもしれぇ！是非とも教えてもらおうじゃねぇか」
　一科生の威嚇とも最後通牒とも取れるセリフに、達也と一緒にいた男子生徒が挑戦的な大声で応じる。誰が見ても分かる通り完全に「売り言葉に買い言葉」状態だ。
「だったら教えてやる！」
　森川が制服からＣＡＤを取り出す。
　学校内でＣＡＤの携行が認められている生徒は生徒会役員と一部の委員のみ。そして、学外における魔法の使用は、法令で細かく制限されている。
　だが、ＣＡＤの所持が校外で制限されている訳ではない。
　ＣＡＤは今や魔法師の必携ツールだが、魔法の行使に必要不可欠という訳ではない。それこそ俺がＣＡＤ無しで『一方通行（アクセラレーター）』を使ったようにＣＡＤが無くとも魔法は使える為、ＣＡＤの所持そのものを法令で禁じていない。

故に、ＣＡＤを所持している生徒は、授業開始前に事務室へ預け、下校時に返却を受ける、という手続きになっている。その為、下校途中である生徒がＣＡＤを持っているのは、別におかしいことではない。
「特化型っ!?」
ただし、それが同じ生徒に向けられるとなれば、異常事態、いや、非常事態だ。向けられたＣＡＤが、攻撃力重視の特化型なら尚の事である。
見物人の悲鳴をＢＧＭに小型拳銃を模した特化型ＣＡＤの「銃口」が達也と一緒にいた男子生徒に突きつけられた。
「お兄様！悠馬さん！」
深雪の言葉が終わらぬ内に、達也は右手を突き出し、俺は右足に力を入れていた。
が、達也と俺の行動はこの場では、何の結果も生まなかった。
何故ならば
「なんだ今のはっ!?」
森川の驚いた声が響き渡る。
それもその筈、森川が驚いていた小型拳銃形態のＣＡＤは、彼の手から弾き飛ばされていた。
そしてその眼前では、何処からか取り出した伸縮警棒を振り抜いた姿勢で、エリカが笑みを浮かべていた。彼女の笑顔に、動揺や焦りの残り香はない。風格すらも漂わせる鮮やかな残心を見るだけで、そんなものは最初から無かったのだと一目で解る。
「この間合いなら身体を動かした方が速いのよね」
「それは同感だがテメェ今、俺の手ごとブッ叩くつもりだったろ」
残心を解いた途端、軽い雰囲気に戻って得意げに説くエリカに答えたのは、ＣＡＤを掴みかけた手を危ういタイミングで引いた達也と一緒にいた男子生徒だった。
「あ～らそんなことしないわよぉ」
「わざとらしく笑ってごまかすんじゃねぇ！」
警棒を持つ手の甲を口元に当てて「オホホホホ」と、ごまかす気があるのかどうかも定かでないごまかし笑いを振りまくエリカ。達也

と一緒にいた男子生徒が憤慨するのも致し方ない。
「本当よ。躱せるか、躱せないかぐらい、身のこなしを見てれば分かるわ。アンタってバカそうに見えるけど、腕の方は確かそうだもの」
「・・・バカにしてるだろ?テメェ、俺のこと頭からバカにしてるだろ?」
「だからバカそうに見える、って言ってるじゃない」
目の前にいる一科生を忘れて、差し向かいでギャアギャアと漫才を繰り広げている2人に、俺も達也も深雪も、誰もが呆気にとられていたが、いち早く我を取り戻したのは彼らと向かい合っていた俺と深雪のクラスメイトの方だった。
森川ではなく、その背後にいるほのかが腕輪形状の汎用型ＣＡＤへ指を走らせた。ほのかが発動させようとしているのは目眩しの閃光魔法で、たぶん、一科生を止めようとしているのだろう。
だが、その魔法は発動する事はなかった。
展開中あるいは読み込み中の起動式に外部からサイオンの塊を撃ち込まれると、起動式を形成するサイオンのパターンが攪乱され、効力のある魔法式が構築されず、魔法は未発のまま霧散する。
そう、今のように。
「止めなさい!自衛目的以外の魔法による対人攻撃は、校則違反である以前に、犯罪行為ですよ!」
ほのかのＣＡＤが展開中だった起動式が、サイオンの弾丸によって砕け散っていた。
サイオンそのものを弾丸として放出する、魔法としては最も単純な形態ながら、起動式のみを破壊し所有者本人には何のダメージも与えない精緻な照準と出力制御は、射手の並々ならぬ技量を示している。
その声を聞いて、ほのかは魔法によるもの以外の衝撃で蒼白となった。よろめいたほのかの背中を、雫が抱き留めている。
ほのかが声を聞いたただけで顔面が蒼白なり、並々ならぬ射手の技量を持つ人物といえば俺は1人しか知らない。
警告を発し、サイオン弾で魔法の発動を阻止したのは、生徒会長の真由美だった。

「あなた達、1ーAと1ーEの生徒ね。事情を聞きます。ついて来なさい」
冷たい、と評されても仕方ない、硬質な声でこう命じたのは、真由美の隣に立った女子生徒。入学式の生徒紹介によれば、彼女は風紀委員長、渡辺摩利という名の3年生だ。
渡辺先輩のCADは既に起動式の展開を完了している。
ここで抵抗の素振りでも見せれば、即座に実力が行使されるのは想像に難くない。
この場にいる殆どの者は言葉なく硬直している。
そんな中、達也は泰然とした足取りで、しずしずと背後に付き従う深雪と共に、摩利の前へ歩き出した。
達也の行動に、渡辺先輩は訝しげな視線を向けるが、その眼差しに達也は動ずることなく受け止め、礼儀を損なわない範囲で軽く一礼した。
「すみません、悪ふざけが過ぎました」
「悪ふざけ?」
唐突に思えるそのセリフに、渡辺先輩の眉が軽く顰められる。
「はい。森崎一門のクイックドロウは有名ですから、後学の為に見せてもらうだけのつもりだったんですが、あんまり真に迫っていたもので、思わず手が出てしまいました」
あ、森川じゃなくて森崎か。
渡辺先輩は、エリカが手にする警棒と、地面に転がった拳銃形態のCADを一瞥し、視線を巡らせ違法にCADを使おうとした森崎とほのかを震え上がらせてから、達也を見て、冷笑を浮かべた。
「では、その後に1ーAの女子が攻撃性の魔法を発動しようとしていたのはどうしてだ?」
「驚いたんでしょうね。条件反射で起動プロセスを実行してしまったんでしょう」
今度は、俺が前に出て答えた。
森崎の事を何にも知らなかったが、それっぽい事を言って誤魔化す。

「君達の友人は、魔法によって攻撃されそうになっていたわけだが、それでも悪ふざけだと主張するのかね？」
「攻撃といっても、彼女が発動しようと意図したのは、目くらましの閃光魔法ですよ」
「それも、失明したり視力障碍を起こしたりする程のレベルではありませんでしたし」
再び、息を呑む気配。
渡辺先輩の冷笑が感嘆に変わる。
「ほぅ・・・どうやら君達は、展開された起動式を読み取る事ができるらしいな」
起動式は、魔法の設計図であり魔法式を構築する為のプログラム・・・要は膨大なデータの塊だ。
魔法師は、魔法式がどのような効果を持つものであるかについては、直感的に理解することができる。魔法式がエイドスに干渉する過程で、改変されまいとするエイドス側からの反作用により、魔法式がどのような改変を行おうとしているのかを読み取ることが可能だ。
だがそれ単独ではデータの塊に過ぎない起動式は、その情報量の膨大さ故に、それを展開している魔法師自身にも、無意識領域内で半自動的に処理することができるのみ。
起動式を読む、ということは、画像データを記述する文字の羅列から、その画像を頭の中で再現するようなものだ。
意識して理解することなど、普通はできない。が、俺も達也も普通は出来ない事を出来たりする魔法師だ。
「実技は苦手ですが、分析は得意です」
「俺は実技も分析も人並み以上には得意だと思ってるんで」
達也は事も無げに、「分析」の一言で片付け、俺もそれに倣う。
「・・・誤魔化すのも得意のようだな」
「誤魔化すなんてとんでもない。隣に居る奴はともかく、自分は只の二科生です」
達也がそう言うと、矢面に立っていた兄を庇うように、深雪が進み出る。

「兄と悠馬さんの申したとおり、本当に、ちょっとした行き違いだったんです。先輩方のお手を煩わせてしまい、申し訳ありませんでした」
達也と俺とは違い、微塵の小細工もなく、真正面から深々と頭を下げられて、渡辺先輩は毒気を抜かれた表情で目を逸らす。
「摩利、もういいじゃない。達也くんに悠馬くん、本当に只の見学だったのよね？」
その言葉に俺と達也は笑みを浮かべると、真由美は何となく、得意げに見えるーーまるで「貸し一つ」とでも言いたげなーー笑みを浮かべた。
「生徒同士で教え合うことが禁止されているわけではありませんが、魔法の行使には、起動するだけでも細かな制限があります。このことは一学期の内に授業で教わる内容です。魔法の発動を伴う自習活動は、それまで控えた方がいいでしょうね」
真面目な表情に戻って訓示を垂れる真由美の後を受けーー本性を知っている俺からすると違和感満載ーーて、渡辺先輩もまた、形式を意識した言葉遣いで審判を下した。
「・・・会長がこう仰られていることでもあるし、今回は不問にします。以後このようなことの無いように」
慌てて姿勢を正し、呉越同舟なから一斉に頭を下げる一同に見向きもせず、渡辺先輩は踵を返した。
が、一歩踏み出したところで足を止め、背中を向けたまま問いかけを発した。
「君達の名前は？」
首だけで振り向いた切れ長の目は、達也と俺の姿を映している。
「一年Ｅ組、司波達也です」
「一年Ａ組、九島悠馬です」
「覚えておこう」
そう言い残し渡辺先輩はその場を去るのだった。

第9話　Ｇｏ　Ｂａｃｋ　Ｈｏｍｅ

「・・・借りだとは思わないからな」
　真由美と渡辺先輩が校舎に消えたのを見届けて、森川改め森崎が、棘のある視線を向け、同じく棘のある口調で、達也へ向けてそう言った。
　達也は、やれやれ、という表情を浮かべて背後を見た。
「貸しなんて思ってないから安心しろ。決め手になったのは俺達の舌先じゃなくて深雪の誠意だからな」
「お兄様達ときたら、言い負かすのは得意でも、説得するのは苦手なんですから」
「違いない」
　わざとらしい非難の眼差しに、苦笑いで返す。
「・・・僕の名前は森崎駿。お前が見抜いたとおり、森崎の本家に連なる者だ」
　司波兄妹と俺の、見ようによってはほのぼのとしたやり取りに気を殺がれたのか、やや敵意の薄れた顔で、森崎が名乗りを上げる。
「見抜いたとか、そんな大袈裟な話じゃないんだが。単に模範実技の映像資料を見たことがあっただけで」
「そんなのあったんだな。知らなかったわ」
「普段から模範実技の映像資料なんて見ないお前は、知らなくて当然だ」
　達也の言葉に背後に居た達也のクラスメイトが盛り上がるが、達也は森崎と目線を合わせたまま、動かない。
　なのに、俺に慣れた口調でツッコミを入れるのだから、これが長年の付き合いによって為せる技なのだろうか？
「僕はお前を認めないぞ、司波達也。司波さんは、僕達と一緒に居るべきなんだ」
　森崎は捨て台詞を残し、背を向けた。
「いきなりフルネームで呼び捨てか」
　達也が独り言のように呟いた言葉に、森崎はピクッと背中を震わせ

た。そこで立ち止まらず、そのまま立ち去ったのはある種の意地が作用したからだろう。
「良かったな、達也。副会長に続いて、２人目だぞ」
「何がだ」
「俺を除く、目を付けられた一科の男子生徒の数」
「そんなのは、増えても何も嬉しくない」
まぁ、その２人は達也を敵視してるからな。
この確執は下手をすれば、卒業するまで続くんだろうな。まぁ、達也の胃はヤワじゃないから、心配しなくとも大丈夫だろうけど。
「お兄様に悠馬さん。もう帰りませんか？」
「そうだな。第二のあんな奴等が絡んでくる前に、この場を離れた方が良いかもな」
「同感だ。レオ、千葉さん、柴田さん、帰ろう」
俺達が達也のクラスメイト達と一緒に帰ろうとその場を後にしようとした時だった。
「ほのかを庇ってくれてありがとうございました。大事にならなかったのは兄さんと悠馬さんのおかげです」
雫が達也に感謝の言葉を述べる。
それに触発されたほのかは俺達の目の前でガバッと頭を下げる。
「さっきはすいませんでした！お兄さん！悠馬さん！」
「気にしなくて良いよ。ほのかとは見知った仲なんだし」
確かに、やり方はアレだったかもしれないが、根底にあるのは、この場を何とか収めようとした優しさだ。
その優しさが理由で、罰せられるのは、少なくとも俺はおかしいと思う。だから、庇った。それだけだ。
「大したことじゃないし、お兄さんはやめてくれ。これでも同じ一年生だ」
「分かりました。では、何とお呼びすれば・・・」
「達也、でいいから」
「分かりました・・・」
それでも尚ほのかはモジモジしているが、それを見た深雪が助けを

出す。
「そうだわ。２人とも駅まで一緒にいかがかしら？」
「はいっ！」
満面の笑みで答えるほのか。
ほのかと雫を加えた８人で俺達は第一高校を後にするのだった。
◇◇◇
駅までの帰り道で、俺達は自己紹介をしたりしていると次第に話題はＣＡＤに関する話題になっていた。
「・・・じゃあ、深雪さんのアシスタンスを調整しているのは達也さんなんですか？」
「えぇ。お兄様にお任せするのが、一番安心ですから」
ほのかの質問に対して我が事のように得意げに深雪が答える。
「少しアレンジしているだけなんだげどな。深雪は処理能力が高いから、ＣＡＤのメンテに手が掛からない」
「それだって、デバイスのＯＳを理解するだけの知識が無いとできないだろ」
しかも、この場に深雪しか居なかったら、何がアレンジだと言ってやりたい。
「悠馬さんの言う通りですよ」
深雪の隣から顔を覗き込むように顔を出して、美月が会話に参加してきた。
「ＣＡＤの基礎システムにアクセスできるスキルもないとな。大したもんだ」
達也と唯一同性のクラスメイトで西城レオンハルトことレオが賞賛する。
レオは親父がハーフ、母親がクウォーターで、ゲルマン的な彫りの深い顔立ちをしている。
得意な術式は収束系の硬化魔法で、志望コースは警察の機動隊とか山岳警備隊などの身体を動かす系との事だ。
「達也くん、あたしのホウキも見てもらえない？」
エリカの呼びかけが「司波くん」から「達也くん」に変わっている

のは、ほのかに名前で呼ばせているからいいでしょ、との一方的な宣言によるものだ。そのかわり、達也も名前呼びでいいという交換条件付きで、美月も同じ取引を主張して、お互い名前呼びとなっている。
なんで、俺は最初から名前呼びなのにクラスメイトである達也が苗字呼びだったのかは良く分からない。
「無理。あんな特殊な形状のＣＡＤをいじる自信はないよ」
「あはっ、やっぱりすごいね、達也くんは」
達也の返事が謙遜なのに対し、エリカの反応は裏表のない賞賛だった。
「何が？」
「これがホウキだって分かっちゃうんだ」
達也に問われて、柄の長さに縮めた警棒のストラップを持ってクルクル回しながら、エリカが陽気に笑う。
ただ、その目の奥には、単純な笑み以外の光がある。
「えっ？その警棒、デバイスなの？」
果たして、それが注文通りだったのか、美月が目を丸くしたのを見て、エリカは満足気に2度頷いた。
「普通の反応をありがとう、美月。みんな気づいていたんだったら、滑っちゃうとこだったわ」
その遣り取りを聞いて、レオが更に訝しげに問う。
「・・・何処にシステムを組み込んでんるんだ？さっきの感じじゃ、全部空洞って訳じゃないんだろ？」
「ブーッ。柄以外は全部空洞よ。刻印型の術式で強度を上げてるの。硬化魔法は得意分野なんでしょ？」
「・・・術式を幾何学紋様化して、感応生の合金に刻み、サイオンを注入する事で発動するって、アレか？そんなモン使ってたら、並みのサイオン量じゃ済まないぜ？そもそも刻印型自体、燃費が悪過ぎってんで、今じゃあんまり使われてねぇ術式の筈だぜ」
レオの指摘に、エリカは少し目を開いて、驚き半分、感心半分を表現した。
「おっ、さすが得意分野。でも残念、もう一歩ね。強度が必要になるの

は振り出しと打ち込みの瞬間だけ。その刹那を捉まえてサイオンを流してやれば、そんなに消耗しないわ。兜割りの原理と同じよ。・・・って、みんなどうしたの？」
逆に感心と呆れ顔がブレンドされた空気にさらされて、居心地悪げに訊ねたエリカに、
「エリカ・・・兜割りって、それこそ秘伝とか奥義とかに分類される技術だと思うのだけど。単純にサイオン量が多いより、余程凄いわよ」
全員を代表して、深雪が答えた。
何気ない指摘だったが、エリカの強張った顔は、本気で焦っていることを示していた。
「達也さんも深雪さんも悠馬さんも凄いけど、エリカちゃんも凄い人だったのね・・・うちの高校って、一般人の方が珍しいのかな？」
「魔法科高校に一般人は居ないと思う」
美月の天然気味な発言と、それまで押し黙っていた北山雫がボソッか漏らした的確すぎるツッコミで、色々と訳ありの空気は核心が見えぬまま霧散した。
◇◇◇
現在でも電車は主要な公共交通機関だが、その形態はこの１００年間で様変わりし、満員電車、という言葉は今や死語となっていた。
何十人も収容できる大型車両は、全席指定の一部の長距離高速輸送以外使われておらずキャビネットと呼ばれる、中央管制された２人乗りまたは４人乗りのリニア式小型車両が現代の主流だ。
動力もエネルギーも軌道から供給されるので、車両のサイズは同じ定員の自走車の半分程度。
プラットホームに並ぶキャビネットに先頭から順次乗り込み、チケットやパスから行き先を読み取って運行軌道へ進む。
そんな訳で、キャビネットに乗った時点で皆とは別々になるのだが、俺と司波兄妹は最寄り駅が同じなので、駅で降りてからも暫くは３人で話しながら歩いていた。
「悠馬、お前に頼まれていた例のアレだがそろそろ完成するぞ」
「やっとか。いつ完成するんだ？」

「アレ自体は今日の夜に出来る。明日の放課後にお前に性能テストして貰おうと思うんだが大丈夫か？」
俺は頭の中のスケジュール帳をめくる。
「明日は予定無いから大丈夫だな」
「もし良かったら、悠馬さん明日の夜ご飯一緒にどうですか？」
「え？」
深雪の思いもしない言葉に俺は困惑してしまった。
「お兄様、悠馬さんに頼まれた物の性能テストはすぐに終わるモノなのですか？」
「すぐには終わらないな」
「因みに悠馬さんは帰りが遅くなったらどうするおつもりですか？」
「スーパーで惣菜でも買おうかと・・・」
「いけません。育ち盛りの男子高校生が惣菜で済ませてはいけません！」
余りの剣幕に俺はたじろぐ。しかも、「深雪は俺の母さんか！」って思わず言ってしまいそうな内容だし。
「いや、でも深雪に手間をかける事になるし・・・」
「1人増えても手間は変わりません。それよりも私の料理ではお気に召せませんか？」
深雪が涙目でしょんぼりしながら尋ねる。
「いや、そんな事はないよ。うん、明日は深雪の手料理をご馳走になろうかな」
「分かりました。腕によりをかけてご馳走しますね」
「あ、あぁ」
「じゃあ俺達はこっちだから。またな、悠馬」
「悠馬さん、また明日」
「あぁ。またな」
俺達は司波兄妹と別れ、自分の家へと帰るのだった。

第10話　The　3rd　Day

第一高校生が利用する駅の名は「第一高校前」。
駅からは学校までほぼ一本道だ。
途中で同じ電車に乗り合う、ということは、電車の形態が変わった事により無くなってしまったが、駅から学校までの通学路で友達と一緒になる、というイベントは、この学校では頻繁に生じる。
昨日もそういう事例を数多く見たし、今朝も先程から、そういう実例を何度も目にしている。
「よう達也！悠馬！」
「おはよう」
「おはよう、レオ」
司波兄妹と一緒に通っていた俺達はレオとエリカと美月と合流した。
「しっかし昨日は大変だったな」
「あぁ。そうだな」
「光井さんと北山さんだっけ？一科生にも話が分かる子がいたのは良かったけどよ」
「あの方達ならお友達になれそうですね」
と、話しながら6人で校門までのんびり歩いていた時だった。
「達也く～ん、悠馬く～ん」
背後から真由美がぶんぶんと手を振ってやって来た。
「達也さん・・・会長さんとお知り合いだったんですか？」
「この場で知り合いなのは悠馬だけ・・・の、はず」
美月の疑問に、達也本人も一緒になって首を捻っている。
「悠馬のついでなのか？」
「けど、あんな風に呼ぶ？普通」
とても俺のついでとは思えない状況に誰もが困惑していた。
「達也くんに悠馬くん、オハヨ～。深雪さんも、おはようございます」
「おはようございます、会長」
「おはよう、真由美。で、朝からどうしたんだ？」

「お、おい悠馬。会長にそんな口聞いていいのか？」
俺の真由美への言葉遣いにレオが狼狽える。
「気にするな、レオ。悠馬はタメ語じゃないと怒られるからな」
「そ、そうなのか・・・」
「けど、どうして会長が・・・」
「もしかして昨日の事で・・・」
レオと美月とエリカが後ろでコソコソ話している。
「只の挨拶に決まってるじゃない」
「会長、お一人なのですか？」
深雪が見れば分かることをわざわざ訊ねたのは、このまま一緒に来るのか、という問いかけでもある。
「うん。朝は特に待ち合わせたりしないの」
肯定は肯定でも、言外の質問に対する肯定だった。
「深雪さんと悠馬くんに少しお話ししたい事もあるし・・・ご一緒して構わないかしら？」
「はい、それは構いませんが・・・」
「もしかして、話ってのは生徒会の事か？」
「えぇ。一度、ゆっくり説明したいと思ってね。達也くんと深雪さん、それに悠馬くんを生徒会室でのランチに招待しようと思ったの。あっ、アナタ達もどう？」
さりげなくレオとエリカと美月を誘う真由美。
「「いえ、結構です」」
それに対し3人は真由美の誘いを声を揃えて断った。
やや、気まずい空気が空気が流れる中俺は口を開いた。
「生徒会室でランチって言われても弁当とか無いぞ」
「生徒会室にはランチボックスの自販機が置いてあるから大丈夫よ」
そういや、そんなもんが生徒会室に置いてあったな。
すぐに使われなくなった気がするけど。
「・・・生徒会室にダイニングサーバーが置かれているのですか？」
物に動じない深雪が、驚きを隠せずに問い返す。
そういや、自動配膳機が生徒会室に置かれていたのは覚えている

が、なんで置かれているのかまでは覚えていない。
しかも、自動配膳機は空港の無人食堂や長距離列車の食堂車両に置かれているものであり、普通、高校の生徒会室に置かれるようなものではない。
「入ってもらう前からこういうことは余り言いたくないんだけど、遅くまで仕事をすることもありますので」
真由美は、ばつ悪げに照れ笑いながら、俺と深雪に対する勧誘を続けた。
口調が丁寧語なのは深雪の質問に対してだからであろう。
「生徒会室なら、達也くんが一緒でも問題ありませんし」
その時、真由美の笑顔が一瞬、人の悪い、悪く言えば邪悪な笑みに変わった。
俺は心の中で「ドンマイ、達也」と呟いた。
「・・・問題あるでしょう。副会長と揉め事なんてゴメンですよ、俺は」
確かに、達也が気安く生徒会室で昼食を摂っていようものなら、喧嘩を売りつけられること、ほぼ間違いなしである。
しかし、達也の言う事が、真由美にはすぐに思い当たらなかったようだ。
「副会長・・・？」
真由美はちょこんと首を傾げ、すぐに、芝居じみた仕草でポンッと手を打った。
「はんぞーくんのことなら、気にしなくても大丈夫」
「・・・それはもしかして、服部副会長のことですか？」
「そうだけど？」
「そうですか・・・」
「はんぞーくんなら、お昼はいつも部室だから」
ニコニコと真由美は笑みを絶やさずに勧誘を続ける。
「分かりました。深雪と悠馬の３人でお邪魔させていただきます」
「そうですか。良かった。じゃあ、詳しいお話はその時に。お待ちしてますね」
何がそんなに楽しいのか、くるりと背を向けた真由美は、スキップ

でもしそうな足取りで立ち去った。
同じ校舎へ向かうというのに、俺達の足取りは重くなるのだった。
◇◇◇
午前の授業が終わり昼休みとなった。
俺と深雪は達也と合流するとそのまま生徒会室へと向かう。
目的の生徒会室は４階の廊下の突き当たりにあった。
扉の中央には「生徒会長室」と刻まれた木彫りのプレートが埋め込まれており、壁にはインターホン、そして巧妙にカムフラージュされているであろう数々のセキュリティ機器があった。
昔というよりも俺の前世だとノックして入室だが、俺の前世よりも遥かに進歩しているこの世界では、インターホンを鳴らして入室するのだ。変な感じはするものの、俺はインターホンを鳴らす。
「どうぞ」
真由美の入室を促す声がインターホンのスピーカーから返されると、耳をそばたてていないと気づかない程度の、微かな作動音と共にロックが外れる。
「失礼します」
俺が扉を開けて中に入ると、深雪・達也の順で入室する。
中には真由美と渡辺先輩、そして生徒会と思しき2人の女子生徒がいた。
俺が頭を下げると、達也と深雪もそれに続く。
自分で言うのもなんだが礼儀作法は幼い頃から叩き込まれているので、俺の礼儀は完璧に近いだろう。ちらっと深雪を見ても、礼儀作法のお手本のようなお辞儀を見せている。
「えーっと・・・ご丁寧にどうも」
宮中晩餐会でも通用しそうな所作を見せられ、真由美も少したじろいでいる。
生徒会の役員であろう2人の女子生徒もすっかり雰囲気に呑まれている。
生徒会役員以外で唯一同席している風紀委員長の渡辺摩利先輩は、平静な表情を保っているが、それが少し無理をしたポーカーフェイス

である事は、余程人を見る目が無い者以外だったら誰でも分かっただろう。
「どうぞ掛けて。お話は、お食事をしながらにしましょう」
真由美が会議用の長机を指差しながら言う。
今時、情報端末が埋め込まれていないのは、飲食用途を見越してのことなのかは定かではないが、学校の備品としては珍しい重厚な木製の方卓に、俺・深雪・達也の順で椅子に腰掛ける。
「お肉とお魚と精進、どれがいいですか？」
どうやら、自動配膳機があるのみならず、メニューが複数あるらしい。
「魚で」
「精進で」
「お兄様と同じ物を」
俺達が頼んだのを受けて、生徒会役員と思しき小柄な女子生徒が、壁際に据えつけられた和箪笥ほどの大きさの機械を操作した。
後は出来上がるのを待つだけだ。
「入学式で紹介しましたけど、念の為、もう一度紹介しておきますね。私の隣が会計の市原鈴音、通称リンちゃん」
「・・・私のことをそう呼ぶのは会長だけです」
「でしょうね！」と心の中で叫ぶ。
整ってはいるが顔の各パーツがきつめの印象で、背が高く手足も長い市原先輩は、美少女というよりも美人と表現するような容姿なので、真由美以外「リンちゃん」とは呼ばないだろう。
「その隣は知っていますよね？風紀委員長の渡辺摩利」
会話が成り立ってないことに誰も気にしていないのはいつもの事と割り切っているからなのだろうか。
「それから書記の中条あずさ、通称あーちゃん」
「会長・・・お願いですから下級生の前で『あーちゃん』は止めてください。私にも立場というものがあるんです」
彼女は小柄な真由美よりも更に小柄な上に童顔で、本人にそのつもりが無くとも上目遣いの潤んだ瞳は、拗ねて今にも泣きそうな子供に

見える。
　あぁ、本人には悪いがこれは「あーちゃん」だわ。
「もう1人、副会長のはんぞーくんを加えたメンバーが、今期の生徒会役員です」
「私は違うがな」
「そうね。摩利は別だけど。あっ、準備が出来たようです」
　自動配膳機のパネルが開き、無個性ながら正確に盛り付けられた料理がトレーに乗って出てきた。
　トレーから出てきたのは6つ。普通なら7つ出てこないとおかしいが渡辺先輩は手作り弁当なので何の問題もない。
　自動配膳機はその名の通り、自動的に配膳する機能もついているのだが、自動配膳機対応のテーブルなければ人の手を使った方が早いので、俺と中条先輩は席を立つ。
　中条先輩がまず自分の分を机に置き、真由美と市原先輩の分を両手に持つ。
　俺はというとトレーを両手で持ち左前腕でトレーを支えて持って行く。こんな事が出来るのも前世でやっていたファミレスのバイトのおかげである。
「すまない、悠馬」
「ありがとうございます、悠馬さん」
「どういたしまして」
　そこから、奇妙な会食が始まった。
「そういえば、九島くんはトレーを同時に3つ持って行ったがウェイターのバイトでもやっているのか？」
　さっきまで当たり障りの無い話題だったのに、いきなりそんな事を聞かれた。
「・・・そんなどうでも良い事気になるんですか？」
「十師族の人間がウェイターのバイトやってたら面白いじゃないか」
「俺には面白いかどうか分かりませんが、ウェイターはやってないですよ。ただ、本邸に居た時は暇だったらお手伝いさんの手伝いをしていたりしたので自然と出来るようになりました」

手伝いとは言っても、皿洗いぐらいしかやっていないので嘘なのだがバレたりしないだろう。
「でも、悠馬くんは今一人暮らししているのでしょう？生活費とかどうしているの？」
と、今度は真由美に聞かれる。
「毎月生活費が振り込まれることになってるし、仕送りもあるから大丈夫」
その後の話題はウェイター繋がりでは無いが今食べている料理のことになる。
自動調理だからレトルトになるのは仕方が無いのだが、最近の加工食品は普通の料理に比べてもそれほど遜色が無い。とは言うものの、それは「平均的な」料理に比べてのことであり、物足りないなさは否めないのだが。
「そのお弁当は、渡辺先輩がご自分でお作りになられたのですか？」
深雪の意図は、単に会話を円滑にする為のセリフで、他意は無かったはずだ。
「そうだ。・・・意外か？」
「いえ、別に」
達也が間髪容れずに否定する。
達也が渡辺先輩の指を見ていると、渡辺先輩は気恥ずかしさを覚えたのか顔が赤くなった。
まぁ、達也に見られていると全てを見透かされているような気分になるので分からなくもない。
「私達も、明日からお弁当に致しましょうか」
深雪のさり気ない一言で、達也も自然に視線を外す。
「深雪の弁当はとても魅力的だが、食べる場所がね・・・」
「あっ、そうですね・・・まずそれを探さなければ・・・」
２人の会話は、この年頃の異性の肉親同士としては、少し親しすぎるものだろう。心なしか、空気も甘い。
ブラックコーヒーが欲しくなるが、こんな所にはないのでいつもの事と割り切る。

「・・・まるで恋人同士の会話ですね」
市原先輩がにこりとも笑わず、爆弾発言を投下した。
「そうですか?まぁ、確かに・・・考えたことはあります。血のつながりが無ければ恋人にしたい、と」
しかし、達也に軽く返され、爆弾は不発に終わるどころか先輩達に誤爆した。ついでに、達也に恋人にしたいと言われた深雪は顔を真っ赤にしていた。
「・・・もちろん、冗談ですよ」
これまたニコリともせず達也は淡々と告げた。
「ん?」
達也は顔を真っ赤にして固まっている深雪を見る。
「いえ、あの・・・」
「面白くない男だな、君は」
つまらなさそうに評する渡辺先輩に、
「自覚しています」
棒読みで回答する達也。
「はいはい、もう止めようね、摩利。口惜しいのは分かるけど、どうやら達也くんは一筋縄じゃ行かないようよ?」
このままではキリが無いと見たのか、真由美が苦笑い混じりに割って入った。
「・・・そうだな。前言撤回。君は面白い男だよ、達也くん」
ニヤリと笑い評価を翻す渡辺先輩。渡辺先輩は美人な女子生徒なのに、その笑みは随分と男前だった。
「そろそろ本題に入りましょうか」
少し唐突な感はあるが、高校の昼休みにそう時間的な余裕があるわけではない。
既に食べ終わっていたことでもあるし、フォーマルな口調に直した真由美の言葉に、俺達3人は揃って頷いた。
「単刀直入に言います。深雪さんに悠馬くん。貴方達が生徒会に入ってくださることを希望します」
「一つ聞いてもよろしいですか?」

「なんでしょう?」
「主席入学の深雪はともかく、どうして俺も勧誘するのですか?後、一年生を2人も勧誘しても良いんですか?」
　別に入りたくないとかなのではないのだが、原作では一年生の前期は深雪しか入ってないので規則的に大丈夫なのかと不安だったからだ。後は単純に自分が勧誘されている知りたいだけだ。
「前にも言ったけど、悠馬くんの実技は深雪さんよりも評価が高いですし、筆記も本来なら成績はトップですからね。それに『生徒会に2人勧誘してはいけない』みたいな規則も無いので大丈夫です」
「そうですか。分かりました、謹んでお受けいたします」
「・・・会長は兄の成績をご存知でしょうか?」
「ええ、知ってますよ。凄い成績でしたよね。先生も驚いてましたし、こっそり答案を見せてもらった時は、正直自信を無くしました」
「・・・成績優秀者や有能な人材を生徒会に迎え入れるのなら、私よりも兄の方が相応しいと思います」
「深雪!?」
　予想外の展開にに達也が叫ぶ。それだけ達也も驚いているんだろう。
「私を生徒会に加えていただけるというお話については、とても光栄に思います。喜んで末席に加えていただきたいと存じますが、兄も一緒にというわけには参りませんでしょうか?」
「残念ながら、それは出来ません」
　回答は、問われた真由美ではなく、その隣の席に座っている市原先輩からもたらされた。
「生徒会の役員は一科から選ばれます。これは不文律ではなく、規則です。この規則は生徒会長に与えられた任免権に課せられる唯一の制限事項として、生徒会の制度が現在のものとなった時に定められたもので、これを覆す為には全校生徒の参加する生徒総会で制度の改定が決議される必要があります。決議に必要な票数は在校生徒数の3分の2以上ですから、一科生と二科生がほぼ同数の現状では、制度改定は事実上不可能です」

淡々と、どちらかと言えばすまなそうに、市原先輩が告げる。
市原先輩も、一科生と二科生をブルーム・ウィードと差別している現在の体制に、ネガティブな考え方を持っているということが十分に分かる声音だった。
「・・・すいません。出すぎたことを申しました」
「いえ、デスクワークなら成績優秀者はむしろ適材なので本来なら欲しいところなのですが、生徒会が規則を破るわけにも参りませんので・・・」
この後、深雪の生徒会入りが決定し深雪が書記、俺が会計となった。
「そういえば、渡辺先輩」
「どうしたんだ？九島くん」
「風紀委員ってどうやって選任されるんですか？」
「基本的に各委員会の生徒会、部活連、教職委員会の３者が３名ずつ選任される」
俺はチラッと達也を見る。
「つまり、一科生の制限があるのはあくまで、生徒会役員だけなんですよね？」
「そうだが・・・！真由美、風紀委員の生徒会選任枠がまだ一枠空いていたな」
「ええ。生徒会の最後の一枠は達也くんにしましょう」
「ちょっと待ってください！俺の意思はどうなるんですか？大体、風紀委員が何をする委員なのかも説明を受けていませんよ」
いきなりすぎる展開に動転していた達也だがすぐさま抗議の声を上げた。
「俺と深雪はまだ具代的な仕事の内容を聞いてないんだが？」
「それはそうだが・・・」
「真由美、達也は仕事の内容を聞いたら考えるそうだ」
「ちょっと待て、俺はそんなｋ「達也くん、風紀委員は、学校の風紀を維持する委員会です」・・・それだけですか？」
「聞いただけでは物足りないかもしれないけど、結構大変・・・いえ、やりがいのある仕事よ？」

「だとよ」
　達也は真由美からそれ以上の情報を手に入れるのは無理と判断したのか視線を右にスライドさせる。
　俺も視線を右にスライドさせた先には市原先輩が居た。市原先輩の目には達也に対して同情の目はありそうだが、助け船を出す気はなさそうだ。
　その隣にスライドさせると渡辺先輩が居たが、たぶん面白がっているので達也の味方にはならないだろう。誘導した身で言うのもなんだがドンマイ。
　さらに隣にスライドさせると中条先輩が居たが、達也と視線を合わせると、中条先輩の目に狼狽が浮かんだ。
「あ、あの。当校の風紀委員会は、校則違反者を取り締まる組織です」
　達也にじっと見られ続けた中条先輩が口を開いた。
「風紀といっても、服装違反とか、遅刻とか、そういうのは自治委員会の週番が担当するので、魔法使用に関する校則違反者の摘発と、魔法を使用した争乱行為の取り締まりが風紀委員の主な任務です。風紀委員長は、違反者に対する罰則の決定にあたり、生徒側の代表として生徒会長と共に、懲罰委員会に出席し意見を述べます。いわば、警察と検察を兼ねた組織ですね」
「すごいじゃないですか、お兄様！」
「いや、深雪・・そんな『決まりですね』みたいな目をするのはちょっとm「起動式を読み取る事が出来るお前には天職だろ」・・・それをお前が言うな。念の為に確認させてもらいますが」
「何だ？」
　達也は、説明させていた中条先輩ではなく、渡辺先輩へ視線を向ける。
「今のご説明ですと、風紀委員は喧嘩が起こったら、それを力ずくで止めなければならない、ということですね？」
「まぁ、そうだな。魔法が使われていなくても、それは我々の任務だ」
「そして、魔法が使用された場合、それを止めなからばならない、と」
「できれば使用前に止められるのが望ましい」

「あのですね！俺は、成績が悪かったから二科生なんですが！」
達也が珍しく大声を出す。
大方、風紀委員は魔法で相手を捩じ伏せられる力量を前提とした職務であり、どう考えても魔法技能に劣った二科生に与える役職ではない、とでも思っているんだろう。
だが、難詰された渡辺先輩は、涼しい顔で簡潔すぎる返事をあっさり返した。
「構わんよ」
「何がですっ？」
「力比べなら私がいる・・・っと、そろそろ昼休みが終わるな。放課後に続きを話したいんだが、構わないか？」
「・・・分かりました」
達也にとっても有耶無耶ではすまされない話なのでそう選択するしか道はないだろう。ま、元を辿れば原因は俺なのだが。
「では、また此処に来てくれ」
理不尽を押し殺して頷く達也の横で、深雪は達也を気遣いながらも、喜びを押し隠せずにいる。
「失礼しました」
俺達は一礼して生徒会室を退室した瞬間
「悠馬・・・!!」
後ろからドスの効いた声が聞こえる。
後ろを振り返ると殺気を放ち睨みつける達也がそこには居た。もし、此処が戦場だったら確実に消されていただろう。
まぁ、此処で捕まっても何されるか分からないので俺は教室まで全力疾走で逃げるのだった。

第11話　司波達也ｖｓ服部刑部少丞範蔵

放課後、俺と深雪は達也と合流し再び生徒会室に向かっていたが、達也の足取りは昼休みの時以上に重くなっていた。

俺達は既にＩＤカードを認識システムは登録済みーー達也も認識システムに登録されているのは、真由美と渡辺先輩に押し切られた為ーーなので、そのまま中に入る。

生徒会室の中には昼休みには居なかった男子生徒が居た。

身長は俺と達也とほぼ同じで、横幅はやや細身。

整ってはいるが特筆すべき程のものではない容貌と、これといって特徴のない体つき、肉体的にはそれほど強い印象を与えないが、身の周りの空気を浸食するサイオンの輝きは、魔法力が卓越したものであることを示している。

俺はこの人の顔に見覚えがあった。入学式の時、達也を睨みつけた男子生徒、おそらく彼が生徒会副会長だろう。

「副会長の服部刑部です。司波深雪さん、九島悠馬君、生徒会へようこそ」

服部先輩はそのまま達也を完全に無視して席に戻った。深雪からムッとした気配が伝わってきたが、一瞬で消える。気づいたのは俺と達也以外いないだろう。

「よっ、来たな」

「いらっしゃい、悠馬くん、深雪さん。達也くんもご苦労様」

達也にも完全な身内扱いで気軽に手を挙げて見せたのは渡辺先輩、ナチュラルに違う扱いを見せたのは真由美だ。

「じゃあ、達也くん。私達は移動しようか？」

「どちらへ？」

「風紀委員会本部だよ。色々見てもらいながらの方が分かりやすいだろうからね」

渡辺先輩と達也が風紀委員会本部へ行こうとしたところで制止が入った。

「渡辺先輩、待ってください」

呼び止めたのは案の定、服部先輩だった。
「何だ、服部刑部少丞範蔵副会長」
「フルネームで呼ばないでください」
そういや、服部先輩のフルネームはやたら長かったな。本人が自己紹介した通りなら苗字が服部で刑部が名前なんだろうが、どうしてそんなにフルネームが長いのかいつか聞いてみよう。
「じゃあ服部範蔵副会長」
「服部刑部です！」
「そりゃあ名前じゃなくて官職だろ。お前の家の」
え？刑部は名前じゃないって事？なら範蔵が名前なのか？
服部先輩の名前の謎がより深まってーーこんな馬鹿な事を考えてあえるのは俺だけだろうがーーしまった。
「今は官位なんてありません。学校には『服部刑部』で届が受理されています！・・・いえ、そんな事が言いたいのではありません。渡辺先輩、お話ししたいのは風紀委員の補充の件です」
名前の件で血が上っていた服部先輩だったが、間を取っている間に落ち着きを取り戻していた。
「何だ？」
「その一年生を風紀委員に任命するのは反対です」
冷静に、感情を押し殺して、服部先輩が意見を述べる。
「おかしなことを言う。司波達也くんを生徒会選任枠で指名したのは七草会長だ。例え口頭であっても、指名の効力に変わりはない」
「本人は受諾していないと聞いています。本人が受け入れるまで、正式な指名にはなりません」
「それは達也くんの問題だな。生徒会としての意思表示は、生徒会長によって既になされている。決定権は彼にあるのであって、君にあるのではないよ」
渡辺先輩は、達也と服部先輩を交互に見ながら言う。
服部先輩は、達也を見ようとしない、いや、あえて無視している。
「過去、ニ科生（ウィード）を風紀委員に任命した例はありません」
服部先輩の反論に含まれていた蔑称に、渡辺先輩は軽く、眉を吊り

上げる。
「風紀委員長である私の前で禁止用語を使うとは、いい度胸だな。服部副会長」
渡辺先輩の叱責とも警告とも両方取れるセリフに、服部先輩は怯んだ様子を見せなかった。
「取り繕っても仕方ないでしょう。それとも、全校生徒の3分の1以上を摘発するつもりですか？一科生（ブルーム）と二科生（ウィード）の間の区別は、学校制度に組み込まれた、学校が認めるものです。一科生（ブルーム）と二科生（ウィード）には、区別を根拠付けるだけの実力差があります。風紀委員は、ルールに従わない生徒を実力で取り締まる役職だ。実力に劣る二科生（ウィード）には務まらない」
傲慢とも言える服部先輩の断言口調に、渡辺先輩は冷ややかな笑みで応えた。
「確かに風紀委員会は実力主義だが、実力にも色々あってな。達也くんには、展開中の起動式を読み取り発動される魔法を予測する目と頭脳がある」
「まさか?!基礎単一工程の起動式でもアルファベット3万文字相当の情報量があるんですよ！それを一瞬で読み取るなんて出来る筈がない！」
服部先輩の常識からすればありえない話だろうが、達也にはそれを可能とするだけの力がある。
「常識的に考えれば出来る筈がないさ。だからこそ、彼の特技には価値がある。彼は今まで罪状が確定出来ずに、軽い罰で済まされてきた未遂犯に対する強力な抑止力になる。それに、私が彼を委員会に欲する理由はもう一つある」
渡辺先輩はそこで一旦言葉を切り再び口を開いた。
「お前の言う通り当校には、一科生と二科生の間に感情的な溝がある。一科の生徒が二科の生徒を取り締まり、その逆は無いという構造は、この溝を深める事になっていた。私が指揮する委員会が、差別意識を助長するというのは、私の好むところではない」
渡辺先輩の主張に何も言い返せなくなったのか真由美に直接訴え

る。
「会長・・私は副会長として、司波達也の風紀委員就任に反対します。魔法力のないニ科生に、風紀委員は務まりません」
服部先輩が駄々を捏ねているようにしか見えないが、認めたくないのだろう。
実力主義組織である風紀委員にニ科生である達也が就任するのを認めたという事は達也の・・・ニ科生（ウィード）の実力を認めた事になるのだから。
一科生（ブルーム）である事に誇りとプライドを持っている服部先輩なら尚更だ。
「待ってください」
達也のことを貶されてとうとう我慢出来なくなった深雪が声を上げる。
「兄は確かに魔法実技の成績が芳しくありませんが、それは実技テストの評価方法に兄の力が適合していないだけなのです。実戦ならば、兄は誰にも負けません」
深雪の確信に満ちた言葉に、渡辺先輩が軽く目を見開き、真由美も曖昧な笑みを消して、真面目な眼差しを深雪と達也に向けている。
まぁ、深雪が実戦なら達也は真由美や渡辺先輩よりも強いと言ったような物だからその反応は当然といっちゃ当然だ。
だが、深雪を見返す服部先輩の目は、真剣味が薄かった。
「司波さん。魔法師は事象をあるがままに、冷静に、論理的に認識できなければなりません。身内に対する贔屓は、一般人ならばやむを得ないでしょうが、魔法師を目指す者は身贔屓に目を曇らせてはいけません」
「お言葉ですが、私は身贔屓で目を曇らせてなど・・・」
ヒートアップした深雪を止めるべく俺は深雪の前に手を翳す。
「確かに、深雪では身贔屓に思われるかもしれませんが、俺がとなれば話は変わりますよね？」
「悠馬さん・・・」
「深雪。この状況だと深雪がどんなに正しい事を言ったって全て身贔

屓で済まされる。だから、ここは俺に任せてくれないか？」
「分かりました。此処は悠馬さんを信じます」
深雪が後ろへ下がり、俺は服部先輩の前に立つ。
「九島君、君も司波達也の風紀委員就任を支持するというのか？」
「ええ。確かに魔法力という観点なら服部先輩の言う通り、二科生は一科生に劣ります。しかし、それはあくまで魔法力であって実力じゃない・・・なんて言っても納得しないでしょうから、達也と模擬戦をしてみては？」
「九島君。君は本気でそんな事を言っているのか？」
「ええ。百聞は一見に如かずにという諺があるように実際に達也と戦えば俺と深雪が言っている事が否が応でも分かると思います。という訳で、後は達也。お前が決めろ」
最後の部分は達也の方を見て言った。
俺は元居た場所に戻り、代わりに達也が制服のネクタイを締めながら服部先輩の前に立つ。
「服部副会長、俺と模擬戦をしましょう。別に、風紀委員になりたいわけじゃないんですが・・・妹と親友の目が曇っていないと証明する為ならば、やむを得ません」
「・・・いいだろう。身の程を弁えることの必要性をたっぷり教えてやる」
服部先輩の抑制された口調が逆に、憤怒の深さを物語っていた。
「私は生徒会長の権限により、二年Ｂ組・服部刑部と一年Ｅ組・司波達也の模擬戦を、正式な試合として認めます」
真由美がすかさず口を挿んだ。
「生徒会長の宣言に基づき、風紀委員長として、２人の試合が校則で認められた課外活動であると認める」
「試合はこれより３０分後、場所は第三演習室、試合は非公開とし、双方にＣＡＤの使用を認めます」
模擬戦を校則で禁じられている暴力行為・・・喧嘩沙汰としない為の措置だ。
真由美と渡辺先輩が厳かと形容して構わない声で宣言すると、あず

さが慌ただしく端末を叩き始めた。
◇◇◇
「悠馬さん、ありがとうございました」
「気にすんな。俺も達也を侮辱されるのは許せなかったからな」
　達也が生徒会長印の捺された許可証と引き換えにＣＡＤを取り行こうとしている時に深雪が俺に近づき深々と頭を下げる。
「達也」
「どうした」
「こんな事を言わなくても良いだろうが、あそこまでお膳立てしてやったんだ。絶対、勝てよ」
「愚問だな。お前や深雪の為にも負けられないさ」
　お互いハイタッチして達也と深雪はＣＡＤを取りに俺は２人より一足先に第三演習室へ向かう。
　第三演習室には達也の模擬戦の相手である服部先輩、審判に指名された渡辺先輩、そして渡辺先輩の後ろには真由美、市原先輩、中条先輩が居た。俺は模擬戦の邪魔にならよう真由美の隣に立つ。
「悠馬くん」
「なんだ？」
　突然、真由美に呼ばれた。
「私、入学式の時から疑問に思ってたんだけど、達也くんと仲良いよね」
「まぁ、そうだな」
「でも、入学式で始めて会った割には仲良すぎない？」
「あー、実は達也と初めて会ったのは入学式じゃないんだ」
「じゃあいつ会ったの？」
「今は言えない。言ったら面白くなくなるからな」
　やっぱり、十師族である俺と表向きには十師族ではない達也と入学前から仲が良い事に疑問を持っていたか。
　達也と深雪が四葉家の人間とバレないように上手く誤魔化さないとな。
「それってどういう事？」

「そのまんまの意味だ。ま、すぐに分かるから。それより服部先輩って強いんですか？」
「はんぞーくんはこの学校でも5指に入るほどの実力よ。どちらと言えば集団戦向きで、個人戦は得意とはいえないけど、それでも1対1で勝てる人なんて殆どいないわ」
　服部先輩の立ち振る舞いから自分の力に絶対の自信を持っているのは誰が見ても分かる。
「そうでしょうね。正面から遣り合えば達也は確実に負けるだろうし」
　一科生と二科生では魔法の発動速度に差が出る。
　やりようによってはＣＡＤを使うよりも速く魔法を発動出来る達也だが此処ではそれを使えない・・・いや使う訳にはいかないので絶対に服部先輩の方が魔法を速く発動できる。
　だが、いくら魔法を速く発動出来てもそれは当たらなければ意味がない。
　そんな事を考えている内に第三演習室の扉が開き達也と深雪が姿を現した。
　２人は第三演習室の中に入り、深雪は俺の隣に立ち達也は手に持っていた黒いアタッシュケースを隅のデスクに置く。
　黒いアタッシュケースを開くと、中には拳銃形態のＣＡＤが二丁収められていた。達也はその内の一方を取り、実弾銃で弾倉に当たる部分・形状のカートリッジを抜き出して、別の物に交換する。
　その様子を俺と達也を除く全員が、興味深げに見詰めていた。
「お待たせしました」
「いつも複数のストレージを持ち歩いているのか？」
　特化型のＣＡＤは使用できる起動式の数が限られている。
　なぜなら、汎用型ＣＡＤが系統を問わず９９種類の起動式を格納できるのに対して、特化型ＣＡＤは系統の組み合わせが同じ起動式を９種類しか格納できないからだ。
　その欠点を補う為に、起動式を記録するストレージを交換可能としたＣＡＤが開発されたが、元々特化型は特定の魔法式を得意とする魔

法師が好んで使用するデバイスだ。その為、魔法のバリエーションを増やすニーズは余り高くなく、複数のストレージを携帯しても結局使うのは1種類だけというケースがほとんどである。
「ええ。汎用型を使いこなすには、処理能力が足りないので」
好奇心を丸出しにした渡辺先輩の問いかけに、達也の回答は複数のストレージを使い分ける少数派に属している事を示すものだった。
それを聞いて服部先輩が冷笑を浮かべる。
「ルールを説明する。相手を死に至らしめる術式、並びに回復不能な障碍を負わせる術式は禁止。直接攻撃は相手に捻挫以上の負傷を与えない範囲であること。武器の使用は禁止。素手による攻撃は許可する。勝敗は一方が負けを認めるか、審判が続行不能と判断した場合に決する。ルール違反は私が力ずくで処理するから覚悟しろ。以上だ」
達也も服部先輩も共に挑発も無い引き締まった表情をしているが、服部先輩の顔には余裕が垣間見えた。
原作通りなら、服部先輩はスピードを重視した基礎単一系移動魔法で達也よりも速く魔法を発動させ、達也を１０メートル以上吹き飛ばし、その衝撃で達也を戦闘不能にさせて俺の勝利だとでも思っているんだろう。だが、それが通じるのは普通の二科生だけだ。
どちらが勝つか分かっている俺からしたらこの模擬戦など茶番も良いところだ。
達也はＣＡＤを握る右手を床に向けて、服部先輩は左腕のＣＡＤに右手を添えて、渡辺先輩の合図を待つ。
場が静まり返り、静寂が完全なる支配権を確立した、その瞬間。
「始め！」
渡辺先輩の合図と共に、達也と服部先輩の模擬戦の火蓋が切って落とされた。
服部先輩はＣＡＤを操作し、起動式の展開を即座に完了させて魔法を放とうとした瞬間、達也の姿が消えたと思ったら服部先輩が突然倒れ、後ろにはＣＡＤを水平に伸ばした達也が立っていた・・・と、思うだろう。勿論、俺には何が起こったのか全て分かった。

「・・・勝者、司波達也」

達也と服部先輩の模擬戦は達也の圧勝で終わるのだった。

第12話　タネ明かし

「・・・勝者、司波達也」
　服部先輩を瞬殺した達也の顔に、喜悦はない。
　ただ淡々と、為すべきことを為した顔をだった。達也は軽く一礼して、ＣＡＤのケースを置いたデスクに向かう。
「待て」
　その背中を渡辺先輩が呼び止める。
「今の動きは・・・自己加速術式を予め展開していたのか？」
「いえ、魔法ではなく、正真正銘、身体的な技術です」
「達也の言う通りです。それに、渡辺先輩程の実力者がその程度のことを見破れないとは思えないのですが」
「私も証言します。あれは、兄の体術です。兄は、忍術使い・九重八雲先生の指導を受けているのです」
「あの九重先生に・・・！」
　渡辺先輩が息を呑む。その様子だと渡辺先輩は師匠の事を知っているのだろう。
「もしかして、悠馬くんが言ったら面白くないってこの事？」
「そうだよ。達也が体術の指導を受けているなんて言ったらどっちが勝つか分かっちゃうだろ？」
「でも、悠馬くん。それが達也くんと初めて会った事とどう関係しているの？」
「それは・・・」
　俺は達也が模擬戦でやった高速移動で達也の隣に移動する。
「俺も達也と同じく師匠の指導を受けてるから」
　真由美はポカンとしていた。まぁ、いきなり言われたらそんな反応になるのも無理ないか。
「さて、悠馬。お前には何が起きたか、全部分かっただろうから、先輩達に分かりやすく説明してくれ」
「ったく、良いようにこき使いやがって。まぁ良いけど・・・」
　俺はぼやいてから、あの模擬戦で何が起きたのか解説を始めた。

「まず、試合が開始した瞬間、達也は体術による高速移動で服部先輩の背後に回りました。この時、服部先輩が放とうした魔法は、服部先輩の視界から達也の姿が消失したので不発に終わっています。その後、服部先輩の背後に回った達也は、多変数化させた基礎単一系振動魔法で振動数の異なるサイオン波を3連続で作り出し、3つの波が丁度服部先輩と重なる位置で合成されるように調整して、三角波のような強い波動を作り出したんです。達也の合成したサイオン波に晒された服部先輩は、自分の身体が揺さぶられたと錯覚してしまい、激しい船酔いようなものになって倒れてしまった・・・達也、これで合ってるか？」

「あぁ。文句なしの満点だ」

「そりゃ良かった」

間違った解説をしなくて良かったと胸を撫で下ろしていると、真由美が驚きながらも俺に問いかける。

「ちょ、ちょっと待ってよ。サイオン波を3連続で作り出したってあの短時間で振動魔法を3回も発動したってこと!?」

「それだけの処理速度があれば、実技の評価が低い筈ではありませんが・・・」

市原先輩に正面から成績が悪いと言われた達也は苦笑いだった。

「その答えは達也が使っているＣＡＤにあります」

「「ＣＡＤ（ですか）？」」

俺は真由美と市原先輩の疑問に答える。

ＣＡＤと言われても2人はピンと来ていないようだが、先程からチラチラと落ち着き無く達也の手元を覗き込んでいた中条先輩が、怖ず怖ずと

推測の形で答えてくれた。

「あの、もしかして、司波くんのＣＡＤは『シルバー・ホーン』じゃありませんか？」

「シルバー・ホーン？シルバーって、あの謎の天才魔工師トーラス・シルバーのシルバー？」

真由美に問われ、中条先輩の表情パッと明るくなった。

その様子を見て俺は中条先輩は「デバイスオタク」だったなと思い出す。
中条先輩は、目を輝かせ嬉々として語り出した。
「そうです！フォア・リーブス・テクノロジー専属、その本名、姿、プロフィールの全てが謎に包まれた奇跡のＣＡＤエンジニア！世界で始めてループ・キャスト・システムを実現した天才プログラマー！あっ、ループ・キャスト・システムというのはですね、通常の起動式が魔法発動の都度消去され、同じ起動式を展開し直さなければならなかったのを、起動式の最終段階に同じ起動式を魔法演算領域内に複写する処理を付け加えることで、魔法師の演算キャパシティが許す限り何度でも連続して魔法を発動できるように組み込まれた起動式のことで、理論的には以前から可能とされていたんですが魔法の発動と起動式の複写を両立させると演算能力の配分がどうしても上手く行かなかったのを・・・」
「ストップ！ループ・キャストのことは知ってるから」
真由美が中条先輩を慌てて止める。
確かに真由美が止めなければ、このまま延々とループ・キャストについて語りかねない。
「そうですか・・・？それでですね、シルバー・ホーンというのは、そのトーラス・シルバーがフルカスタマイズした特化型ＣＡＤのモデル名なんです！ループ・キャストに最適化されているのはもちろん、最小の魔法力でスムーズに魔法を発動できる点でも高い評価を受けていて、特に警察関係者の間では凄い人気なんですよ！現行の市販モデルであるにもかかわらず、プレミア付で取引されているくらいなんですから！しかもそれ、通常のシルバー・ホーンより銃身が長い限定モデルですよねっ？何処で手に入れたんですかっ？」
「あーちゃん、チョット落ち着きなさい」
息が切れたのか、胸を大きく上下させながら、中条先輩は目をハート型にして達也の手元を見つめている。真由美にたしなめられなければ、顔をくっつけんばかりの至近距離まで詰め寄っていたか可能性が高いだろう。

「でも、リンちゃん。それっておかしくない？いくらループ・キャストに最適化された高性能ＣＡＤを使ったからって、そもそもループ・キャストじゃ・・・」
「ええ、おかしいですね。ループ・キャストはあくまでも、全く同一の魔法を連続するための・・・九島君、私達に説明した際に多変数化と言っていませんでした？」
「ええ、市原先輩のおっしゃる通りです。達也は、座標・強度・持続時間に加え、振動数を変数化させて魔法を放ちました。尤も、多変数化は処理速度としても演算規模としても干渉強度としても評価されない項目ですが」
　俺の解説を終えた後も、真由美と市原先輩と渡辺先輩は達也の技量に驚いている。
「・・・実技試験における魔法力の評価は、魔法を発動する速度、魔法式の規模、対象物の情報を書き換える強度で決まる。なるほど、テストが本当の能力を示していないとはこういうことか・・・」
　呻き声を上げながら、服部先輩が半身を起こす。
「はんぞーくん、大丈夫ですか？」
「大丈夫です！」
　少し腰を屈めて、のぞき込むように身を乗り出してきた真由美に対し、寄せられて来た顔から逃げるように、服部先輩は慌てて立ち上がった。
　服部先輩は冷静さを取り戻すと、俺と深雪の方を向く。
「司波さん、九島君。先程は身贔屓などと失礼な事を言って申し訳ない。テストでは本当の力が測れないという意味が分かりました。目が曇っていたのは、私の方だ。許して欲しい」
「私の方こそ、生意気を申しました。お許しください」
「自分も、服部先輩には舐めた口を聞いて申し訳ありませんでした」
　俺と深雪と服部先輩はお互いに謝罪したが、服部先輩は達也に謝罪する事はなかった。
　とはいえ、達也の実力を認めてくれただろうから風紀委員入りを拒むような事はしないだろう。

これで模擬戦も終わり、生徒会室へ移動しようとした時だった。
「どうやら、決着はついていたようだな」
「十文字くん!?」
「十文字?」
第三演習室に入ってきたのは厳のような男子生徒が入ってきた。
身長は１８５センチ前後。分厚い胸板と広い肩幅、制服越しでも分かる、くっきりと隆起した筋肉。
そういう肉体的な特徴だけでなく、人間を構成する諸要素を凝縮するだけ凝縮したような、存在感の密度が桁外れに濃厚な人物だった。
そして、俺はこの人を知っている。
「久しぶりだな、九島」
「お久しぶりです、克人さん」
この人は十文字克人。俺と同じ十師族の一員である十文字家の次期当主にして当主代行だ。
克人さんは達也の方を向き、口を開く。
「司波、先程の模擬戦、見事だった」
「ありがとうございます」
達也は克人さんに一礼する。
克人さんは体の向きを変えると、服部先輩の方に近づく。
「服部、負けたようだな」
「っ・・・はい」
「なら、次に活かせ。胡座をかいていたらまた足を掬われるぞ」
「はい!」
服部先輩は克人さんのアドバイスを胸に秘め、立ち去ろうとするが克人さんは服部先輩の肩に手を置く。
克人さんが手を離すと、服部先輩は第三演習室から立ち去らずに、真由美達の方へ行く。
「十文字くん。この模擬戦は非公開なんだけど・・・誰から聞いたの?」
「お前達に用があったんだが、生徒会室に居なかったんでな。そしたら、第三演習室が使用中と聞き、もしかしたら思い来てみたら当たったというだけの話だ」

「それで十文字くんは私達にどんな用があるの？」
　克人さんは俺の方を向き
「九島、お前に模擬戦を申し込む」
「克人さん、一応理由をお聞きしてもよろしいですか？」
「お前とは、一度手合わせをしてみたかった。それだけだ」
　克人さんの答えは簡潔だったが、その言葉にはお互いの実力をぶつけ合いたいという思いがこれでもかと伝わってきた。
「分かりました。その勝負、受けて立ちます」
「十文字、模擬戦するには構わないが、演習室の使用時間はそんなに残ってないぞ」
「使用時間なら延長申請を出してきた。九島、ＣＡＤの準備をしたいならいくらでも待つぞ」
「いえ、このままで問題ありません」
　俺は常時発動していた『一方通行』を解除し左腕に白色のブレスレット型ＣＡＤを装着する。
　克人さんは渡辺先輩に審判を頼むと、お互い模擬戦の初期位置に立つのだった。

第13話　空間支配？いいや、ベクトル操作だ

俺と克人さんは、お互い模擬戦の初期位置に立ち、渡辺先輩の合図を待つ。

「ルールを説明する。相手を死に至らしめる術式、並びに回復不能な障碍を負わせる術式は禁止。直接攻撃は相手に捻挫以上の負傷を与えない範囲であること。武器の使用は禁止。素手による攻撃は許可する。勝敗は一方が負けを認めるか、審判が続行不能と判断した場合に決する。以上だ」

渡辺先輩が先程と同様ルールを説明するが、正直余り耳に入ってこない。俺も克人さんも鋭い目線を外さずに、全神経を集中させた渡辺先輩の合図を待っている。

そして、第三演習室の静寂が最高潮に満ちた瞬間。

「始め！」

試合開始直後、克人さんは４系統８種、全ての系統種類を不規則な順番で切り替えながら絶え間なく紡ぎ出し、防壁を幾重にも作り出す十文字家の多重移動防壁魔法『ファランクス』を展開すると、俺に向かって一直線にタックルする。

俺はというとその場から一歩も動かずにＣＡＤを操作し起動式を読み込む。克人さんのタックルが間近に迫って来た時になってようやく魔法式を構築し『一方通行（アクセラレータ）』を発動した。そして、克人さんのタックルが俺に触れようとした瞬間。

「なっ!?」

『一方通行』は効果範囲に触れたあらゆるベクトルを操作する魔法。

克人さんの運動量を反射させ、克人さんを吹っ飛ばす。今度は、俺の足元のベクトルを前方に集中させ、音速を超えるかもしれない高速移動で吹っ飛んでいる克人さんの背後に回り、吹っ飛んでいる克人さんを軽く小突く。克人さんの運動量と小突いた時に発生した際の運動量を全て前方に集中させるように操作し、さっきよりもさらに速く克人さんは吹っ飛び克人さんを壁に激突させた。

「しょ、勝者、九島悠馬！」

壁に激突した克人さんが床に倒れた事で、俺の勝利となった。
この場にいる殆どの者が驚いている。それは、俺が克人さんを倒したからなのか、『一方通行』に対してなのか、はたまたその両方なのかは分からない。
「まさか、これ程とはな・・・」
声のする方を見てみると克人さんが壁を支えにして立ち上がっていた。
運動ベクトルを集中させて壁にぶつけたのに、もう起き上がるとかこの人は本当に人間なのか？
「十文字!?お前、大丈夫なのか？」
「あぁ、背中を強く打っただけだからな。九島・・・やはり、お前が『空間の支配者』なんだな」
「まぁ、そうですね。誤解の塊みたいな二つ名ですが」
全く、誰がそんな二つ名で呼び出したんだが。
「周囲の空間を意のままに操る魔法師と言われるあの『空間の支配者』ですか!?」
服部先輩が俺に驚きながら問いかける。
「えぇ。かなり誇張というか完全に誤解なんですがその『空間の支配者』です」
「誤解とはどういう事なのか説明してもらえないかな、九島君」
「それは構いませんが、逆に克人さんはどうして俺が『空間の支配者』と思ったんですか？」
大規模なベクトル操作はしていないのにどうして分かったんだが。
「九島が俺に触れずに吹き飛ばしたのと、お前が吹っ飛んだ俺の背後に回ったあの移動は、自己加速術式にしては速すぎると思ったからだ」
まぁ、後者は瞬間移動とかに思えるかもしれんが、前者は空間を支配出来たらもっと早い段階で吹っ飛ばしてるんだが。
「克人さんが触れずに吹っ飛ばした事に気づいた事に驚いていますが、空間を操っている訳じゃないんです」
「なら、お前は何をしたんだ？」

渡辺先輩が急かすように問いかける。
「克人さんを触れずに吹っ飛ばせたり、自己加速術式よりも速く動けたのは俺の固有魔法『一方通行（アクセラレータ）』のおかげです」
「アクセラレータ？」
たぶん多くの人はアクセラレータと聞いたら粒子加速器を思い浮かべるだろう。
「粒子加速器ではないですよ。俺が一方通行と書いてアクセラレータと呼んでるだけです」
「それで、その『一方通行（アクセラレータ）』はどんな魔法なんだ？」
「運動量・熱量・光・電気量といったあらゆるベクトルを観測し、操作する魔法です。克人さんを吹っ飛ばせたのは克人さんの運動量を反射、自己加速術式よりも早く動けたのは俺の足元に発生していたベクトルを全て前方に集中させるよう操作しただけです」
俺の説明に他の人達は驚いていた。
「『空間の支配者』が誤解の塊で出来た二つ名とはそういう訳か」
「ええ。俺が操るのはベクトルであって空間ではありませんから」
「悠馬くん。さっき十文字くんの運動量を反射させたって言ったけど、それって魔法も反射できたりするの？」
「ベクトルさえあるのならなんでも反射できるし、狙った所に操作する事も可能だ」
「それって戦略級魔法も？」
「戦略級魔法なんて打たれた事ないけどベクトルあるなら出来るんじゃない」
一方通行（アクセラレータ）が核兵器打たれても傷一つつかないとか言ってたからベクトルのある戦略魔法なら反射出来るだろう。
「で、真由美。そろそろ生徒会室に戻った方が良いんじゃねぇの？生徒会の仕事とかもあるだろうし」
「そ、そうね。摩利も達也君に風紀委員の仕事を説明しないといけないし戻りましょうか」
「九島」
生徒会室へ戻ろうとしていた俺を克人さんが呼ぶ。

「はい」
「この勝負、俺の負けだが面白い物を見せて貰った。勝負を受けてくれて感謝する」
「こちらこそ十文字家の『ファランクス』をお目にかかれたので。それでは、失礼します」
「あぁ」
十文字先輩と別れ俺達は生徒会室へと戻るのだった。
◇◇◇
達也の模擬戦と予定外だった俺と克人さんの模擬戦も終わり俺達は生徒会室へと戻ってきた。
達也は渡辺先輩と風紀委員会本部にいる。その風紀委員会本部は何故か生徒会室の真下であり、中で繋がっている。何故、そんな変わった造りをしているのかは良く分からない。
俺と深雪はというと、市原先輩と中条先輩から生徒会の仕事を教えてもらう事になっていた。初めに市原先輩から使用しているデータベースの説明と注意を受けた後、俺は市原先輩から深雪は中条先輩から仕事内容を説明される事になった。
「生徒会の業務は学校の業務は学校行事の計画と記録、学校に対する予算申請と決算報告、他の魔法科高校との打ち合わせと親睦、生徒の学校への苦情・要望受付、学校から委託された生徒データの整理など多岐にわたりますが、九島君にはまず学校から委託された生徒データの整理をやってもらおうと思います」
「分かりました」
市原先輩の指示に従い、データベースから全校生徒の名簿データを開く。
「では、一年生の調査票を開いてください」
「生徒会ってそんなものまで扱っているんですか？」
「秘密度の高い情報は載っていないので心配しなくて大丈夫です」
「そうですか」
一年生の調査票を開くと市原先輩は無作為に選んだ男子の学外活動データを開くよう指示される。

俺はキーボードを出現させるとコマンド入力で活動データを開く。
「コマンド入力とは珍しいですね。それにもの凄く早いですし」
「ウチの従姉がこの手の物に強いので」
俺の従姉である響子さんに、ハッキング技術を学ぶ過程で様々なコマンドを覚えたが、市原先輩にそんな詳しく説明する訳にもいかない。
この後もいくつかの生徒の活動データを開き、市原先輩の指導は終了したと思ったら、真由美が突然立ち上がり移動を始める。
「真由美、何処行くんだ？」
「ちょっと達也くんの様子を見にね」
「それ、生徒会の仕事に関係あんのか？」
「だって摩利と二人きりだし気になるじゃない」
この後の「空気をピーする魔法が得意だし??」は聞かなかった事にしよう。
まさか、渡辺先輩がそんな魔法を得意としているのは露にも思わなかった。
「別に面白いことは何も？」
達也が風紀委員会本部から生徒会へ帰ってきた。
まぁ、達也ならそんな事やあんな事にはならないだろうとは思っていたが、やっぱり何もないと聞いて何処かホッとした。
「会長、妹もいるので変な事を吹き込まないでください」
「達也くんおねーさんに対する扱いがぞんざいじゃない？」
「あのっ！」
達也と真由美の遣り取りに深雪が割り込む。
「失礼ですが会長とお兄様は入学式の日が初対面だったと記憶していますが？」
「そうかかなぁ、そうなのかな？ふふふ・・・」
真由美が怪しい笑みを浮かべる。
「遠い過去に出会いを果たしていた私たち。運命の悪戯に引き裂かれた2人が、また惹かれ合い入学式のあの日再び巡り逢ったの!!」
まるでミュージカルのようだ。しかも仕草がいちいち芝居がかっ

てるし。
「・・・でも、それは達也くんじゃなくて～」
突然、真由美が俺の腕にガバッと抱きつく。
「悠馬くんね」
「何が運命の悪戯だ。毎年誕生日パーティーで会ってるだろ。しかも、ちょくちょく七草邸にお邪魔してるし」
平静を装ってはいるが、内心気が気じゃない。心臓とかバクバクしてるし。
何故かって。そりゃあ真由美のアレが腕に当たってる・・・というか、この人なんならワザと当てに来てるだろ。
「でも、私からしたら運命の出会いよ。だって諦めかけてた悠馬くんと同じ学校生活を送れるんだから」
「そんな嬉しい事言われたら1人暮らし覚悟で来た甲斐があるけどさ。ちょっと離れてくんね？」
「嫌よ」
「嫌よじゃない。離れろ」
俺は離そうとしても真由美は離されないようにしがみついてくるので俺と真由美はバランスを崩して転倒してしまった。しかも傍から見たら俺が真由美を押し倒したような形に。
「これはどういう状況だ」
最悪のタイミングで渡辺先輩が生徒会室にやって来た。
「風紀委員は魔法を不正使用者を取り締まるんだが、風紀委員長であるこの私の前で女子生徒を押し倒すとは良い度胸だな」
「いや、あのこれは不慮の事故でして・・・」
「言い訳は本部でじっくり聞いてやる」
「はい・・・」
余りにも理不尽だが、俺は風紀委員会本部へと連行されるのだった。

第１４話　司波家にお邪魔します

余りにも理不尽な出来事に風紀委員会本部へと連行されたが、渡辺先輩に事情を説明し、無事に解放された。この後、俺と入れ替わりで真由美が風紀委員会本部へと連れて行かれた。

程なくして、真由美が生徒会室に帰ってくると「今日は解散」と言われ、俺は司波兄妹と共に下校した。

いつもなら駅から少し一緒に歩いて別れるのだが、今日は例の性能テストをするので、司波兄妹の自宅へと向かう。

「悠馬、今日の模擬戦で『一方通行（アクセラレータ）』について先輩達の前で話していたが良かったのか？」

「構わねぇよ。父さんや爺ちゃんから使うなとか言われてないし、お前の魔法と違って軍事機密指定にされてる訳じゃないしな」

なんで俺の魔法が軍事機密指定にされていないのかは良く分からない。いや、達也の魔法に比べたらマシだとは思うぞ。血流操作ですんごいグロデスクな事は出来るけど。

ただ、『一方通行（アクセラレータ）』を父さんや爺ちゃんから制限させたりしないのは大方推測がつく。今の九島家は爺ちゃんのお陰で十師族に選ばれているような状態、要は過去の栄光で十師族に選ばれているようなものなのである。その為、九島家がこれからも十師族に選ばれ続ける為にも俺の力を他の奴らに見せつけておきたいのだろう。

そうこうしている内に俺達３人は司波兄妹の家に到着した。２人で暮らすにはかなりデカいのは外観だけでも分かるがこれに地下室まであると思うと一般人だったら空いた口が塞がらない事だろう。

「お邪魔します」

「悠馬、ついて来てくれ」

達也の案内の元、俺達は地下室へ向かう。地下室はＣＡＤの調整装置等が置かれている作業場のような所だった。そして、調整装置の傍に今回のお目当ての物が置かれていた。

それは黒いチョーカーに見えるが、只のチョーカーではなく俺が達也に頼んだチョーカー型ＣＡＤである。モチーフは勿論一方通行（アクセラレータ）が

付けていた演算補助デバイスであり、違う部分といえばイヤホン状のコードがないだけでそれ以外はまんま同じである。
「既に『一方通行(アクセラレータ)』の起動式はインストールしてあるから、まずは測定からだ。そこに服を脱いで横になってくれ」
「分かった」
俺は服を脱いで達也が指さした計測用の寝台のような所で横になる。因みに、深雪はこの場に居ないので安心してください。
「もう良いぞ」
測定が終わると達也はキーボードを叩き始める。達也がチョーカー型ＣＡＤの調整をしている内に俺は服を脱いだ服を再び着る。
「終わったぞ」
調整の終わったチョーカー型ＣＡＤを達也は俺の元に持ってくる。俺は達也からそれをを受け取ると首に付ける。
「性能テストをするには此処だと危ないからな。ついてきてくれ」
「了解」
俺はそう言って達也の後ろをついて行く。達也に連れられてきたのは地下２階の天井が高い大きな部屋だった。
「此処なら『一方通行(アクセラレータ)』を使っても大丈夫だろう」
そう言って、達也が取り出したのは鉛の玉を取り出す。
「弾き玉ってお前、大丈夫か？」
弾き玉とは、小さな鉛の玉を指の力で投げつける投擲暗器術のことだ。
「大丈夫だ。それに、いざとなったら『分解』するしな」
そうだった。こいつにそんな心配するのは無駄以外の何者でもなかった。
「分かってると思うが、普通に反射しろよ」
「んなこと言わなくたって、速度を倍にして反射したりしねえよ」
達也が少し速度を抑えて、鉛の玉を弾く。俺はチョーカー型ＣＡＤの電源を入れ、『一方通行(アクセラレータ)』の起動式をロード。今日の克人さんの模擬戦の時よりも遥かに速く魔法式を構築出来た。
達也が弾いた鉛の玉は、俺に触れるか否かの所でビデオの巻き戻し

かのように達也に向かっていた。達也は戻ってきた鉛の玉を危なげなくキャッチした。
その後も『一方通行(アクセラレータ)』で高速移動してみたり、達也の持ってた鉛玉を借りて、音速で飛ばしてみたりと様々な事をした。只、鉛玉を音速で飛ばした時に壁に穴を開けてしまった時は達也に『再成』で戻してもらった。
「すまん、達也。『再成』を使わせるような事をして」
「神経の通わぬ無機物は巻き戻したって何の問題もない。それより、どうだ?」
「あぁ、最高。ありがとな、達也」
チョーカー型ＣＡＤの電源を切り、達也に礼を言う。
「俺も今回のＣＡＤの制作はいい勉強になった。ありがとう、悠馬」
どうやら、今回のＣＡＤの制作は達也にも得る物があったようだ。
「お兄様、悠馬さん。夕食の準備が終わりました」
タイミングを窺っていたのだろう。俺らがひと段落ついた時に深雪が入室して夕食の準備画終わった旨を伝えた。
「あぁ。すぐに行く」
「右に同じく」
チョーカー型ＣＡＤの性能テストが終わった俺達は、一階のリビングに向かう。
リビングのテーブルには様々な料理が並べられていた。まるで・・・というか、ぱっと見ホテルのビュッフェだ。
「今日は随分と気合いが入ってるな」
達也から見てもこの夕食は気合いが入っているらしい。
「今日はお兄様だけでなく、悠馬さんも居ますので腕によりをかけて作りました」
どうやら、俺が居るからみたいたがそれにしたって豪華過ぎやしないだろうか?まぁ、深雪が良いみたいだから別に良いけど。
それから俺と達達也と深雪は机に並べれた料理を食べていく。こんなに美味しい夕食は一人暮らしをしてから初めてである。
「ごちそうさまでした」

深雪ので手料理をたらふく食べ大満足の俺。
「いや～こんな美味いもん久しぶり食った。ありがとな、深雪」
「深雪。美味しい料理をありがとう」
「ありがとうございます、お兄様、悠馬さん。食後のデザートは如何します？」
勿論、俺も達也も食べると選択したのは言うまでもない。
夕食だけでなくデザートまで頂いた俺は達也が自分のＣＡＤの調整をすべく地下室に篭るというので、その前に帰宅する事にした。
「今日は本当にありがとう。ＣＡＤから夕食にデザートまで」
「ＣＡＤに関しては気にするな。さっきも言ったが、俺にも得る物があったからな」
「夕食やデザートに関しても気にしないでください。私が好きでやっただけなので」
「そっか」
と、口では言うものの心の中で改めて２人に感謝を述べる。
「それじゃ、また明日学校で」
「あぁ、またな」
「また学校で会いましょう」
お邪魔しましたと言って、俺は司波家を後にするのだった。

第15話　勧誘という名の馬鹿騒ぎ

俺達が通っている魔法科高校は色々と特殊なところがあるが、基本的な制度は普通の学校と変わらない。

俺が通っている第一高校にもクラブ活動はあり、正規の部活動として学校に認められる為には、ある程度の人員と実績がある点も同じだ。

只、魔法と密接な関わりを持つ、魔法科高校ならではのクラブ活動も多い。まぁ、魔法科の高校だから当然っちゃ当然だろう。

メジャーな魔法競技では、第一から第一九まである国立魔法大学の付属高校の間で対抗戦も行われ、その成績が各校間の評価の高低にも反映される傾向にある。学校側の力の入れようには、スポーツ名門校が伝統的な全国競技に注力する度合いを上回るかもしれない。

第一から第一九まである国立魔法大学の付属高校の間で対抗戦・・・九校戦と呼ばれるこの対抗戦に優秀な成績を収めたクラブには、クラブの予算からそこに所属する生徒個人の評価に至るまで、様々な便宜が与えられている。

なので、有力な新入部員の獲得競争は、各クラブの勢力図に直接、影響をもたらす重要課題であり、学校もそれを公認、いや、むしろ、後押ししている感もある。

かくして、この時期、各クラブの新入部員獲得合戦は、熾烈を極める

「・・・という訳で、この時間は各部間のトラブルが多発するんだよ」

場所は生徒会室。

達也は深雪の弁当を、俺は少し気になっていた自動配膳機の肉メニューを食べながら、渡辺先輩の話を聞いていた。

ちなみに、自動配膳機の肉・及び魚メニューは悪くはないが、物足りないなさは否めないし、何より毎日、この2つをローテンションしていたら、絶対に飽きるので、明日からは弁当にしようと心に決めた。

「勧誘が激し過ぎて授業に支障を来たす事もあるわ。それで、新入生勧誘活動には一定の期間、具体的には今日から一週間という制限を設

けてあるの」
　これは、渡辺先輩の隣に座った真由美の台詞だ。
　ちなみに、原作だと1人だけダイニングサーバーの機械調理メニューを食べる事になった真由美が、かなりへそを曲げたが、俺もダイニングサーバーの機械調理メニューを食べていたので、特に機嫌を損ねる事はなく、むしろ、機嫌は良い方だった。
　さらに補足すると、明日からは弁当と言ったら、自分も弁当を作ってくる、と張り切っていた。
「でも、いくら勧誘が激しいとは言っても、授業に支障がきたす程なんですか？」
「この期間は各部が一斉に勧誘のテナントを出すからな。ちょっとした所じゃないお祭り騒ぎだ。オマケに、密かに出回っている入試成績リストの上位者や、競技実績のある新入生は各部で取り合いになる。無論、表向きはルールがあるし、違反したクラブには部員連帯責任の罰則よあるが、陰では殴り合いや魔法の撃ち合いになる事も、残念ながら珍しくない」
「うわぁ・・・」
　想像しただけで、思わず、そんな声が出てしまった。
「ＣＡＤの携行は禁止されているのでは？」
　渡辺先輩の言葉に、達也は訝しげな表情を浮かべながら、質問する。
「そうですよ。ＣＡＤがなければ、魔法の撃ち合いなんて言う程の激しい応酬を起こすのは不可能だと思いますが」
　この疑問に対する渡辺先輩の答えは、俺達を呆れさせる物だった。
「新入生向けのデモンストレーション用に許可が出るんだよ。一応、審査はあるんだが、事実上フリーパスでね。その所為で余計にこの時期は、学内が無法地帯と化してしまう」
　そりゃあ、無法地帯になるわ、と俺と達也は反射的に思ってしまった。
「だったら、審査を厳しくしたりしないんですか？」
「学校側としても、九校戦の成績を上げてもらいたいから。新入生の入部率を高める為か、多少のルール破りは黙認状態なの」

課外活動の強制は生徒の人権を無視する物として、何十年も前に所管省庁が禁止通達を出している。
だが、部活動の為にスカウトされた生徒も巷には溢れているし、学校選択の自由の建前でスポーツスカウトは事実上野放しにしているのだから、自家撞着かつ意味のない通達だ。
まぁ、建前として無視出来ない効力を持ち続けているようだけど。
「そういう事情でね、風紀委員は今日から、1週間、フル回転だ。いや、欠員の補充が間に合って良かった」
そう言いながら、チラッと達也を見たのは、恐らく、嫌味のつもりなんだろう。
「良い人が見つかって良かったわね、摩利」
そして、真由美は笑顔でさらりと流す。
2人共、眉一つ動かさない所を見ると、こういう遣り取りは日常茶飯事・年中行事なのだろう。
(ドンマイ、達也)
最後の一口を呑み込み、湯飲みに入ったお茶を飲みながら、そう思わずにはいられない俺だった。
◇◇◇
「うわぁ・・・噂には聞いてたけど、ウチの学校の新入部員勧誘週間って、ホント凄いよねぇ・・・」
「昼休みにお祭り騒ぎとは聞かされたけど、ここまでとはな」
放課後、ほのかと一緒に校舎の窓から外を見てみると、本当に凄い事になっていた。
生徒(恐らく、新入生)が通る度に、沢山の人達が詰め寄って勧誘してくる。
さらに、こっそり『管理者の眼(アドミニス・サイト)』を使って見てみれば、デモンストレーションで派手さを求める為か魔法もバンバン使っていた。
そりゃあ、魔法の撃ち合いなんてのも起きるわ。『管理者の眼(アドミニス・サイト)』を解除して、何食わぬ顔で窓の外を普通に見ていたように装う。
「司波さんと悠馬さんはクラブには入らずに、生徒会だけ?」
「えぇ。ちょっと他に手が回りそうになくて」

「入る前から遅くまで仕事をする事があるって言われたしな。オマケに、勧誘期間だけでも、追加予算の見積もりやら修理の手配やら苦情受付やら、色々あるみたいだし」
勧誘期間に忙しいのは風紀委員会だけではなかった。
俺と司波兄妹は、この勧誘期間に於いては肩書きが学生兼社畜になりそうだ。まぁ、内1名は既に社畜に分類されるかもしれないが。
「2人共、大変そうだね」
「でも、2人も大変だと思うぞ。入試成績リストが密かに出回ってるらしいから、成績上位者は取り合いになるらしいから」
新入生総代であり、主席で入学した深雪と大ポカをやらかし、新入生総代に成り損ねた俺は、既に生徒会に入っているので、勧誘される事は無いーーもし、生徒会に所属しているのを知ってるのに勧誘して来たら、ソイツは相当な猛者だろうーーだろうが、生徒会に所属していない且つ成績上位者のほのかと雫は、何としても自分のクラブに入れようとかなり勧誘されるだろう。
「って事だから、2人共、外を出歩く時は気をつけて」
『一方通行』の範囲は俺を基点としているので、2人に近づいてくる奴を片っ端から吹っ飛ばすなんて芸当は俺の近くに居てくれないと出来ないのだ。
「うん。気をつけるよ」
「それじゃあ、ほのか、雫、また明日」
深雪がほのかと雫に別れの挨拶を告げると、ほのかが顔を赤くする。
「ほのかって・・・」
ほのかがプルプルしてる。
「お兄様がおっしゃったでしょう?深雪で良いのよ」
深雪の言葉にほのかが後ろに倒れそうになったので、常時発動している『一方通行』の範囲をほのかに触れるかどうかぐらいに広げて、ほのかの力の向きを反射して、俺の方に飛ばす。
さらには、『ベクトル分散』で力の向きを分散させたので、難なく受け止め、壁を支えにして、もたれさせる。

「今のって・・・」
「しっ」
俺は人差し指を口に当てる。
「生徒会役員が学校で魔法を使ったのがバレたら怒られるから。この事は誰にも言わないでくれ」
「分かった」
ほのかの方を見ると、幸せそうな顔だった。
この分だと、大丈夫そうだな。
「それじゃあ、ほのかの事、よろしく」
「うん。バイバイ。深雪、悠馬さん」
雫はほのかの手首を握って、手を振らせ、空いている自分の手も振って、俺達を見送った。
(さ～て、頑張りますか)
心の中で気合いを入れて、俺達は生徒会室へと向かうのだった。
◇◇◇
「ほんっと、この時期は大変よね。忙しくて、目が回るわ」
「それは、仕事中に『おいしい弁当のおかず、レシピ１００選』とか見ている人が言う台詞じゃないだろ」
出来上がった書類を真由美に見せに行ったら、人が仕事で忙しい時に何を見てるんだ。
「だって、明日からは悠馬くんも弁当なんでしょ。そうなったら、私だけの配膳機のメニューになるじゃない。だから、私も明日からは弁当！」
「はいはい。なら、さっさとこの書類の確認してくれ」
「悠馬くん。お姉さんの扱いがぞんざいじゃないかしら？」
「仕事中に他事している人に、相応しい対応をしているまでです」
ついでに、ぞんざいな扱いをされたくなかったら、真面目にやれと付け加えた。
「真面目に仕事をしたら、ぞんざいな扱いをやめてくれる？」
「辞める」
「それじゃあ、生徒会長として悠馬くんに仕事を与えるわ」

どうやら、真面目に仕事をしてくれる気になったようだ。
真面目に仕事をしてくれるなら、俺も対応を・・・
「巡回の応援をよろしく。詳しい事は摩利から聞いて」
「・・・は？」
「そうそう。修理の手配やら苦情の受付も巡回している時に頼まれるかもしれないから、その都度、対応よろしくね」
「いや、ちょっと・・・」
真面目に仕事するように見せかけて、面倒い仕事を全部、押し付ける気じゃねぇか。
しかも、タチが悪い事に生徒会長として、ちゃんと仕事をしている。だって、この構図は、生徒会会長という上司が、生徒会会計という部下に仕事を任せるという物にしか見えないからだ。任せる仕事が全部、面倒い物なので、嫌がらせにしか見えないが。
「摩利～悠馬くんの事、よろしくね」
「分かった。九島くんを連れて行ってくるよ」
ぞんざいな扱いを辞めると言ってしまった手前、俺に拒否権は無い。
大人しく、言われるがまま従うしか無いのだった。
◇◇◇
「君は随分と信頼されてるんだな」
廊下を渡辺先輩と歩いていると、不意に渡辺先輩がそんな事を言ってきた。
「どうですかね。これみよがしに面倒な事を押し付けられた気しかしませんけど」
「いくら、猫被りで素が小悪魔なアイツでも、嫌がらせの為だけに仕事を任せるような奴では無い事ぐらい、君も知ってるだろ」
「そうですね」
初めて会った時からもう１０年近く経っているのだ。それだけ長い付き合いになると、真由美の人となりぐらいは嫌でも分かる。
「それになんだかんだ言いつつも、君は真面目に仕事をするだろ？」
「子供じゃないんですから、愚痴は溢すかもしれませんが、駄々をこね

るつもりは毛頭ないですよ」
　出会った時から振り回されっぱなしはせいか、最終的には、しゃあねぇなぁと付き合うようになってしまった自分が居るのも事実だ。
「君は風紀委員ではないが、これを渡しておこう」
　渡辺先輩から薄型のビデオレコーダー手渡された。
「レコーダーは胸ポケットに入れておけ。ちょうどレンズ部分が外に出る大きさになっている。スイッチは右側側面のボタンだ」
　言われた通り、ブレザーの胸ポケットに入れてみると、そのまま撮影出来るサイズになっていた。
　ついでに、現場に立ち会った時に手間取らないよう、ボタンの位置も確認する。
「違反行為を見つけたら、すぐにスイッチを入れること。風紀委員は証言が原則として、そのまま証拠に採用されるが、九島くんは生徒会役員だからな。すまないが、撮影を意識してくれ。その代わり、無理に止めようとしなくて良い。その場を場所と状況さえコレで知らせてくれれば、風紀委員のメンバーが駆けつける」
　渡辺先輩から少し大きいインカムが手渡される。
「分かりました」
「巡回の応援は、行き過ぎた勧誘の見張りが主な仕事だが、君には期待しているよ。正直な所、君は風紀委員会に入れたかったからな」
「そうなんですか？」
　え？なに？もしかしたら、俺は達也みたいに風紀委員会に半強制で入れられる所だったかもしれなかったのか？
「新入生一覧表で君を見つけた時には風紀委員会に入れようとしたんだがな。真由美が、私には絶対に渡さないと五月蝿かったから、諦めたんだ。その代わり、司波兄を風紀委員会に入れれたから、結果オーライだったがな」
　そんな事が起きていたのか。只、その言い方だとまるで、俺が真由美の所有物みたいに聞こえるけど、違うからな。
「と、此処からは別行動だ。頼んだぞ、九島くん」
「分かりました」

真由美に与えられた仕事を遂行すべく、俺は校舎の外へ一歩踏み出すのだった。

◇◇◇

「ハァ・・・本当にどうなってんだ・・・」

校舎の外はもう地獄絵図が広がっていた。

新入生は絶対に逃さんと言わんばかりの人溜まりで、生徒会に所属しているからこそ、勧誘される事は無かったが、仮に生徒会に所属していなかっらと思うと身の毛がよだつ。

只、生徒会と知るや否や、勧誘される代わりに苦情やら修理やら予算を増やしてくれやらで対応が大変だった。後で、真由美には覚えとけよと言っておこう。生徒会室に来そうなのを全部、こっちで片付けたんじゃないかってぐらいに働いている。

そして、極め付きには違反行為のオンパレード。殴り合いやら魔法の撃ち合いやらそれはもう、大変素晴らしい事になっていた。しかも、こっちに魔法が飛んで来る事もあった。『一方通行』で反射したから良かったものの、『一方通行』が使えなかったら普通に直撃してたぞ。

九校戦の成績を上げてもらいたいとはいえ、少しは生徒の安全面の事も考えて欲しいと思う今日この頃。正直、今まで死人が出ていないのが奇跡に思えて来た。

「ハァ・・・こちら、操弾射撃部テナント前。過剰な勧誘行為を発見。逮捕の手配をお願いします」

またもや、違反行為を見つけたので、レコーダーのスイッチを入れて、インカムで連絡する。

風紀委員が偶々、近くに居たのもあって、すぐに逮捕してくれた。

これでもう何回目だよと思いつつも、その光景を見届ける。

「ん？」

ふと、目を離すと、スケボーに乗った男女２人がほのかと雫を抱えて、もの凄い速さでその場を離脱する。

「すみません、先輩。そのスケボー、ちょっと借ります」

「え、あ、あぁ」

風紀委員の先輩が何故か持っていたスケボーを借りると、スケボーに乗り、足で地面を蹴って勢いをつける時に『一方通行』でベクトルの向きを全て進行方向に向けて、猛スピードで追跡する。
さらには、加速術式と『一方通行』の範囲をスケボーのウィールのベクトルも操作出来るように調整して、レコーダーのスイッチを入れる。
「こちら、九島。バイアスロン部の部員と思われる生徒2名が過剰な勧誘行為を行い、スケボーに乗って逃走中です」
スケボーで追いかけながら、インカムで連絡する。
「チッ。スピードを上げやがった」
ほのかと雫を抱えた男女が、俺に気づいてスピードをさらに上げて来た。
「逃すか」
俺はインカムを仕舞うと、こっちもスピードを上げて追いかける。
「止まりなさい！過剰な勧誘行為は禁止ですよ!!」
『一方通行』と加速術式を同時に使っているからか、少しずつ差が縮まってきている。
曲がったりして、張り切ろうとしているが、こっちはベクトル操作で、ベクトルを強引に曲げて、減速せずにほぼ直角の角度で曲がっている。
相手は減速せずに曲がるには大きく曲がらなければならないし、コンパクトに曲がろうものなら、必ず減速しなければならない。レースじゃないが、コーナーリングで大きく差を縮めていきたいところだが、流石に相手もこの人間離れーーまぁ、魔法師なんてどいつもこいつも傍から見れば、人間離れしているだろうがーーの動きに気づいたのか、不用意に方向転換しなくなってしまった。
「チッ。このまま、スピードを上げて追いかけるしか・・・って、おい、マジかよ・・・」
雫を背負っている女がＣＡＤを取り出す。
あの女、俺を振り撒く為に魔法を使う気かよ。
そう思ったのも束の間、俺とほのかと雫を抱えた男女の間に突然、

下降気流が叩き付けられた。
突然、下降気流が地面に叩き付けられるなんて、魔法以外では、あり得ない現象だ。
「チッ。反射させて、相手の追い風を増す訳にもいかねぇし」
そんな事をしようものなら、相手の逃走を手助けしてしまう羽目になる。
悩んでいる時間も勿体ないので、パッと思いついた案を実行に移す事にした。
俺は一旦、『一方通行』の範囲を通常の範囲に戻すと、スケボーごと前に飛び上がって、左手でスケボーを掴むと、空中で一回転。地面で受け身を取って、体制を整えてから、右足に発生したベクトルを全て斜め上に束ねて、大きく飛び上がる。イメージは、某小さな探偵映画でやっていた車の上での大ジャンプ。
それを、『一方通行』で再現して、地面に叩き付けられた下降気流によって発生した向かい風を飛び越える。
「ぐっ！」
『一方通行』でスケボーで着地の際に発生したベクトルを操作して、どうにか着地する。
「あっぶねぇ・・・」
傍から見たら、綺麗に着地したように見えるかもしれないが、『一方通行』が無かったら、着地の時に骨折してたって、おかしくなかったぞ。
「スッゲェ。魔法なんだろうが、あんな大ジャンプした上に、殆どブレずに着地するとか本当に新入生か？」
「そうね。風紀委員じゃないみたいだから、生徒会に所属してるんだろうけど、生徒会に入ってなかったら、ＳＳボード部に欲しかったわね」
俺の『管理者の眼』はーー達也の『精霊の眼』もだがーー、盗聴する事が出来るーー声（言葉）も情報体としてイデアに記録される為ーーので、２人の会話を聞いていた。
ＳＳボード部に欲しかったって事は、あの男女は、ＳＳボード部の

部員なんだろう。
「・・・よし」
俺は、ほのかと雫を抱えた男女の追跡を表向きには断念。一旦、あの2人から、距離を取る。
「諦めたのか？」
「だったら、好都合ね。今のうちに行きましょ、颯季」
「だな」
どうやら、俺が追跡を断念したように判断したようだ。
だが、実際は断念などしていないし、今も『管理者の眼』であの男女の事は、監視している。
俺が特典として選んだ、『一方通行』と『未元物質』の汎用性が高過ぎるせいで、普通の魔法が決して使えない訳じゃないんだが、『一方通行』と『未元物質』で事足りるせいで、滅多に使わない。現に今も、『一方通行』専用ＣＡＤであるチョーカー型ＣＡＤしか持って来ていないしな。
ただ、『一方通行』を使うと大抵、物騒になりがちーーベクトルを操作してるんだから当然かもしれないーーなので、ほのかと雫がＳＳボート部に保護されてから、あの2人を捕える。
「よし、案の定、ＳＳボード部の溜まり場に向かってるようだな」
鉢合わせないようスケボーを疾走させて、ＳＳボート部の溜まり場付近へと向かい、待機する。
（ん？服がジャージじゃない？）
ほのかと雫を抱えた男女は、ジャージだったというのに、ＳＳボード部の溜まり場に居た人達は、スポーツウェアのような物ではあるものの、ジャージではない。
と、そんな事を考えている内に、ほのかと雫を抱えた男女がＳＳボード部の溜まり場へとやって来た。レコーダーのスイッチは今も入れっぱなしなので、容量オーバーやら電池切れにでもなってない限り、問題ない。
「萬屋先輩!?さらに風祭先輩まで！」
「どうして、此処に!?」

なるほど、もしかして、あの2人はＯＢとＯＧなのか？
それなら、納得が行く。先輩と呼ばれ、服装がジャージで、まるで此処に居る事が想定外のような驚き方。
点と点が線で繋がり、疑問に思った謎が全て解明した。
「と、今のうちに・・・」
あの2人にはバレないよう、しかし、いつ逃げられても良いように、慎重且つ迅速に移動し、距離を詰めて行く
「コイツ等を頼む」
「新入部員よ、可愛がってあげて」
「へっ？」
萬屋と風祭と呼ばれた2人が、ほのかと雫を放り投げる。
咄嗟に、『一方通行』を使って助け出そうとしたが、空気のクッションみたいな物で受け止められた。
ホッと一息つつも、2人との距離を詰めて行く。
「またな、亜実」
「積もるお話は、また今度」
そう言って、2人がこの場を去ろうとした瞬間、俺は『一方通行』によって、最大限加速して、2人との距離を詰めると、2人の肩をガシッと掴んだ。
「積もる話があるなら、今すれば良いじゃないですか？それとも、アレですか？何か逃げなきゃいけない理由や用事がおありで？」
「諦めたんじゃ無かったのかよ」
「誰がいつそんな事を言ったんですか？もし、本当にそんな事が聞こえたのなら、スケボーを疾走して、強引な勧誘なんかしたりせずに、耳鼻科に行く事をお勧めしますが」
捕まえるのに、随分と手間を取らされたので、最大限の嫌味を言ってやった。
「さて、皆さんはこのお二方のグルではないと思いますが、くれぐれも俺の友達に過剰な勧誘行為はしないでくださいね」
笑顔に威圧を加えて、俺は忠告した。
どの部に入るかは、本人の自由なので、この部に入りたいと言って

も特に止めるつもりはないが、無理矢理、この部に入れさせようとするなら、ついでに風紀委員会に引き渡すつもりだ。
「さて、今から風紀委員会に連絡しなきゃいけないので、この手を離しますが、逃げたらどうなるか分かりますよね？せーんぱい？」
男の先輩を脅してから、俺はインカムを取り出して、風紀委員に連絡するのだった。

第16話　放課後ティーパーティー

連絡してから程なくして、渡辺先輩がやって来た。
案の定、2人はこの学校の卒業生だったのだが、男と思っていた先輩が女だった。
髪の長さは俺とそう変わらないし、口調も男っぽかったから、てっきり、男だと思っていた。よくよく見れば、胸に女性特有の膨らみがあるというのにな。
で、渡辺先輩と一緒に部活連本部に行き、克人さんや真由美に報告。ビデオレコーダーに保存されていた映像データも一緒に提出した。正直、此処が生徒会室で克人さんが居なかったら、嫌味の1つでも言っていただろう。
とりあえず、真由美から今日の業務は終わりと言われたので、生徒会室には、戻らなくても良いようだ。
「ん、達也？」
「悠馬か」
部活連本部室の外に出ると、達也が居た。
「何でお前が此処に？」
「むしろ、風紀委員じゃないお前が何故、此処に居たのか気になるんだが？」
「真由美に巡回の応援に加えて、修理の手配やら苦情の受付なんかの対応を任されたからな。過剰な勧誘してたＯＧ達を引っ捕えたから報告に。達也は？」
「俺は魔法の不適正使用で剣術部の部員を逮捕したからな。今からそれの報告だ」
どうやら、達也の方も違反行為に出くわしていたらしい。
「なら、深雪を呼んで、此処で待っていた方が良いか？少なくとも、俺は業務が無いみたいだし」
それに、もうすぐで日没なので、深雪の方も仕事が終わっているかもしれない。それなら、此処に連れて来た方が良いのかと思ったが・・・

「なら、深雪の業務が無かったから、此処に連れて来てもらえるか？終わってなかったら、深雪と生徒会室に居てくれ」
「ん、了解」
　一旦、達也と別れた俺は、生徒会室へと向かう。
　部活連は、生徒会室のある本校舎とは別棟に置かれている。なので、部活連本部から生徒会室へ行くには、一旦、校庭へ出て昇降口に回らなければいけないのだ。まぁ、前世の学校とは違って、上履きという習慣は殆ど見られないので、靴を履き替える必要が無いだけ、まだ、マシだが。
「ただいま、戻りました」
「お疲れ様です、九島君」
「お疲れ様です、悠馬さん。聴きましたよ。過剰な勧誘行為を行ったＯＧを逮捕したと」
「何処から知ったのかはともかく、その言葉は、素直に褒め言葉として受け取っておくよ」
　さっき、報告に行ったばかりの事を何故、深雪が知っているのは疑問に思うが、大方、真由美か渡辺先輩が漏らしたんだろうな。
「それにしても、どうして戻って来たのですか？会長から、本日の業務は終わりと聞かされている筈ですが・・・」
　まぁ、生徒会室に戻らなくても良いと言われた人物が生徒会室に居るからな。疑問に思うのも何ら不思議ではない。
「部活連本部前で偶然、達也と会いまして。深雪の業務が無かったら、部活連本部前に連れて行こうと思いまして・・・」
「お兄様もどなたか逮捕されたのですか？」
「あぁ。詳しい事は知らないが、魔法の不適正使用で剣術部の部員を逮捕したんだと」
「そうですか。流石はお兄様です」
「それは、本人の前で言ってやれ。で、深雪は今日の業務は終わったのか？」
「はい。先程、終わったばかりです。市原先輩、先に上がってもよろしいですか？」

「はい。戸締まりなどは私がやっておくので」
「それでは、お先に失礼します」
俺達は、市原先輩に会釈して、生徒会室を後にした。
さっきと通った所と同じ所を通って、部活連本部前に行こうとした時だった。
「お、悠馬じゃねぇか」
「深雪、おつかれ～」
昇降口に出た所で、レオとエリカと美月に遭遇した。
さっき、昇降口を通った時には、誰も居なかったが、入れ違いだったのだろうか？
「2人は今から帰る所？」
「俺はともかく、深雪が達也を置いて帰る訳ねぇだろ」
そんな事は、お互いの立場が逆転していたとしても、天地がひっくり返る可能性より遥かに低いだろう。何なら、この兄妹がどちらかを置いて帰らないに、全財産を賭けても良い。
「これから、お兄様の出迎えに部活連本部前まで、悠馬さんと一緒に出迎えに行こうとしていたところよ」
「達也さん、部活連本部に居るんですか？」
「あぁ。魔法の不適正使用で、剣術部の部員を逮捕したらしいから、その報告で部活連本部に居るんだよ」
美月達に達也が部活連本部前に居る訳を説明する。
「なら、俺達も部活連本部前まで行って、達也を出迎えようぜ」
「そうだな・・・って言いたい所だが、どうやら、その必要は無さそうだぞ」
チョンチョンと、とある一点を指差す。
全員、そっちの方を見ると、深雪が俺が指差した方へ駆ける。それもその筈、俺が指差した方には達也が居るのだから。
「あっ、おつかれ～」
「お兄様」
真っ先に声を上げたのはエリカだったが、真っ先に駆け寄ったのは深雪だった。

思いがけない機敏さに、俺と達也以外の面子が目を丸くしている。
「お疲れ様です。本日は、ご活躍でしたね」
「大した事はしてないさ。深雪の方こそ、ご苦労様。それと、悠馬。人の事を指差すのはどうかと思うぞ」
「まぁ、お前なら大丈夫かなって」
「お前の辞書には、親しき仲にも礼儀ありって言葉は無いのか」
「流石にやっていい事と悪い事の区別はしているつもりだ。それと、深雪のおねだりは無視して良いのか？」
現に深雪は達也の顔を見上げている。
「俺だから良いが、他の人にはやるなよ」
「安心しろ。お前以外には、やらん」
その言葉を聞いて、達也は深雪の髪を二度、三度とゆっくり撫でた。
深雪は気持ち良さそうに目を細めながら、兄である達也を見詰める。勿論、その瞳は一瞬たりとも晒さない。
「兄妹だと分かっちゃいるんだけどなぁ・・・」
２人へ歩み寄りながら、気恥ずかしげな表情で、微妙に視線を外しながらレオが呟くと・・・
「何だか、凄く絵になってますよね・・・」
その隣では、美月が顔を赤らめながらも、食い入るように２人を見ている。
「お前ら・・・あの２人に一体、何を期待してるんだ？」
「その通りよ。あの２人は兄妹なんだけど？」
俺の言葉に、エリカがレオを半眼で睨みながら、同調する。
そして、エリカが繰り出した台詞の省略部分は、２人にも、ちゃんと伝わったようだ。慌てふためくレオと美月の反応がその事を雄弁に語っていた。
「ババババカ言うなよ！なな何も期待してねぇって！」
「そそそそうですよ、エリカちゃん！へへ変なこと言わないで！」
「・・・ハイハイ、そういう事にしといてあげる」
もっとも、俺の冷やかしとエリカのツッコミが入らなければ、レオと美月の勘違いは止まるところを知らなかっただろう。

そんな俺達の奮闘も知らず、達也はようやく妹である深雪の髪から手を放して、俺達に目を向けた。
深雪も、名残惜しそうな顔を見せつつ、兄である達也に倣う。
「そういう表情を見せるから、変な妄想を招くんだろうな・・・」
「何か言ったか？」
「嫌、何も」
ボソリと呟いた言葉に達也が反応したので、何食わぬ顔で無かった事にした。
「そうか。それより、悠馬と深雪が何故、此処に？」
「部活連本部前に深雪を連れて行こうとしたら、お前のクラスメイト3人と此処で会ってな。皆で行こうとした時に、お前が来たってわけ」
「そういう事か。すまんな、待っていてくれたのか」
達也が誠実な表情で、申し訳なさそうに友人へ声を掛けた。
「水くさいぜ、達也。ここは謝るとこじゃねぇよ」
レオがカラッとした笑顔で首を横に振る。
「私はついさっき、クラブのオリエンテーションが終わったところですから。少しも待っていませんよ？」
美月も人当たりの良い柔らかな微笑みと共に、達也の謝罪を必要ないと否定する。
「そいつも部活が終わったばかりだから。気にしなくていいよ」
エリカは悪戯っぽい笑顔で、人を食った答えを返した。
三者三様の笑顔で達也を出迎えるレオ、美月、エリカ。
事実が言葉と裏腹である事に達也はすぐに気づいただろうが、彼女達の心遣いを敢えて無にするような真似はしなかった。
「こんな時間だし何処かで、軽く食べて行かないか？1人、1000円までなら奢るぞ。勿論、悠馬は自腹だが」
「おい！」
何、俺だけサラッと仲間外れにしてるんだよ。
「冗談だ。悠馬も1000円までなら奢る」
「お前の冗談は、マジで冗談に聞こえないから勘弁してくれ」

現在の通貨価値だと、高校生にとって１０００円という金額は、少し高めではあるが妥当なラインだ。
それ以上の謝罪を呑み込んだ、代わりの誘い。
それが分からぬ者も、余計な遠慮を口にする者も、此処には居なかった。
◇◇◇
入学式の日とは別のカフェで、俺達は今日の事・・・入部したクラブの事とか、退屈な留守番の事とか、勧誘に名を借りたナンパの事とか、色々な体験談に花を咲かせていた。
「しかし、ビックリしました。外を見たら、悠馬さんがスケボーに乗って、大ジャンプしていたのですから」
「見てたのかよ」
まさか、深雪に見られていたとは。
「見てたというより、見えたの方が正しいですね」
が、生徒会室から偶々、見えたようだった。
「生徒会室から見えるって、どんだけ高いジャンプしたのよ」
「魔法で発生した下降気流を飛び越えようとしたからな」
追いかけるのに必死だったから、生徒会室から見えるぐらい大ジャンプしていたとは自分でも思わなかった。
「よく骨折しなかったですね」
「着地の時にも魔法を使ったしな。ていうか、魔法を使わずに着地しようとしたら、確実に骨は折れてるから」
いくら、師匠の元で体術の修行をしてるからって、生徒会から見えるような高さから、魔法を使わずに着地しようものなら、ただで済まないのは目に見えている。
「んで、その大ジャンプをした後に、この学校のＯＧを捕まえたんだろ？流石、十師族だぜ」
「しかも、あの老師のお孫さんですもんね」
「アハハ・・・」
「どうしたんだよ」
「いや～・・・ここに、俺の父さんや兄達が居なくて良かったなぁ～と

思ってな」
特に、俺の6歳上の兄と父さんの前では、絶対に聞かせられない。
とまぁ、俺の追跡劇も話題に上がったが、最も関心を引いたのは、達也の捕物劇だった。
「・・・その桐原って2年生、殺傷性ランクBの魔法を使ってたんだろ？よく怪我しなかったなぁ」
俺としては、そんな桐原って奴は、よく停学処分にならなかったな。
剣道部の新勧演武に乱入した挙句、殺傷性ランクBの魔法なんて使えば、停学処分でも全然おかしくないぞ。
「致死性がある、と言っても、高周波ブレードは有効範囲の狭い魔法だからな。刃に触れられない、という点を除けば、良く切れる刀と変わらない。それ程、対処が難しい魔法じゃないさ」
さっきから手放しで感心しているレオに、やや辟易した表情で達也が応じる。
「まぁ、刃に触れなきゃいいだけだからな」
俺の場合、『一方通行』があるので、高周波ブレードを持って襲いかかろうが、触れる前に反射して終了である。
「いや、そんな簡単に言われても・・・」
「実際、そうだろ」
「触れない刃の対処法はそうなるな」
「・・・・・・」
俺と達也の言葉にレオが絶句する。
まぁ、師匠の元で体術の修行をしている訳でもないレオからすれば、そう思っても仕方ないだろう。
「で、でもそれって、真剣を振り回す人を素手で止めようとするのと同じって事でしょう？危なかったんですか？」
「大丈夫よ、美月。お兄様なら、心配要らないわ」
「随分余裕ね、深雪？」
今更のように顔を曇らせた美月を宥める深雪の表情は、エリカ達から見れば不自然なほど余裕があった。
「確かに、10人以上の乱戦を捌いた達也くんの技は見事としか言え

ないものだったけど、桐原先輩の腕も決して鈍刀じゃなかったよ。むしろ、あそこに居た人達の中では頭一つ抜け出してた。深雪、本当に心配じゃなかったの？」
　エリカに問われた、深雪の答えは・・・
「えぇ。お兄様に勝てる者が居るとすれば、それは悠馬さんしか居ないもの」
　一分一厘の躊躇もない断言・・・なのだが・・・
「あの、深雪さん？ついでとばかりに俺のハードルを上げるのを辞めてもらえませんか？」
「お兄様が悠馬さんは、真っ向から対峙しうる人物と言っていましたが・・・」
　いや、まぁ、確かに俺の固有魔法の片割れを駆使すれば、達也の『分解』を無力化出来るが、それでも『再成』を突破する手段が無いので、長期戦になるだろう。
　そうなると、どちらが先にサイオンが尽きるかの泥沼仕合になるだろう。しかも、俺と達也のサイオン保有量は規格外なので、1日で決着がつくかどうか。
「・・・えーっと・・・」
　これには、エリカも絶句するしかない。
「・・・達也さんの技量を疑う訳じゃないんだけど、高周波ブレードは単なる刀剣と違って、超音波を放っているんでしょう？」
「そういや、俺も聞いた事があるな。超音波酔いを防止する為に耳栓を使う術者もいるそうじゃねぇか。まっ、そういうのは最初から計算ずくなんだろうけど」
「いや、そうじゃなくてだな。単に、達也の体術が優れてるだけじゃないんだよ」
「えぇ。魔法式の無効化は、お兄様の十八番なの」
　深雪の言葉にエリカがすかさず食いついた。
「魔法式の無効化？情報強化でも領域干渉でもなくて？」
「えぇ」
　得意げに頷く深雪と「仕方ないなぁ」という顔で笑っている達也を

交互に見て、エリカは感嘆の表情と呆れ顔の半々で呟いた。
「それって結構、レアなスキルだと思うけど」
「そうね。少なくとも、高校の授業では教えないのではないかしら。教えられたからといって、誰にでも出来る事ではないのだし。エリカ、お兄様が飛び出した直後、床が揺れたような錯覚を覚えたのでしょう？」
「う～ん、あたしは大した事に成らなかったけど、酷い乗り物酔いと同じ症状が出た生徒も居たみたい。そういえば、最初の程じゃ無かったけど、乱闘中も頻繁に揺らぎを感じたような・・・？」
「それ、お兄様の仕業よ。お兄様、キャスト・ジャミングをお使いになったでしょう？」
　ニッコリと、作り笑いを向けてくる深雪に、達也はため息の白旗を掲げた。
「深雪には敵わないな」
「それはもう。お兄様の事ならば、深雪は何でもお見通しですよ」
「いやいやいや」
　苦笑いと微笑、笑顔を見合わせる2人の間に、素っ頓狂な声でレオが割り込む。
「それって、兄妹の会話じゃないぜ？恋人同士のレベルも超えちまってるって」
「そうかな？」「そうかしら？」
　寸分の狂いもなくハーモニーを奏でた達也と深雪に、たっぷり1秒は硬直した後、レオは力尽きたかの如くテーブルに突っ伏した。
「あのな、レオ。このラブラブ兄妹にツッコミを入れる事は、天変地異に自分から突っ込んで行くぐらい、無謀な事だぞ」
　俺ですら、達也の冗談にツッコミを入れるのが関の山だ。
　そう思うと、この兄妹にツッコミを入れる事が出来る人材は、この地球上に存在するのだろうか？
「少なくとも、アンタじゃ最初から太刀打ち出来ないって」
　しみじみ語るエリカに・・・
「あぁ、俺が間違ってたよ・・・」

身体を起こしながら、やはりしみじみとレオが応える。
「その言われ様は不本意なんだが」
達也が、さして不本意とも思っていない口調で抗議（？）するも、
「良いじゃありませんか。私とお兄様が強い兄妹愛で結ばれているのは事実ですし」
深雪がサラリと兄である達也を宥める。
直後、今度はエリカとレオが、同時に突っ伏した。
「ぐはっ！」
レオは、血でも吐き出そうなセルフ効果音まで付けて、自分の心情を表現していた。
「私はお兄様の事を、誰よりも敬愛いたしておりますので」
それでも、深雪は止まらない。友人達へ見せつけるように、わざわざ椅子を動かして達也に身を寄せ、近くなった距離から熱い眼差しで兄の顔を見上げる。
「あー、もうあたし帰ろーかなー」
エリカはテーブルに頬を押し付けたまま、すっかりやさぐれていた。
「・・・深雪、悪ノリも程々にしとけよ」
と、俺が深雪を嗜めると・・・
「冗談だって分かってないのも約1名いるようだから」
達也が苦笑いしながら、続きの部分を言ってくれた。
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
そして、深雪、エリカ、レオの視線が残る1人に集まった。
「・・・えっ？えっ？冗談？」
顔を赤く染めて俯いていた美月が、沈黙を浴びせられながら、キョロキョロと左右に目を彷徨わせるに至って、誰からともなくため息が溢れた。
「・・・まっ、これが美月の持ち味よね」
「あぅ・・・」

エリカの微笑ましげな呟きに、美月の顔が別の意味で赤く染まった。
「・・・そういや、キャスト・ジャミングとか言ってなかったか？」
ここで、自分もノッていたとはいえ、これ以上この何となく、むず痒い雰囲気が続いては堪らないとばかり、レオが強引に話題を戻した。
「タネを明かせば、そうなんだ」
「良いのか？タネ明かしをして」
「出来れば、タネ明かしはしたくなかったが、この雰囲気は何とかしたいからな」
達也としては、あまり好ましくない話題であろうが、この雰囲気を何とかする為に已む無し、とレオの話に乗る事にしたようだ。
「キャスト・ジャミングって、魔法の妨害電波の事だっけ？」
「電波じゃないけどな」
「慣用句よ」
レオが放った言わずもがなのツッコミを、すました顔で切り返して、エリカは何事もなかったように達也へ視線を戻した。
キャスト・ジャミングは、魔法式が、事象に付随する情報体・エイドスに働きかけるのを妨害する魔法の一種であり、広い定義でいえば無系統魔法と同じ性質を有している。
同じように相手の魔法を無効化する『領域干渉』という魔法があるが、この術式は自分を中心とした一定のエリアに対して、何の情報改変も伴わない、干渉力のみが定義された魔法式を作用させる事により、他者の魔法式の干渉をシャットアウトする技法だ。これに対して、キャスト・ジャミングは無意味なサイオン波を大量に散布する事で、魔法式がエイドスに働きかけるプロセスを阻害する技術である。
領域干渉はある意味で、魔法を予約する事により、他者の魔法の割り込みを防止するものであり、基本的に相手より強い干渉力が必要となる。
一方、キャスト・ジャミングは他のユーザーがデータをアップロードしようとしている無線回線の基地局に対し、大量のアクセス要求を

行う事によりアップロードの速度を極端に低下させるようなもので、干渉力の強弱はそれほど問題にならない。その代わり、４系統８種全ての魔法を妨害する事の出来るサイオンノイズ、先の例で言えば、周波数を頻繁かつ不規則に切り替える事により、一本の送信アンテナでも帯域を全て塞いでしまうような電波を作り出す事が必要とされる。
「でもあれって、特殊な石が要るんじゃなかったけ？アンティ・・・アンティ何とか・・・」
　半端なところで固有名詞を思い出せずにいるエリカに、何とか復活を果たした美月が助け舟を出す。
「アンティナイトよ、エリカちゃん。達也さん、アンティナイトを持ってるんですか？凄く高価な物だったと思うんですけど」
　アンティナイトは、キャスト・ジャミングの条件を満たすサイオンノイズを作り出す物質として知られている。魔法師が自身の演算でキャスト・ジャミング用のノイズを作り出す事も理論上は可能とされているが、実行は困難ともされている。
　領域干渉とは異なり、キャスト・ジャミングの影響下では自分の魔法発動も阻害されてしまう為、魔法師本人の意識がキャスト・ジャミング用のノイズを構成しようとしても、無意識下では本能的にそれを拒否してしまうからだ。（魔法演算領域は無意識領域に形成されるものであり、意識の作用よりも無意識の作用の方が優先される）
　その為、キャスト・ジャミングを使うには、サイオンを流すだけで４系統８種全ての魔法を妨害する事の出来るサイオンノイズを発振するアンティナイトの利用が不可欠と考えられている。
「軍事物資であるアンティナイトを一民間人が手に入れる事は出来ないよ」
　それは、暗に自分は、アンティナイトを持っていないと言っているが、達也の常識を覆す解答を受け入れる事が出来ないからか、美月達が一斉に俺の方に視線を集中させる。
「確かに、ウチは軍事とか軍需に強い繋がりがあるから、実家を漁ればワンチャンあるかもしれんが、少なくとも俺から達也にアンティナイトを贈ったりはしてねぇよ」

とは言ったものの、ウチからアンティナイトが見つかったら、腰を抜かす自信があるぞ。
いくら、爺ちゃんが元国防陸軍の軍人で現在は国防軍魔法顧問をしていたとしており、父さんが様々な軍需産業会社の株主、出資者、債権者だったとしてもだ。っていうか、腰抜かしながら何故あるのか絶対に聞く自信がある。
「えっ?でも、キャスト・ジャミングを使ったって・・・」
実際に声を発したエリカだけでなく、レオと美月も訳が分からないかという顔をしている。
「あー・・・これはオフレコで頼みたいんだが・・・悠馬」
「了解」
『一方通行』の効果範囲を俺達をすっぽりと覆うように設定し、効果範囲の内側から触れた音を反射するように設定した。
「達也、俺達の声が外部に聞こえないようにしといたから、遠慮なく喋っていいぞ」
「助かる」
そうして、達也はオフレコの内容を話し始めた。
「正確には、俺が使ったのはキャスト・ジャミングではなく、キャスト・ジャミングの理論を応用した『特定魔法のジャミング』なんだ」
達也の話を聞いて、美月がキョトンとした顔で何度か瞼を瞬かせた。
「えっと・・・そんな魔法、ありましたっけ?」
「無いと思うけど」
美月の質問に直接答えたのはエリカだった。
「それって、新しい魔法を理論的に編み出したって事じゃない?」
エリカの声には、感心や驚愕や賞賛より呆れたようなニュアンスが強く含まれていた。
オリジナルの魔法を使う魔法を使う魔法師は少なくない。子供の頃からオリジナル魔法を得意とする魔法師の卵も多いし、俺も転生での特典とはいえ、子供の頃からオリジナル魔法を使っている身だ。
だがそれは、本能的、あるいは直感的に自分にあった魔法を自然に

編み出すものが大半で、理論的に新しい魔法を構築出来る魔法師は数少ない。
　魔法は無意識領域の作用に大きく依存している為、無意識に使える魔法は後から理論付けすれば良いが、理論的に新しい魔法を作り出す事は、それが単なる既存魔法のバリエーションであっても、その魔法の構成と作動原理を完全に理解する事が要求されるからだ
　高校生が新しい魔法を理論的に編み出したとすれば、異常とは言われないまでも非常識な事ではある。
「編み出したって言うより、偶然発見したという方が正確だな」
　エリカの正直な反応に、達也は笑みを浮かべながら答えた。
「２つのＣＡＤを同時に使おうとすると、サイオン波が干渉して殆どの場合で魔法が発動しない事は知っているよな？」
「まぁ、やった事あるしな」
「あぁ、俺も経験した事があるぜ」
　俺とレオは達也の言葉に頷く。
「うわっ、身の程知らず」
「それは、どっちのことを言ってんだ？」
「悠馬じゃなくて、そっちのバカに言ってるに決まってるじゃない」
　どうやら、エリカに身の程知らず扱いされてるのはレオの方だ。
「バカって何だ！バカって」
「２つのホウキを同時に使うって、魔法を並列起動させようとしたって事なのよ？そんな高等テクが出来ると思うなんて、身の程知らずなバカと言いようが無いじゃない」
「うるせーな。出来ると思ったんだよ！一応、得意属性だけなら多重起動は出来るんだからな」
「ウッソーマッジーヤッダー」
「・・・バカにしてんのは分かってっから、その棒読み口調は止めろ。それに、悠馬が出来るとは限らないだろうが」
「あ～・・・すまん、レオ。俺は２つのＣＡＤを同時に使用可能なんだわ。まぁ、出来るようになるまで結構時間がかかったけどさ」
「ほれ見なさい。悠馬は実技に関しては、深雪よりも評価が高かった

のよ」
　あぁ、それを聞くと入試のやらかしを嫌でも思い出してしまう。
　なんで、バタバタしていたとはいえ、筆記試験であんな大ポカをやらかしたんだろうな。
「その悠馬が時間を掛けないと出来ない事を貴方が出来ると本気で思ってたなら、もう身の程知らずを通り越して、自分の実力をしっかり把握していない只の愚か者よ」
「んだと！」
「ふ、２人とも、今は達也さんのお話を聞きましょう？ねっ？」
「・・・・・・」
「・・・フンッ」
　互いにそっぽを向くエリカとレオ。
　おろおろと視線を左右に振る美月に、達也は肩をすくめて見せた。
「俺としては、ここで止めてもいいんだが・・・続けて欲しいなら続けるぞ。２つのＣＡＤを同時に使用する際に発生するサイオンの干渉波をキャスト・ジャミングと同じように、魔法師を取り巻く事象のエイドスを含むイデアへ発信する。一方のＣＡＤで妨害するする魔法の起動式を展開し、もう一方のＣＡＤでそれとは逆方向の起動式を展開、その２つの起動式を魔法式へ変換せず起動式のまま複写増幅し、そのサイオン波を無系統魔法として放てば、各々のＣＡＤで展開した起動式が本来構築すべき２種類の魔法式と同種類の魔法式による魔法発動をある程度、妨害出来るんだ。これが、アンティナイトを使わないキャスト・ジャミングのタネだ」
　レオが小声で「マジかよ・・・」と呟いだ。抑揚の乏しい声は、呆然とした顔が表面的な物だけでない事をよく示していた。
　不意に、美月が咳き込んだ。グラスが空になっていたにも関わらずストローを吸い続けた結果、咽せてしまったようだ。苦しい咳の発作によって、ようやく意識上に感情が戻ってきたようで、表情が驚愕に染まっていく。
　エリカは眉間に皺を寄せて何事か考えている。険しい顔つきからするにあまり楽しい事ではないようだが、不快感を覚えているように

は見えなかった。
「・・・具体的にどうするかは全く分からねぇが、おおよその理屈は理解出来たぜ。だかよ、何でオフレコなんだ？特許を取ったら儲かりそうな技術だと思うんだがなぁ」
　何とか思考力を回復させたレオが、真っ先に、腑に落ちないという顔で達也にそう訊ねた。
　首を傾げるレオに向けられた達也の表情は、単なる苦笑いというには苦みが強いものだった。
「1つは、この技術はまぁ未完成なものだということ。相手は発動中の魔法が使えないだけ・・・しかも全く使えない訳じゃなくて、使い難くなるだけなのに、こっちは全く魔法が使えなくなるんだからな。これだけでも相当致命的なんだが、それ以上に、アンティナイトを使わずに魔法を妨害出来るという仕組みそのものが問題だ」
「・・・それの何処に問題があるんだよ」
　不審がと言うより、不満げに問うレオを、俺は厳しい口調で叱りつけた。
「レオ。国防や治安の分野では、魔法は今や無くてはならない物だ。そんな状況下で、高い魔法力やアンティナイトを必要としないお手軽な魔法無効化の技術が広まったり流出したりしてみろ。それだけで魔法師の社会基盤の揺るぎかねないんだぞ」
「悠馬の言う通りだと俺も考えている。世の中には、魔法を差別の元凶と決めつけて、魔法の排斥を運動している過激派も居るからな。アンティナイトは産出量が少ないから、現実的な脅威にならずに済んでいる面がある。対抗手段を見つけられるまで、あのキャスト・ジャミングもどきを公表する気にはなれないな」
　ようやく得心がいったのか、レオは何度も頷いている。何故か美月も、同じような顔でウンウンと頷いていた。
「凄いですね・・・そんな事まで考えているなんて」
　感嘆がため息となって、美月の口から吐き出された。
「俺なら、目先の名声に飛び付いちまうだろうなぁ」
　続けて、レオがため息を漏らすと深雪が柔らかで控えめな笑みをこ

ぼした。
「お兄様は少し考え過ぎだと思いますけどね？そもそも、相手が展開中の起動式を読み取る事も、ＣＡＤの干渉波を投射する事も、誰にでも出来る事ではありませんし。ですが、それでこそお兄様という事でしょうか」
「・・・それは暗に、俺が優柔不断なヘタレだと言っているのか？」
妹の指摘に、達也は心底、情け無さそうな表情をする・・・が、この表情はきっと、作ったものだろう。
「さぁ？エリカはどう思うかしら？」
深雪は素っ気ない態度でーーこれは、１００％演じたものだろうーー、エリカに球を投げる。
「さぁねぇ？あたしとしては、美月の意見を聞いてみたかったり」
エリカはわざとらしい口調で、美月に球を渡した。
「えぇっ？私はわ、その、えぇっと・・・」
「誰も否定してはくれないんだな・・・」
達也から恨めしそうな目を向けられて、深雪は朗らかな作り笑いで目を逸らし、エリカはメニューで顔を隠し、美月はオロオロと視線を彷徨わせた、が、確信犯の身でなんだが、助けは何処からも現れなかったのだった。

第１７話　お詫びを兼ねた七草真由美との週末デート

「なぁ、本当に行かなきゃいけないのか？」
「こればっかりは・・・ね」
「ハァ・・・こんな事になるなら、週末なんて概念が無くなりゃ良いのに」
と、世界中の人達をーー少なくとも、日本人の大半をーー敵に回しかねない物騒な発言をする俺。
入学式の日にＩＤカードを発行した直後に約束した通り、学校の無い今日は真由美と出かけていた。
別に、真由美と出掛ける事自体は何とも思わない。真由美に振り回される事も半ば諦めているしな。
だが・・・
「七草邸での食事の誘いは完全に予想外なんですけど」
「私もよ。悠馬くんと出かけるって言ったら、悠馬くんを連れて来てくれなんて・・・あの狸親父は何を考えてるだか」
真由美の言う狸親父とは、七草家の当主にして真由美の父親でもある七草弘一さんの事だ。
謀略好きな性格故に真由美からは陰で狸親父と呼ばれいるが、俺としてもそんなに関わりたいとは思わない人物なので、評価は余り高くない。
「まぁ、弘一さんの事は今は忘れて楽しみましょう」
「そうね。そうでもしても、やってられないわ」
傍から見たらデートに見えるかもしれないこの男女のグループは、最初から憂鬱なのだった。
◇◇◇
「まずは、ショッピングタワーだったか？」
「そうね。服とか見たいから」
「了解」

という訳で、数時間後の未来は考えないようにした俺達はショッピングタワーへと向かう事にした。
「そうだ。ついでに、悠馬くんの服も見てあげよっか？」
「良いよ。そんな事はしなくて。服ならあるし」
「そんなこと言わないで、お姉さんに任せなさい」
「・・・傍から見たら、お姉さんじゃなくて妹だろ」
「何か言った？」
「いえ、何も」
こっわ。真由美がそれはもう、素敵な笑顔で俺を見てきた。目が全く笑ってなかったけど。
「それじゃあ、服屋へレッツゴー」
「もう、好きにしてくれ・・・」
今日も真由美に振り回されるのが確定したようなので、なるようになれと主導権を握るのは諦めた。
真由美の服装はくるぶし丈の白いワンピース、俺のは白シャツと黒い合繊パンツに黒いジャケットを羽織っているといった感じだ。ちなみに、七草邸での食事の誘いを知ったのは今日なので、セミフォーマルっぽい服装なのは偶然である。
本当にカジュアルな服装にしなくて良かったと心底ホッとしている。
（にしても、何でいきなり呼び出す真似なんかしたんだ？）
そもそも、俺を食事会に誘って何をしようというんだ？
仮にも十師族の人間を招くのだ。本当に只、食事に誘いたかった・・・なんて事は無いだろう。必ず、何かしらの理由と目的がある筈だ。
だが、俺にはその理由と目的の見当が全くつかない。
（ホント、あの人は何を考えてんだ？）
ショッピングタワーに向かいながらそんな事を考えていたが、納得のいく推測は終ぞ思いつかなかったので、頭の隅にでも追いやって今この瞬間を楽しむ事にした。
「まずは、此処で見て行きましょ」

「ん、了解」
ショッピングタワーを散策する事、数分。
真由美に連れられて入ったのは大手服飾メーカーの店だった。
「真由美もこういう所に行くんだな」
「当然よ。私服が高級ブランドの服ばっかりだったら堅苦しいじゃない」
「まぁ、分からんでもない」
とはいえ、お嬢様に分類されるであろう真由美もこういう所に来るんだな。
「ほら、早く行きましょ」
と言って、真由美は俺の腕に自分の腕を絡ませる。
「ちょ、腕を絡ませなくて良いから、離れろ」
「どうして？」
「どうしてじゃねぇんだよ。当たってるんだよ」
「何が？」
小首を傾げて聞いてくる真由美。
（チクショウ。様になってるし、可愛いじゃねぇか）
「何がって・・・こんな所で言えるか」
当たっている主と物を認識しないように、俺は顔を背ける。
「かーわいい」
とある物を押し当てている主が俺のほっぺを指でツンツンしてくる。ショッピングタワーに入って数分足らずで弄ばれているのだが。
（『一方通行』が使えたら真由美を吹っ飛ばして、引き剥がせるのに）
だが、悲しいかな。此処はショッピングタワー。こんな所で魔法を使う訳には行かないし、自衛目的以外の魔法による対人攻撃は犯罪行為だ。
俺からすれば自衛目的だが、傍から見たらとても自衛目的には見えないだろう。
「さーて、悠馬くんには色んな私を見てもらわないと」
「だったら、まずはその絡めた腕を今すぐほどけ～！」
店内に俺の叫び声がこだまするのだった。

◇◇◇
「これとかどうかしら？」
大手服飾メーカーの店にある試着室では真由美のファッションショーが行われていた。
「あぁ、似合ってるぞ」
「もう、さっきからそればっかり」
「ファッションに疎い俺に何を期待してるんだ」
俺に似合ってるぞという言葉以外を期待しているのであれば、そんな幻想はさっさと捨てろと迷う事なく言うだろう。
「大体、真由美は可愛いから何着ても似合うだろ」
素材が良いとやっぱり何着ても似合うと思うんだ。ソースは今の俺。根拠は今、目の前に居る真由美。
「ふぇ、か、かわ・・・」
真由美が顔を真っ赤にして、モジモジしている。今更、何をそんなに顔を赤くしているのだろうか？可愛いなんて言われ慣れてるだろうに。
でも、面白そうだから少しだけ揶揄ってみるか。さっきは散々、おちょくられたので仕返しだ。
「可愛いよ。今まで会った女性の中で誰よりも」
真由美にだけ聞こえるように耳元で囁く。
お～・・・顔は茹でタコのように真っ赤だし、耳も顔ほどではないが赤い。
「な、なんか暑いわね」
「それはきっと真由美だけだ」
現に服でパタパタと仰いでいるのは真由美だけだ。
「う～ん・・・どの服も似合ってるんだが・・・俺は今の服装が試着した中で一番好きかな？」
今の真由美は白いTシャツにチェック柄のシャツを羽織っている。
「そ、そう？」
「他の人はどう思うか知らんが、少なくとも俺は今までの試着した服装の中で一番似合ってると思うよ」

「な、なら・・・これにしようかな」
真由美はそう言って、試着室の中に戻るとカーテンレールを動かす。
程なくして、試着室の中を遮っていたカーテンレールをどけると元の白いワンピース姿に戻っていた。
「ほ、ほら、次は悠馬くんの番よ」
「は?俺の番?」
「そうよ。次は悠馬くんの試着ファッションショーよ」
「いや、なんで?」
「私だけ恥ずかしい思いをされたのに、悠馬くんがのほほんとしてるなんて許せないのよ」
「試着になんも関係ねぇじゃねぇか!」
どんな理由で俺に試着ファッションショーさせるのかと思ったら、全く関係ない理由・・・っていうか、こんなの言いがかりに等しいだろ。
「何を言ってるの。試着ファッションショーには悠馬くんの女装姿も・・・」
「含めねぇよ!てか、サラッと俺を女装させるとかとんでもない事を口走ってんじゃねぇ!」
俺の女装姿とか誰得だよ。男のヤンデレ並に需要ないわ。
「そして、その写真を生徒会長という役職の力で高校中にばら撒いて・・・」
「ねぇ、真由美さん?今の貴方は小悪魔を通り越して、もはや悪魔なんですが・・・」
訂正、ウチの生徒会長の本性は小悪魔ではなく悪魔でした。異論反論していいのは、今この現場に居合わせた者だけです。
「とにかく、悠馬くんにはこれから、お姉さんプロデュースのファッションショーをしてもらいます。フフフ、あんな悠馬くんやこんな悠馬くんを見れるだけじゃなくて、悠馬くんの・・・」
真由美が何かブツブツ言っているので、俺はその場を離脱する事にした。

尚、真由美が俺が居ない事に気づいたのは、俺がこの場を離脱してから5分後の事だった。
◇◇◇
「全く、1人で先に行くなんて」
と、俺が居ない事に気づき、慌てて追いかけた真由美は憤慨していた。もっとも、その憤慨はプンプンという擬音が一番しっくりくるものにしか見えない物であったが。
「その1人で先に行った要因は貴方にあるのですが。その所はどういうお考えで？」
「何よ。あんな悠馬くんやこんな悠馬くんを見たかっただけなのに」
「それが原因だって言ってんだよ」
そして、それらを撮ってばら撒くときた。ほんと、夢ならばどれほど良かったでしょうって歌いたいぐらいだわ。
声に出して歌ったら変な人に思われるから、やらないけどさ。
「で、そろそろ昼飯にしないか？」
「話を逸らされていそうな気がするけど・・・まぁ、良いわ。私もお腹空いたし」
「じゃあ、早く行くぞ」
「行くって何処に？」
「ついて来れば分かる」
それだけ言って、俺はショッピングタワー内のとある店に向かう。
そこは、東京に来てから一度は行ったみたいと思っていた店だ。
「此処だ」
「此処？」
「そう。此処」
真由美を連れて向かったのは、ショッピングタワー内にあるイタリアンの店だった。
「いや、でも、悠馬くん」
「どうした？」
店に入ろうとした俺を真由美が呼ぶ。心なしか落ち込んだ声なのは気のせいだろうか？

「確かに、ここは最近おススメの店として有名だから来てみたかった所だけど、満席よ」
　あぁ、心なしか落ち込んだ声と感じたのは真由美も此処に来てみたかったからだったのか。
「その事なら心配ないよ」
「でも・・・」
「ほら、早く中に入るぞ」
「ちょっ・・・」
　俺は真由美の手を引いて、店内に入る。
「予約していた九島です」
「クドウ様ですね。２名様のご案内で宜しかったでしょうか？」
「はい」
「それではこちらへどうぞ」
　ウェイターに案内された席は、窓際の隅っこにある席だった。
「いつの間に予約なんてしたの？」
「此処に来る事が決まった時には予約してた」
　タワー内にある飲食店でも一番評判が良かった店だったしな。ギリギリで予約しようとして失敗したら元も子もないので、このショッピングタワーに行く事が確定した時には、予約の電話を入れていた。
　雑談しながらもメニュー表を眺めること数分。ウェイターを呼び、俺はペペロンチーノ、真由美はカルボナーラをそれぞれ注文した。
「お待たせしました。ペペロンチーノとカルボナーラです」
　程なくして、出来立てほやほやのカルボナーラとペペロンチーノが運ばれた。
「ごゆっくりどうぞ」
　そう言って、ウェイターがその場を離れる。
「熱々の内に食べましょう」
「そうだな。いただきます」
「いただきます」
　フォークを手に取り、俺達は注文したパスタを食べ始める。
「流石、おススメされるだけの事はあるな」

「そうね。こっちもかなり美味しいわ」
　すると、真由美は自分のフォークにパスタをクルクルと巻きつけ・・・
「はい、悠馬くん。あーん・・・」
「あーんって俺達、カップルじゃないんだぞ」
「長い付き合いだから良いじゃない。それに、昔はこうして食べさせ合っていたのよ」
「そんなの覚えてねぇし、仮にやってたとしてもいつの話だよ」
　真由美の出鱈目話で無いのなら、それは本当に小さい時の話だろう。
「ほら、早くしないと冷めるわよ」
「絶対に俺を弄んで楽しんでるだろ」
「そんな訳ないじゃない。服屋で置いてけぼりを食らった仕返しなんかじゃないわよ」
　それは暗に仕返しと言っているようなもんだぞ。
「まぁ、いいや。いただきます」
「こういう時はあーんって言いながらもらうのよ・・・まぁ、いいけど」
　真由美からカルボナーラを一口もらい、咀嚼する。
「こっちも美味いな」
「でしょう」
　パスタはペペロンチーノが一番好きだったが、ここのカルボナーラに限ってはペペロンチーノの上を行くかもしれない。
　が、やられっぱなしは性に合わない。なので・・・
「ほら、真由美。こっちも食ってみろよ」
　当然、真由美に仕返しする。あーんにはあーんだ。
「私は良いわよ。辛いの苦手だし」
「大丈夫大丈夫。そんなに辛くないから」
「本当に？」
「本当だ」
「・・・なら、いただこうかしら」
「そんじゃ・・・はい、あーん」

自分のフォークにペペロンチーノを巻き付けて、真由美にペペロンチーノを差し出す。
「あーん」
ご丁寧に真由美はあーんと言いながら口を開いたので、俺はペペロンチーノを真由美の口に入れた。
「・・・ん、辛っ!?」
真由美はペペロンチーノの辛さに悶えて、咄嗟にグラスに入った水を飲み干す。
「ちょっと、普通に辛いじゃない！」
「そうか?まぁ、ピリッとするかもしれんが・・・」
「これの何処がピリッとなのよ」
「お子様舌の真由美には辛かったかもしれないな」
「む～。私を子供扱いして・・・！」
真由美が俺に子供扱いされて憤慨する。
「はいはい。あざといあざとい」
憤慨しているが、ふくれっ面なせいで怖いとは思わなかった。真由美が美少女だから許せるけど、普通の女が同じ事をやったら、かなり痛い女と思われるだろうな。
尚、会計を真由美がトイレに行っている間に済ませた事で年上のメンツを保てず、さらに憤慨したのはまた別の話。

第１８話　憂鬱なる七草邸でのお食事会

昼食を済ませた俺達は、ショッピングタワーの近くにあったアミューズメント施設で遊んだ。

料金は年上としてのメンツを保ち保ちたかった真由美が払ったのだが、俺に色々とボロ負けしたので年上としてのメンツを保てたかは怪しい・・・いや、１００人中９０人ぐらいは保ててないって言うか。

それでも、真由美もなんだかんだ楽しそうだったし、俺も勝ち負け関係なく楽しかったので、結果オーライだ。

そして・・・

「お迎えに参りました。真由美お嬢様、悠馬様」

アミューズメント施設を出ると、黒塗りの高級車が目の前に停まっていた。

とうとう、七草邸へと向かう時間がやってきてしまったようだ。

「ありがとうございます。名倉さん」

「お久しぶりです、名倉さん。本日はよろしくお願いします」

車の前にいる初老の紳士は名倉三郎さん。執事とか爺やに見えるこの人は、七草家に仕える真由美のボディガードであり、「七倉」の『数字落ち（エクストラ）』だ。

数字落ちというのはエクストラナンバーズ、略して「エクストラ」とも呼ばれる、「数字」を剥奪された魔法師の一族の事であり、反逆罪や重大な任務の失敗、無能だからといった理由で剥奪される。いわば、魔法師が兵器であり実験体（サンプル）であった頃、「成功例」としてナンバーを与えられた魔法師が「成功例」に相応しい成果を上げられなかった為に捺された烙印だ。

今ではこれらの名称自体、公式に使用することは禁止されており、『数字落ち（エクストラ）』である事を理由に差別的取り扱いをする事は、魔法師のコミュニティにおいて重大な非難行為とされている。しかし、魔法科高校で二科生に対する差別があるように、それをもっと拡大、深刻化した形で『数字落ち（エクストラ）』に対する差別は隠然と魔法師のしゃかいに居座り続けている。

それこそ、俺達の世代であれば、自分の家系が『数字落ち(エクストラ)』である事を知らない者の方が多いだろう。理由は、親が『数字落ち(エクストラ)』である事を隠してしまうから。それ程までに、『数字落ち(エクストラ)』を「失敗作」や「欠陥品」と見做す偏見は、魔法師の無意識に刷り込まれているのだ。

ちなみに、名倉さんが「七倉」の『数字落ち(エクストラ)』である事を俺が知っているのは、小さい頃に「おじちゃん(名倉さんの事)は七倉の人だったの?」と聞いてしまったからだ。そん時は5歳ぐらいだったからか、そこまで怒られるような事は無かったが、今思うととんでもないことをやってんな、当時の俺。

「さ、悠馬くん。行くわよ」

「あぁ」

黒塗りの高級車に俺達が乗り込むと、名倉さんも運転席に座り、黒塗りの高級車を運転し始めた。

「名倉さんと最後に会ったのは、去年の真由美の誕生日パーティーですね」

「そうですね。それにしても、また背が伸びましたか?」

「その話を年上なのに俺より頭一つ分小さい人が隣に居るのを知っている上で聞いてくるのは、趣味が悪いと思いますよ」

「悠馬くん。それは、ひょっとして私の事を言ってるのかな?ていうか、絶対に私の事だよね」

ぎゃあぎゃあと真由美が何か言っているが、聞こえないフリをする。

うん。夕焼けの街並みが綺麗だ。

「香澄お嬢様と泉美お嬢様も悠馬様が来るのは楽しみにしていましたよ」

「香澄と泉美も最後に会ったのは、名倉さんと同じく去年の真由美の誕生日パーティーですからね」

香澄と泉というのは、俺の1個下である真由美の双子の妹達の事だ。

出会った当初は何かと大変だったが、今では悠兄ぃ(そう呼ぶのは、双子の姉妹の姉の方である香澄)、悠馬お兄さま(そう呼ぶのは、双子

の姉妹の妹の方である泉美）と読んで慕ってくれる可愛い妹分だ。
「ねぇ、悠馬くん。私、これでも身長の事を気にしてるのよ。そんな人の前で身長の話をするのはどうかと思うわ」
「分かった分かった。七草真由美名義でセノ○ックでも郵送してやるから機嫌直せ」
「全然反省する気が無い上に私名義で何て物を郵送しようとしてるのよ」
「一応、香澄と泉美の分も合わせて、３袋分にしておくか・・・」
「人の話を聞きなさい」
ムギュと真由美に顔をつねられる。俺の顔に触れられてるのは、『一方通行』の反射をオフにしてるからだが、別につねられた所で大して痛くないので問題ない。
「冗談だ冗談。七草真由美名義で買う訳ないだろ」
「九島悠馬名義でもダメよ」
「分かってる」
「だったら、今すぐその某通販サイトのページを閉じなさい」
「誤ってカートに入れても困るからすぐに閉じる」
Ａｍ○ｚｏｎのページを閉じて、俺は携帯端末をポケットの中に仕舞う。
そして、そうこうしている内に七草邸に到着した。いや、到着してしまったというのが正しいかもしれない。
名倉さんの後ろを俺と真由美がついて行き、七草邸の玄関前に到着した。相変わらず、いつ見てもデカい邸宅である。まぁ、実家も負けず劣らずデカいけど。
「いらっしゃい、悠兄ぃ！」
「お待ちしておりました、悠馬お兄さま！」
と、物思いに耽っている内に、名倉さんが七草邸の玄関を開けると、癖の無いショートカットのボーイッシュな少女と肩に掛かるストレートボブのフェミニンな少女が出迎えくれた。ちなみに、前者が香澄で後者が泉美だ。
「久しぶり。４ヶ月ぶりだな」

「お姉さまが言っていたましたが、悠馬お兄さまが一高に通っているのは本当ですか？」
「あぁ。だから、香澄と泉美が来年、一高に入ったら俺の後輩になるな」
「やった！悠兄ぃと一緒の学校へ通える！」
まるで、一高への入学が決定事項のようだ。まぁ、余程の事が無い限り、落ちたりする事は無いだろうけど。
「それで、弘一さんは何処に・・・」
弘一さんの所へ挨拶に行こうと香澄達に弘一さんの居場所を聞こうとしたが、それは最後まで続かなかった。
「いらっしゃい、悠馬君。良く来てくれたね」
七草邸の奥の方から色付き眼鏡をかけた男性がやって来た。
彼が真由美達の父にして七草家の当主である七草弘一さんだ。弘一さんを見た瞬間、俺に緊張の糸が張り詰める。
「今回はお招きいただきありがとうございます」
俺は弘一さんに軽く頭を下げる。
「名倉、彼を客間まで案内してあげなさい」
「かしこまりました」
弘一さんは再び、七草邸の奥へと歩いて行き、俺達は名倉さんに案内されて客間へと向かう。
「どうして、悠兄ぃは二高じゃなくて一高に通う事にしたの？」
確かに、実家は奈良なので普通なら一番近い二高に通うだろう。
「そういえば、私も聞いた事無かったわね。どうして、ウチに来たの？」
「向こうだと、色んな肩書きのせいで近寄ってくる奴の大半が色眼鏡で俺の事を見てくるだよ」
「悠馬くんは十師族な上にあの老師のお孫さんだものね」
だが、多くの魔法師から老師と敬われている俺の爺ちゃんが、実際は只の孫を溺愛するお爺ちゃんと知る者は数少ない。
それはもう、普段見せる顔とギャップがあり過ぎて二重人格を疑う程に。

「こっちだったら、克人さんや真由美が居るし来年には香澄と泉美が来るしね」
　後は、司波兄妹と同じ学校生活を送りたかったというのもある。達也達は一高に通うだろうと思っていたし、とある情報筋から達也と深雪が一高に受験する事を教えてもらったしな。
「それで今はどう？」
「少なくとも、小・中よりかは充実した学校生活を送れてるよ。俺を九島家の息子や爺ちゃんの孫なんかの色眼鏡で見てこない奴等と知り合う事が出来たしね。一高に入学して良かったよ」
　これは紛れもなく、俺の本心だ。二高だったら、こんな充実した学校生活を送れただろうか。
　後は、変な奴等に絡まれたり真由美に振り回されたりしなければ万々歳である。
「悠馬お兄さま。後で、勉強を教えてくださいませんか？」
「悠兄ぃ、ボクにも」
「分かった。魔法理論でも一般科目でも俺の分かる範囲だったら、時間が許す限り、２人に教えてやる」
「ありがとう、悠兄ぃ！」
「ありがとうございます、悠馬お兄さま！」
　達也じゃないが、可愛い妹分の要望は受けてやりたい。ただし・・・
「じゃあ、私も悠馬くんに・・・」
「俺が高一だって知っていてるにも関わらず、勉強を教えてもらうのはどうかと思うぞ」
　２つ上の幼馴染は別である。
「それに、お姉さんぶりたいなら俺に教わるんじゃなくて俺に教える立場に回らないと駄目だろ」
「そんなの無理じゃない。だって、悠馬くんは一高の入試で答えがズレてなかったら全教科、満点だったのよ」
「悠兄ぃ、主席じゃなかったんだ・・・」
　と、俺が主席入学じゃないことに驚く香澄。
「悠馬お兄さま、何をやってるんですか」

と、呆れた目で俺を見る泉美。
「仕方ないだろ。色々あって、碌に寝れずに筆記試験を受ける羽目になったんだから。それに、実技に関しては最高評価だったみたいだし」
「逆に、悠馬お兄様程の実力者が最高評価でなかったら、実技試験の意味を為してないですよ」
俺からすれば実技試験の試験内容なんて欠陥仕様もいいとこだ。
だって、あの達也が実技試験のせいで二科生だぞ。実戦だったら最強な達也が二科生だぞ。エリカだって一科生の森崎のＣＡＤを弾き飛ばしたーーこれに対して、森崎は反応出来なかったーーが、彼女も二科生だ。
魔法力が劣るからと言って実力がないとは限らないが、アイツらを見てると何の為の実技試験なんだと思わずにはいられない。
「だから、真由美。年上としてのメンツを捨てても良いなら、勉強は教えるけど、どっちが良い？年上としてのメンツを守る為に俺から勉強を教わらないか、年上としてのメンツを捨ててまで俺から勉強を教わるか」
だが、真由美がどちらの選択を選ぶかなんて容易に想像出来る。
「むぅ。悠馬くんの意地悪。良いわよ、お姉さんは1人で勉強するわ」
やっぱり、見栄張って年上のメンツを守ったか。
「ただ！」
「うん？ただ？」
何故だろう。凄く嫌な予感がする。
「悠馬くんは知らないだろうけど、生徒会役員経験者は国立魔法大学への推薦を辞退するのが不文律となっているのよね」
おいおい、まさかとは思うが・・・
「正直、受験勉強には年上のメンツなんて保ってる暇ないからその時は勉強よろしくね」
「いや、真由美は一高の主席入学だから・・・」
俺の力なんて借りなくても大丈夫だろと言おうとしたが・・・
「悠馬くん、この世の中に絶対なんてものは絶対に無いのよ」

それ言われたら、俺も黙るしかなかった。
「あ、じゃあ、ボクも悠兄ぃに家庭教師を」
「私もお願いしてよろしいでしょうか？」
ハハハ、家庭教師って事でお給料が貰えないか後で真剣に弘一さんに聞いてみようと決心した俺であった。
◇◇◇
午後7時。七草家の客間で俺達は夕食を口にしていた。勿論、弘一さんもこの場に居る。
「悠馬くん。聞くところによると模擬戦で十文字君を倒したようだね。なんでも、君の固有魔法を使ったとか」
「えぇ。克人さん相手には出し惜しみ出来ないので、固有魔法を使ってどうにか勝つ事が出来ました」
まぁ、『未現物質』を使ってないから嘘なんだが。とはいえ、俺が人前で使用したりしない限り、向こうはそれを知る術が無いのだから問題ないだろう。
「凄い・・・凄いよ。悠兄ぃ！」
「流石です、悠馬お兄さま！」
「失礼を承知で、その固有魔法について聞いても良いかい？」
「構いませんよ」
聞かれたくなかったら、あの場で『一方通行』について話したりしていない。
「俺の固有魔法は、一方通行と書いてアクセラレータと呼んでいる物です。で、どういう魔法なのかと言いますと、効果範囲に触れたあらゆるベクトルを観測・操作するものです」
「それは、運動量だけじゃないのかい？」
「えぇ。ベクトルがある物なら何であれ、観測・操作可能です。運動量は勿論、熱量でも電気量でもベクトルがあるのなら俺の設定した効果範囲に触れた瞬間、そのベクトルを観測し、意のままに操れます」
「・・・それは魔法もかい？」
「勿論、ベクトルがあるのなら魔法だろうと観測・操作可能です」
それを聞いて、弘一さんは押し黙る。

一方通行のチートっぷりに気づいただろうか。
「悠兄ぃ、それって私達にも出来るの？」
「無理」
それだったら、何の為の固有魔法だって言いたくなるわ。
「悠兄ぃ、そんなきっぱり即答しなくても・・・」
「この魔法は、観測したベクトルを頭の中で計算した後に、好きな方向に操作するのを魔法演算領域で変数として処理してるんだ。他にも、変数として処理しなきゃいけない項目もあるのに、それらを含めて全て一瞬で済ませないとこの固有魔法は意味を為さないぞ」
「つまり、悠馬お兄さまの固有魔法である『一方通行』を再現するには、高い演算能力と処理速度が無ければ成立しないという事ですか？」
「そうだな。演算能力は最低でもスパコン並みじゃないと、この固有魔法は十分にその力を発揮出来ないだろうな」
後は、観測したベクトルをどういう物なのか理解する頭脳も必要になってくるのだろうか？確か、原作では魔術の存在なんて知らなかった頃の一方通行は、エイワスの攻撃を反射出来ずに身体を貫かれている。
となると、自分の知らないｏｒ理解出来ないベクトルは操作不可の可能性は高いだろう。一応その点を考慮して、小さい頃から猛勉強してきたから、観測したベクトルが理解出来ないなんてケースは今のところ無いが、これがもしも本当ならば『一方通行』が難度の高さにより拍車が掛かっている。
「話せる事は話せましたが、これで満足しましたか？」
「あぁ。ありがとう」
その後も、真由美立場と談笑を交えながら夕食会は続いていった。
ちなみに、真由美達に家庭教師になってくれとの旨を伝えたら、七草家当主ではなく、娘達の父親として給料を支払うと言ってくれた。
これに対して、真由美達は大いに喜び、普段なら狸親父と呼んでいる真由美も弘一さんの事を見直したとか見直していないとか。
という訳で、早速家庭教師として３人に勉強を教える羽目になる俺であった。

◇◇◇

夕食を終えた後、私は自身の書斎で彼の言っていた事を思い返していた。

彼の固有魔法である『一方通行』。それは、ありとあらゆるベクトルを観測し、操作するという常軌を逸した規格外な魔法であった。

これが意味する事は、彼には魔法を含めたありとあらゆる攻撃が通用しないという事である。

「九島家にこんな隠し球があったとは」

彼の存在は、十師族のパワーバランスを崩壊しかねない。

幸い、娘達は彼と仲が良い。特に、真由美は彼に好意を抱いているだろう。

「彼を引き込めば七草はさらに力を増し、四葉をも超える力を手にする事が出来る」

それは、”彼女”・・・四葉真夜を見返す事が出来るという訳だ。

「そういえば、彼は何処となく真夜と似ているような・・・いや、気のせいか」

もし、仮に似ていたとしても偶然に過ぎない。彼と真夜にそんな繋がりなど無いのだから・・・

第19話　Targeted　Tatsuya　Shiba&Yuma　Kudo

新入部員勧誘週間は何日経とうと勧誘の激しさが変わる事はない。
それは、週末を挟んでいたとしてもだ。
「はぁ、今日も外で巡回の応援かよ」
またもや巡回の応援に加え、色々な仕事を押し付けられた。
ただ、前回と違う所があるとすれば単独行動ではないところだろうか。
「お前は、いつから生徒会から風紀委員に転職したんだ？」
「した記憶はねぇし、大前提として委員会は職業じゃないだろうが」
俺と達也は何故かタッグを組んで、巡回していた。まさに、風紀委員と生徒会役員の異色のコンビである。
「ったく、人が多過ぎて移動すんのも大変だ」
「それについては同感だ。生徒の安全面とかどうなっているんだ？」
「九校戦の成績を上げる為に、多少のルール破りは黙認するような所だ。大事にでもならん限り、生徒の安全なんて気にしないだろ」
と、この学校の先生が聞いたら憤慨しそうな発言をさらりと吐く俺。
「それもそうか」
と、この学校の先生が聞いたら憤慨しそうな発言に同意する達也。
風紀委員と生徒会役員の異色なコンビではなく、この学校に喧嘩を売っているコンビに訂正した方が良いかもしれない。
「と、達也。どうやら、早速仕事のようだ」
「そのようだな」
制服を掴み合って、喧嘩している2人の生徒を見つけた。
「俺が掴み合っている手を引き剥がすから、その隙に2人の距離を引き離してくれ」
「了解」
達也が手早く作戦を立てると、俺達は早速その作戦通りに行動を開

始した。
「そこの2人！掴んでいる手を離してください」
と、達也が言うが案の定、2人は掴んでいる手を離そうとしないので、達也は2人に駆け寄って、腕を振り上げて強引に掴んでいる手を離させる。
その間に、俺は2人の生徒を引き離そうとした時、後ろから達也の頭めがけて空気弾（エア・ブリット）が飛んで来るのに気づいた。
達也なら俺が何もしなくても躱せるだろううが、達也が躱した事によって他の生徒に被弾するかもしれないので、俺は達也の後頭部を遮るように腕を伸ばす。
『一方通行』の反射はオンにしているので、空気弾（エア・ブリット）は俺の腕に触れるか否かの所で反射され、映像を巻き戻すかのように同じ軌道で放たれた場所へと吹っ飛んでいった。
「達也。すまないが、この場は・・・」
任せたぞと言って、俺は空気弾（エア・ブリット）を使った奴を追いかけようとしたが、それは目の前に居る2人の生徒によって出来なかった。
「ちょっと待てよ。まずは、こっちだろ」
「それは此処に居る風紀委員がやりますから、俺は先程の魔法の使用者を追わないと・・・」
「そんな事より、俺の話を聞けよ。生徒会役員なんだろ。白黒つけろよ」
こんな事を言われたら、無視して追いかける訳にもいかない。チラッと達也の方を見ると、達也も俺と同じように足止めを食らっていた。
結局、俺と達也の2人で仲裁する羽目になり、それすらも無駄に時間が掛かったので、空気弾（エア・ブリット）を使った奴を取り押さえる事など不可能となってしまった。
「ありがとう、悠馬。お前が空気弾（エア・ブリット）を反射してくれたおかげで大事に至らなかった」
「それは別に良いんだが・・・あの空気弾（エア・ブリット）の狙いは間違いなくお前を狙って放たれた物だった。お前、何をしたら魔法で狙われるような事

になるんだ？」
「確証は無いが・・・初日のアレが原因だろうな」
　達也の言うアレとは、剣術部の部員を魔法の不適正使用で逮捕した事だろう。
　達也が逮捕もとい倒したのは、剣術部の次期エースである桐原先輩。２年生ではトップクラスの実力者と目されている人物が１年生に倒されたとなれば、話題にもなるだろう。それが、二科生ともなれば尚更だ。
「なるほどな。逆恨みにすらなってない理不尽な怒りを向けられたか」
　１年の二科生が、２年の中ではトップクラスの実力を持つ生徒が倒した。それが、中途半端な魔法選民主義に染まった者を驚愕させ、怒り狂わせた。
「新入部員勧誘週間が終わるまでは、続きそうだな」
「むしろ、それ以降も続くようだったら、何かしらの対策を講じなければいけないな」
　というか、この事を深雪が知ったら、どうなる事やら。
　少なくとも、周囲が凍りつくーー文字通りーーのは間違いないだろう。想像しただけで、寒気がしてきた。
「とりあえず、巡回を再開するか」
「そうだな」
　こうして、俺達は巡回を再開するのだった。
◇◇◇
「うわっ、今日も凄い事になってる」
「そうだね」
　外を見てみると、初日と同じように凄い事になっていた。
「何処から帰ろう・・・」
「何処を通れば帰れるか、だよね」
　どうやって帰ろうかと、思案していた時だった。
「ねぇ、貴方達も今帰り？」
　突然、後ろから声を掛けられた。

私は、突然の事にびっくりしながらも後ろを振り向く。そこには、私や雫と同じ一科生の赤毛の女子生徒が居た。
「あ、驚かせちゃってごめんね。私、明智英美。日英のクォーターで、正式には、アメリア＝英美＝明智＝ゴールディ。エィミィって呼んでね」
あ、だから、髪色が赤いんだ。
「北山雫。よろしく」
「よろしく」
2人は、ぎゅっと握手する。
「光井ほのかです。・・・よろしくね、エィミィ」
「うん、よろしくっ。ほのか！」
私も手を差し出すと、エィミィは手を絡め合わせて、ぶんぶんと振る。
クォーターなだけあって、凄いフレンドリーな人だなぁ。
「それで、2人はどうしたの？」
手を離したエィミィは、私達にそう聞いてきた。
「どうやって、帰ろうかなって」
「あぁ、なるほど～・・・これは苦労しそうだね」
外の惨状を見たエィミィもこれには、苦笑いだ。
「雫もほのかも隠密系の術式は持ってないの？」
「オンミツ系・・・？何それ」
「陰陽道系と密教系？」
って事は、古式魔法の事なのかな？
「やだなぁ。隠密は隠密だよ」
だけど、エィミィからすれば、古式魔法の事じゃないみたい。
「公儀隠密の『隠密』。松平伊豆守とか紀州御庭番とか知らない？」
「あ・・・あぁ、古式魔法の『忍術』の事？」
「忍術だけじゃないんだなぁ」
どうやら、エィミィの言うオンミツは忍術の事だけじゃないみたい。
「とにかく、意識を逸らしたり、姿を隠したりする術式だよ」

「私は使えないけど、ほのかは得意。でも、魔法を勝手に使うのはルール違反」
「今さらだよ。いつもなら守らなきゃだけど、今は魔法が飛び交ってるじゃん。校内限定だけど」
　それは・・・そうだけど・・・
「魔法を使って攻撃しようって訳じゃないんだし、迷惑勧誘を避ける為に魔法を活用するくらい、大目に見てもらえるって」
「う～ん・・・でも、この前ちょっと・・・」
「なるほど、一理ある」
「えっ!?」
　雫まで、そんな事を言うの!?
「大丈夫、ほのか。今回は攻撃じゃないから」
　雫がグッと親指を立てる。
「あの時だって、攻撃じゃなかったよ!」
　とはいえ、帰るには魔法を使わないと無理そうだし・・・
「分かったよ、雫。・・・エィミィも一緒に帰る?」
　少しの間、逡巡した私は魔法の行使を決心した。
「うん!ありがとう!」
「皆で行った方が心強い」
　そういう訳で、私は魔法を使い、私や雫やエィミィの姿が見えないようにしながら、校門へと向かっていた。
「これだけで結構、気付かれないものなんだね」
「映ってるのが背中と植木だから」
「なるほど～あっちから見ると、植木の奥で作業している風に見える訳か」
　と、感心するようにエィミィが言う。
「うん、バッチリだよ、ほのか」
「だといいんだけど・・・」
　魔法を使っていても、私達の姿が見えていないかと不安になる。
　それに、音を誤魔化す事は出来ないから、足音を立てないように慎重に歩いてるせいで、ひどくもどかしい。

だけど、ひどくもどかしさを感じていた私は、とある光景を目にして思わず、足を止めてしまった。
「あっ」
私が急に止まったせいで、エイミィの頭が私のぶつかったけど、その事を気にも止めずに私は、目の前の光景をじっと眺めていた。
「どうしたの？」
２人は、私の後ろから覗き込むように私の視線の先の光景を見る。
「そこの２人！掴んでいる手を離してください」
私の視線の先には、達也さんが制服を掴み合っている一科生を仲裁しようとしていた。
近くには、悠馬さんも居る。たぶん、巡回の応援で達也さんと一緒に居るんだろう。
「風紀委員？」
「深雪のお兄さんに悠馬さんだ」
達也さんは制服を掴み合ってる２人の生徒に駆け寄ると腕を振り上げて、掴み合っている手を外させる。
その後ろから悠馬さんが片方の男子生徒に駆け寄るが・・・
「あっ」
達也さんの背後から空気弾（エア・ブリット）が飛んで来たのに気づいて、思わず誰かが声を上げた。
このままだと達也さんに当たる！と思った次の瞬間・・・
「えっ？」
「跳ね返った・・・」
悠馬さんが達也さんの頭の後ろに手を伸ばすと、空気弾（エア・ブリット）が悠馬さんの腕に触れるか否かの所で映像を巻き戻すかのように、空気弾（エア・ブリット）が元の軌道で戻っていった。
「って、雫。今の・・・！」
「わざと、だね」
「えっ、わざとって・・・あの風紀委員の男の子がわざと狙われたってこと？」
「うん」

しかも、達也さんと悠馬さんは、前の２人に邪魔されて、空気弾（エア・ブリット）の術者を追いかけられない。
まさか、全員グルなの？
「今のは偶然なんかじゃない。どう見てもわざとだった」
「私にもそう見えた」
雫もコクリと頷いて言う。
「魔法を跳ね返した彼、風紀委員じゃないけど何者なの？」
「九島悠馬。老師のお孫さんで生徒会役員」
「えぇっ!?あの老師の!?だったら、魔法を跳ね返したりするのも納得かも・・・」
悠馬さんの凄さは、老師の孫というだけで納得出来てしまう。
しかも、実技は深雪を抑えて悠馬さんがトップ。筆記試験で足を引っ張らなかったら今年の総代は深雪じゃなくて悠馬さんだったらしい。
「それで、風紀委員の方の彼はニ科生なんだ」
エィミィが視線をずらした先にある達也さんの制服を見て、そう口にした。
なに・・・エィミィもニ科生のくせにとか言うつもりなんじゃ・・・
「でも、キリッとしてて、なんだかイイ感じ。知り合い？」
あれ？てっきり、達也さんを貶すと思ったのに・・・
「う、うん。新入生総代の深雪のお兄さん」
「えっ!?あの究極美少女の!?それなら、カッコいいのも納得だよ！」
どうやら、達也さんの容姿に関しては、深雪のお兄さんである事で得心が行ったみたい。
「２年生？３年生？」
「１年生」
「あれで同学年。なら、只者じゃないね」
確かに、達也さんは私達の同い年の筈なのに年不相応な程に落ち着いているっていうか大人びている。初対面の時に制服を着てなかったら、社会人と間違えてしまっても何らおかしくはないと思う。
「もしかしたら、司波さんのお兄さんが狙われたのは、やっかみかも」

「えっ？何が？」
「かっこいいお兄さんを僻んだんだよ。１年生の癖に生意気だ。やっちまえって。こういうのはありがちだし」
「嫉妬で闇討ちなんて卑怯過ぎるよ！許せない!!」
そんな理由で達也さんに魔法を放とうとしたなんて信じられない。
「理解出来ない」
雫も私と同じ考え方で、達也さんが狙われた理由が理解出来ないみたい。
「そうだ！こんな理不尽、許してはならんぞ!!」
「でも、具体的にはどうする？ほのか」
「うーん・・・悠馬さんが生徒会役員だから、今回の件は生徒会に知られるよね」
「悠馬さんが今回の件を生徒会に話したらね」
私と雫はふと、今回の件を生徒会が知った時の事を想像した。
そして・・・
「今回の件、深雪が知ったら・・・」
「うん・・・」
私と雫は、どちらも生徒会が寒波に見舞われる場面が脳内に展開した。
そして、どちらも行き着く先が空気弾（エア・ブリット）の術者が氷漬けにされる未来だった。
「深雪が今回の知ったら、一体、何人の犠牲者が出る事やら・・・」
「えっ!?司波さんって、そんな恐ろしい存在なの!?」
だって、ヴィードって単語を発するだけで教室が氷河期になるくらいだし・・・
「でもさ、さっきの人が今回の件を生徒会に知らせたとしても、証拠がある訳じゃないから有耶無耶で終わるかもしれないよ」
「そ、そうかも」
結局、悠馬さんと達也さんは空気弾（エア・ブリット）の術者を追う事が出来なかったから、証拠も何も無い。あるのは、達也さんが魔法で襲われそうになったという事実だけ。

これじゃあ、悠馬さんが生徒会に知らせたとしてもエイミィの言う通り、有耶無耶になるかもしれない。
「だからさ、私達で証拠を押さえない？」
エイミィがにやりと笑って言う。
「私達って・・・私達!?」
「そう！」
エイミィが私の方に指を差す。
「ほのかと雫と私で少女探偵団、始動よ！」
「えーっ！何それ!?」
「だって、こんなのほっとけないじゃん？」
「それは・・・放っておかないけど・・・」
「でしょっ!?雫は？」
「この問題を放っておけない事に関しては、同感だけど・・・」
「だけど？」
「後ろ」
「「ん？」」
そう言われて、私とエイミィは後ろに振り向く。
「・・・今は逃げるべきだと思う」
これには、私とエイミィも同意するしかなかった。
何故なら、話に夢中で私が魔法を解除してしまったから。魔法によって、私達の姿が見えないようにしていたのにそれを解除してしまったという事は・・・
「クラウド・ボール部です！」
「射撃やってみない？スカッとするよ！」
「ハイポスト・バスケって知ってる!?」
自分達の部に私達を入部させようと勧誘の嵐が襲い掛かってくる事を意味していた。
「ま、間に合ってま～す！」
こうして、少女探偵団を結成？して最初に行った事は、校門まで全力疾走になったのだった。
◇◇◇

「全く、お前と居ると本当に退屈しないわ。悪い意味で」
やっぱり、達也はトラブルの神様に愛されてるわ。マジで。
「俺だって好きでこんな事になってる訳じゃないからな」
「だからこそ、タチが悪いんだよな」
別に達也がトラブルを引き起こしている訳じゃない。ただ、達也の行く先々でトラブルに見舞われるのだ。
空気弾（エア・ブリット）事件以降も、達也は魔法で何度か狙われた。その度に、『一方通行』で反射して自爆させていく。お陰で、俺達は検挙数がぶっちぎりでトップとなった。全くもって、嬉しくない。
「うん。達也、もう家に引き篭もっちまえよ。ついでに、家も要塞化すれば、お前がトラブルに見舞われる事は無い。つまり、俺もトラブルに巻き込まれる事は無い。ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ?」
「何が、ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ?だ。何の為に俺が此処に通ってると思ってる」
まぁ、そうなんだよな。
「達也の此処に通ってる理由の片割れは深雪も引き篭もりにしちまえば、解決するんだが・・・もう片方がな～・・・」
「俺の妹を引き篭もりにしようとするな。闇討ちで消し飛ばすぞ」
「それは困る。となると、達也に厄祓いでもさせるしかないか?」
もはや、達也のトラブルに巻き込まれる体質を改善するには、神頼みしか思いつかなかった。
「これからも、こんな事が続くようなら深雪とお前も連れて、厄祓いに行くか」
「何で俺もなんだよ。深雪と2人で行けよ」
「俺への嫌がらせだけなら検挙数が常軌を逸した数にはならないんだが?」
そう。検挙数がぶっちぎりでトップになったもう一つの要因は、別に達也の嫌がらせ関係なく、普通に違反行為をしている人達に数多く遭遇したからだ。
「それが俺のせいだって言いたいのか。このシスコン野郎」
「少なくとも、俺の肩書きは関係ない。それと、俺は兄として妹を思っ

ているだけであって、シスコンと呼ばれる筋合いは無い」
「それをシスコンって言うんだよ！」
コイツ、シスコンやブラコンを深雪で基準にしてるんじゃないだろうな。あそこまで重度なのは、深雪しか居ないってのに。
でも、こうして軽口を叩き合わないとお互い、やってられないので、これが冗談だと思う事にしよう。達也は俺に対しては、割と冗談を言う奴だし。
とはいえ、今日の巡回はもう終了したので、今から生徒会室に帰還。達也も風紀委員の活動報告を提出する為に生徒会室に向かっていた。
「で、どっちがインターホンを鳴らす？」
「何故、そんな事をわざわざ聞くんだ。誰が押そうと構わんだろ」
「いや、２人同時に押して、ロマンスの神様が降臨したら大変じゃん？」
「俺とお前の間にロマンスの神が降臨する事は天地がひっくり返ってもあり得ない。それと、ネタが古いボケは辞めろ」
確かに、ネタは古いが有名な曲だろ？しかも、何故かは知らないが、真由美の携帯端末にこの曲あるし。
結局、インターホンは俺が近かったので、俺が押す事にした。
「どうぞ」
真由美の入室を促す声と共にロックが外れた。
「ただいま、戻りました」
「失礼します」
「悠馬くん、お疲れ様」
「お疲れ様です！お兄様！」
俺と達也が生徒会室に入ると、真由美が俺、深雪が達也に労いの言葉を掛けてくれた。
「悠馬くん、聞いたわよ。達也くんと並んで検挙数Ｎｏ．１だって。お姉さんも鼻が高いわ」
「そう言われても、ちっとも嬉しくない。むしろ、早く帰って家で横になりたい」
賞賛の言葉を掛けられても湧き上がってくるのは疲労だけだった。

正確には、嬉しいとは思うものの重度の疲労がそれを掻き消していた。
てか、疲労と共に無性に眠気が襲いかかってきた。
「あぁ、生徒会室にソファがあれば良いのに・・・」
此処にソファがあったら迷わず、ダイブしているだろう。そんでもって、最終下校時間ギリギリまで寝る。
「しょうがないわね。ほら、お姉さんの肩を枕にして寝たら」
「やだ。真由美の肩枕は首が痛くなる」
肩枕は背の高い人が背の低い人の肩を枕にして寝ようとすると起きた時に凄く肩が痛くなるからだ。
しかも、俺と真由美の身長の差は頭一つ分だ。果たして、首が痛くなるだけで済むのだろうか。
「何よ。お姉さんのせっかくの好意を無駄にして」
ムキーと真由美が憤慨する。
「疲労回復が目的なのに首が痛くなったら本末転倒だろうが」
「それを言われると何も否定出来ない」
否定したくても否定出来ない真由美は、ぐぬぬ顔だ。
「だったら、名倉さんに頼んで悠馬くんの家まで車で送って行くわ。それと、肩枕が嫌なら膝枕よ」
「マジ?やった～社畜並みに働いた甲斐があって良かった～」
真由美の肩枕は首が痛くなるだけだが、膝枕は極上の一言だ。
それだけで、疲労が消し飛ぶと言っても過言ではないくらいに。真由美は膝枕は何度か経験しているが、その度に思う。真由美の膝枕よりも良い枕は世界中、何処を探したって見つからないだろうと。
最後に気分が良くなった俺は達也の方を見ていると、深雪の顔の横に手を当てて、労いの言葉を掛けていた。深雪の幸せそうな表情も相まって、本当に絵になる。この2人の写真集があったら、売り切れが続出しそうだ。なんなら、深雪が保存用・観賞用・実用用で最低3冊は買いそうだ。
「市原先輩。本日の風紀委員会の活動報告です」
「お疲れ様です」

風紀委員会の活動報告を市原先輩に提出する達也。傍から見たら大きいメモ帳にしか見えないケースを開き、中に入っているメモリだけを受け取った市原先輩は、メモ帳型ケースを達也に返却した。
「しかし、何故、わざわざ、物理メディアを受け渡しするのですか？」
メモ帳型ケースを受け取った達也は市原先輩に疑問に投げかける。
まぁ、達也が言いたい事は分からんでもない。俺の前世でならともかく、科学がかなり発達したこの時代においては、原始的とまでは言わないが随分と古臭い手法と言わざるを得ない。
「正直に言えば、余り意味はありません。単なる習慣です」
「習慣・・・そうですか」
「あら達也くん。不合理だって言わないの？」
「不合理だとは思います。ですが、許容出来ない程ではありません」
「達也くんって意外に融通が効くのね」
うん？なんか深雪の様子が可笑しいような・・・
「深雪、どうした？」
どうやら、達也もそれを感じ取ったようだ。
「・・・お兄様、正直にお答えください」
「おいおい。穏やかじゃないな」
「お兄様・・・魔法による攻撃を受けられましたね？」
ちょ、深雪。なんでお前、その事を知ったんだ。
「・・・受けてはいない」
「攻撃を向けられた事は、否定されないのですね」
「事実、その通りだからな」
あぁ、達也が魔法による攻撃を向けられた事がバレちまった。
「何故、分かったんだ？」
うん。俺もそれは気になる。
「妹の直感です」
「なんか深雪が言うと、そう思わせる説得力があるな」
普通だったら、とてもじゃないけど信じられない・・・が、深雪の異常なまでの達也に対する思いを知ってると・・・うん。
「でも、直感で分かるものかしら・・・？」

「どちらかと言えば、「女の勘」ですね」
「女の勘だったとしても、凄すぎません？」
「あら、悠馬くん。知らないの？女の勘は時として鋭くなって良く当たるものよ」
「そ、そうか・・・」
女の勘の恐ろしさに俺は、背筋が凍るような寒さを覚えた。
一瞬、眠気が吹き飛んだが、それも一瞬で終わり、再び眠気が襲いかかってきた。
とりあえず、椅子に座り、背もたれに身体を預ける事にした俺。これで、寝たらそん時はそん時と腹を括ろう。
「何者です？お兄様に刃を向ける不届き者は！」
「深雪」
達也に魔法を向けられたって憤慨する深雪の顔に達也は手を添える。
「心配いらない。今回はそこで船を漕いでいる奴が俺に向けられた魔法を反射したが、俺は闇討ちに頼らねばならないような軟弱者に傷つけられるほど弱くはない」
「その通りですが・・・」
それを言われたら、流石の深雪でも反論出来ないよな。
「大した自信よね」
「しかし、彼の実力なら納得です」
「まぁ、達也ですから」
達也だから、で大抵の事は解決するからな。この言葉、マジ便利。
「勿論、放置しておくつもりもない。正体が分かったら、お前にも教えるよ」
その言葉に深雪は満面の笑みを浮かべ・・・
「・・・きっとですよ、お兄様」
「あぁ、必ず」
微笑ましい兄妹の1ページでめでたしめでたし

とならないのが現実である。
「会長1つ頼みたい事があるのですが・・・」
うん？達也、君は一体、真由美に何を頼もうとしているんだ？
「何かしら？」
「新入部員勧誘週間が終わるまで、悠馬を貸してください」
「そっか～俺を借りるのか～おやすみ～・・・っておい！」
今ので、眠気が完全に吹き飛んだわ。
「どうした。とうとう睡眠欲でおかしくなったか？」
「ツッコミが随分と辛辣ですね、達也さんや。魔法による攻撃を受けてないとか言ったが、精神干渉系魔法でも受けてんじゃねぇの？」
「お兄様にそのような事があろう筈がございません。これは、いつものお兄様です」
深雪さんや。それだと、達也が俺に対して辛辣なのがデフォだと言ってらようなもんなんだが。
「で、なんで俺を借りたいんだ？闇討ちに頼らないといけないような

軟弱者には負けないんだろ？」
「そうだな。だが、お前が居るとそんな奴等の対処が楽になるのもまた事実だ」
まぁ、反射するから自分で放って自分で傷つく訳だからな。
「良いわよ。どうせ、悠馬くんは新入部員勧誘週間の間は外でのお仕事がメインだし。そこに達也くんの護衛が加わっても問題ないわ」
「俺が問題大アリだわ。一体、どれだけ仕事を増やせば気が済むんだ」
巡回の応援をしながら、修理の手配やら苦情の受付も対応させられてるってのに、そこに達也の護衛？俺に過労死街道でも爆走させたいの？
「私にセノ○ックを私名義で郵送させようとした罰よ。黙って、私の言う事、聞きなさい」
それ言われちゃ、何も言い返せねぇよ。
「お前は何バカな事をしようとしたんだ」
達也が呆れたような目で俺を見る。
結局、俺は真由美の指示に抗う事は出来ず、新たに達也の護衛という仕事が追加されたのだった。げせぬ
◇◇◇
「随分と変わった風紀委員の一年生が居ると？」
「はい。1ーEの司波達也。二科生で風紀委員というのもかなりのイレギュラーのですが・・・」
都内某所。此処に居るには似つかわしくない第一高校の生徒と眼鏡を掛けた男性が対談していた。
「ほう・・・それは、だいぶ反発を生みそうだね。特にあの特権意識に凝り固まった一科生が二科生に取り締まられるなどプライドが許さないだろう」
「その通りです。さらに、先日の事件が拍車をかけてまして・・・」
第一高校の生徒が言っているのは、達也が剣術部の部員を逮捕した事件の事だ。
その事件の詳細を第一高校の生徒は、眼鏡を掛けた男性に伝える。
「二科生とは思えない彼の戦いぶりに生徒の耳目は集まりました

が・・・」
「むしろ、特異なのは高周波ブレードを抑えた波動・・・か」
「そうです。まるで・・・希少鉱石アンティナイトを使用したキャスト・ジャミング・・・」
「・・・高い魔法力や高価なアンティナイトなしに魔法を無効化する技術など社会基盤すら揺るがしかねない」
　この時、眼鏡を掛けた男性は思った。
　もし、司波という生徒がそれを実現出来ているとしたら、これ程、我々の計画に都合の良い人物が居るだろうか、と。
「しかし、見間違いという事は無いのかね」
「えぇ。そこが気になったので司波を観察していたのですが、決定的な瞬間を掴む事は出来ませんでした。ですが、それとは別に興味深い物を目撃しまして・・・」
「なんだ」
「司波は風紀委員での巡回中に良く嫌がらせを受けており、魔法による攻撃を向けられたのですが、司波と同行していた生徒がそれを時間を巻き戻すかのように跳ね返しまして・・・」
「魔法を無効化させたのではなく、魔法を反射させたというのか」
「はい」
　魔法の無効化ではなく、魔法の反射。魔法を無効化する技術はあれど、魔法を反射する技術などは聞いた事が無い眼鏡を掛けた男性は信じられないと言わんばかりに驚いていた。
（もし、それが事実ならば魔法の信頼性など無に帰す）
　魔法を無効化する技術と魔法を反射する技術。自分達からすれば、喉から手が出る程、欲しい物であった。
「その魔法を反射させた者が誰か分かるか」
「はい。1ーAの九島悠馬。実技に於いては、今年の主席入学を抑えて最高評価だそうです」
「九島・・・十師族か」
　しかし、魔法を跳ね返したのが悠馬と知り、眼鏡の男性は少しだけ顔を歪ませる。

一科生な上に十師族となると、自分達とは対極に位置するような人物だからであろう。
「司波という生徒の方は、君自身が仕掛けて確かめてくれるか？」
「分かりました」
「さらに、仲間に引き入れられれば重畳だ。その役目は同じ二科生である壬生紗耶香彼女に働いてもらう事にしよう。君の方から伝えておいてくれ」
「分かりました。九島の方はどうしますか？」
「普通に勧誘したところで首を縦に振らないだろうし、魔法を反射するとなれば僕の力も効かないだろう。もし、邪魔になるようであれば、秘密裏に殺すしかない」
「だったら、その役目は私がしましょう」
すると、さっきまでこの場に居なかった人物が突然、姿を現した。
「カオス様！」
眼鏡を掛けた男性が片膝を付き頭を垂れる。
「どうして此方に」
「様子を見に来ただけですよ。それと、九島悠馬に関しては私に任せてください」
「しかし、カオス様のお手を煩わす訳には・・・」
「構いませんよ。彼には興味があるので。では、私にはやる事があるので、これで・・・」
カオスと呼ばれた男はフッと姿を消した。
司波達也と九島悠馬。第一高校に在籍する２人の男子生徒が良からぬ者に狙われた瞬間であった。